

犬丸川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 犬丸川流域遺跡群

－大分県中津市犬丸川流域所在遺跡群の発掘調査－

中津市文化財調査報告第19集

1997年3月

中津市教育委員会

## 序 文

この報告書は、大丸川中小河川改修事業に伴い、大分県中津土木事務所の委託を受け、中津市教育委員会が昭和63年度から平成8年度にかけて実施した発掘調査の記録である。

昭和56年度から62年度にかけて実施された国道10号線中津バイパス建設に伴う調査で、大丸川周辺より権現島、樋多田、森山など多くの遺跡が確認され、大丸川流域が遺跡集中地帯として再確認された。こうした状況をうけて、今回の中小河川改修事業の実施にあたり、中津市教育委員会では大分県教育委員会及び大分県中津土木事務所と協議を行い埋蔵文化財発掘調査を実施したものである。

今回の調査は、川沿いの非常に幅がせまい範囲で調査が行われたが、重要な遺跡が多数発見された。遺構はさらに調査区外へと延びており、今後大丸川流域が注意をしなければならない地区であることを再確認した。

この報告書が学術的に活用されるとともに埋蔵文化財に対する保護と理解のため、また、郷土の歴史研究や教育に活用いただければ幸いである。

最後に、調査のご指導をいただいた諸先生方はじめ、調査にご理解とご協力いただいた大分県中津土木事務所、大分県教育委員会、ならびに地元関係者に対して、心から深く謝意を表する。

平成9年3月31日

中津市教育委員会  
教育長 前田佳毅

## 例　　言

- 一、本書は1988年度（昭和63年度）から、1996年度（平成8年度）にかけて実施した、大丸川中小河川改修工事（通称：大丸川河川改修事業）に伴う、大丸川流域遺跡群の発掘調査報告書である。
- 一、調査は大分県中津土木事務所の委託を受け、大分県教育委員会の指導の下、中津市教育委員会が主体となって実施した。
- 一、調査は現場での調査を1988年度から1994年度まで実施し、整理作業は暫時行いつつ、1993年度からは報告書刊行を目的とした整理作業を実施した。
- 一、本書の執筆は、第2章を富田修司（中津市教育委員会）、第3章の⑨及び土器観察表を高崎章子（中津市教育委員会）が、また第3章の（3）（4）を棚田昭仁（現：豊前市教育委員会）が、その他を栗焼憲児（現：豊前市教育委員会）が担当した。
- 一、遺構実測は各調査員が担当したが、その他に松本啓子（現：安岐町教育委員会）、木下秀子、大塚カツル、原田和代、是石美知子の協力を得た。
- 一、遺物実測は高崎と花崎徹（中津市教育委員会）が担当し、一部棚田が行った。製図は遺構図を金丸孝子（中津市歴史民俗資料館）が行い、遺物は高崎が行った。石器の実測・製図は栗焼による。その他、挿図、図版の作成に中野温子（中津市歴史民俗資料館）の協力を得、遺物整理は岩崎弘子、秋吉三和子（中津市歴史民俗資料館）の手を煩わせた。
- 一、遺構写真は各調査員が撮影し、遺物写真は富田が撮影した。また、空中写真は有限会社「空中写真企画」に委託した。
- 一、遺物観察表中の残存率は、完形状態に対する比であり、口径などの復元率を示すものではない。また、遺構の名称については固有名詞を使用したが、一部下記のような略記号を用いた。  
堅穴式住居跡→SH　　掘立柱建物→SB　　土壤→SK　　溝状遺構→SD　　柵列→SA  
なお図版中、遺物写真の番号は前を挿図No.、後を各地点の遺物No.を示している。
- 一、現場作業は以下の方々による。（順不同、敬称略）  
徳永賀子、古島正子、神崎文子、黒川洋美、黒川みゆき、植山京子、植山松枝、植山ヨシカ、藤原久子、城土キミ子、真辯信子、藤元日出子、松吉ハル子、吉田ユキ子、生田サチ子、田原文子、中和代、今永キク子、松本節子、杉水文代、中山トキエ、古島ユリ子、池上久子、向山チサト、近藤純子、武田まち子、長松則子、竹田スマ子、新家和哉、小野貴之、今田秀樹、畠喜代子、奥日出子、千鳥イト、奥野政子、井上巳徳、林静江、大久保国子、中野文子、岩下徳子、植山薰、小倉真理、山内マツ子、黒土勉、植山ハル子、三浦秀忠、田中史彦、杖田誠治、永松マサ子、弘山直子、種付しげみ、辛島雅美、山縣信夫、永松一二三、中野慎久、武本登美子、湯口ヒロ子、湯口一子、高橋鈴子、藤原竹子、神尾英子、黒川道子、江熊ノブ子、小山トミエ、宮瀬幸美、釣丸雪子、日野ツルエ、植山トミ子
- 一、本書の編集は渋谷忠章（大分県教育委員会）と協議し、栗焼が行った。

## 目 次

第1章 はじめに	
(1) 調査の経過.....	(1)
(2) 調査組織.....	(2)
第2章 地理と歴史的環境.....	(3)
第3章 調査の記録.....	(5)
(1) 調査の概要.....	(6)
①第1地点.....	(6)
②第2地点.....	(7)
③第3地点.....	(8)
④第4地点.....	(9)
⑤第5地点.....	(10)
⑥第6地点.....	(11)
⑦第7地点.....	(12)
⑧第8地点.....	(13)
⑨第9、10地点.....	(14)
(2) 第3地点の調査.....	(15)
(3) 第4地点の調査.....	(19)
(4) 第5地点の調査.....	(44)
(5) 第6地点の調査.....	(48)
(6) 第7地点の調査.....	(58)
(7) 石器について.....	(73)
第4章 まとめ.....	(76)

## 表 目 次

表1 第3地点出土遺物観察表.....	(18)
表2 第4地点出土遺物観察表(1).....	(42)
表3 第4地点出土遺物観察表(2).....	(43)
表4 第5地点出土遺物観察表.....	(47)
表5 第6地点出土遺物観察表.....	(57)
表6 第7地点出土遺物観察表(1).....	(70)
表7 第7地点出土遺物観察表(2).....	(71)

## 挿 図 目 次

第1図 中津市内主要道路分布図 (S=1/50000)	(1)	第31図 第4地点1号掘立柱建物跡実測図 (S=1/60)	(30)
第2図 第1地点地形図 (S=1/2500)	(5)	第32図 第4地点2号掘立柱建物跡実測図 (S=1/60)	(31)
第3図 大九川流域遺跡群調査位置図	(6)	第33図 第4地点1号棚列跡実測図 (S=1/60)	(31)
第4図 第2地点地形図 (S=1/2500)	(7)	第34図 第4地点出土遺物実測図 [1] (S=1/3)	(35)
第5図 第3地点地形図 (S=1/2500)	(8)	第35図 第4地点出土遺物実測図 [2] (S=1/2) (S=1/3)	(36)
第6図 第4地点地形図 (S=1/2500)	(9)	第36図 第4地点出土遺物実測図 [3] (S=1/3)	(37)
第7図 第5地点地形図 (S=1/2500)	(10)	第37図 第4地点出土遺物実測図 [4] (S=1/2) (S=1/3)	(38)
第8図 第6地点地形図 (S=1/2500)	(11)	第38図 第4地点出土遺物実測図 [5] (S=1/3)	(39)
第9図 第7地点地形図 (S=1/2500)	(12)	第39図 第4地点出土遺物実測図 [6] (S=1/3)	(40)
第10図 第8地点地形図 (S=1/2500)	(13)	第40図 第4地点出土遺物実測図 [7] (S=1/2) (S=1/3)	(41)
第11図 第9、10地点地形図 (S=1/2500)	(14)	第41図 第5地点遺構配置図(S=1/200) 及び溝状遺構層図(S=1/60)	(45)
第12図 第3地点遺構配置図 (S=1/200)	(15)	第42図 第5地点出土遺物実測図 (S=1/3)	(47)
第13図 第3地点1号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(16)	第43図 第6地点遺構配置図 (S=1/200)	(49~50)
第14図 第3地点2号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(16)	第44図 第6地点1~4号溝状遺構実測図 (S=1/100)	(51)
第15図 第3地点2号竪穴式住居跡実測図 (S=1/20)	(17)	第45図 第6地点1号土壙実測図 (S=1/40)	(52)
第16図 第3地点1号土壙実測図 (S=1/20)	(17)	第46図 第6地点2号土壙実測図 (S=1/40)	(52)
第17図 第3地点出土遺物実測図 (S=1/2) (S=1/3)	(18)	第47図 第6地点3号土壙実測図 (S=1/40)	(53)
第18図 第4地点遺構配置図 (S=1/200)	(21~22)	第48図 第6地点4号土壙実測図 (S=1/40)	(53)
第19図 第4地点1号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(20)	第49図 第6地点5号土壙実測図 (S=1/40)	(53)
第20図 第4地点2号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(20)	第50図 第6地点出土遺物実測図 [1] (S=1/3)	(55)
第21図 第4地点3号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(23)	第51図 第6地点出土遺物実測図 [2] (S=1/3)	(56)
第22図 第4地点4号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(24)	第52図 第7地点遺構配置図 (S=1/200)	(59~60)
第23図 第4地点5号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(24)	第53図 第7地点出土遺物実測図 [1] (S=1/3)	(64)
第24図 第4地点6、7号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(25)	第54図 第7地点出土遺物実測図 [2] (S=1/3)	(65)
第25図 第4地点8号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(26)	第55図 第7地点出土遺物実測図 [3] (S=1/3)	(66)
第26図 第4地点9号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(26)	第56図 第7地点出土遺物実測図 [4] (S=1/3)	(67)
第27図 第4地点10号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(27)	第57図 第7地点出土遺物実測図 [5] (S=1/3)	(68)
第28図 第4地点11号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(27)	第58図 第7地点出土遺物実測図 [6] (S=1/3)	(69)
第29図 第4地点12号竪穴式住居跡実測図 (S=1/60)	(28)	第59図 大九川流域遺跡群出土石器実測図 [1] (S=2/3)	(74)
第30図 第4地点6号土壙実測図 (S=1/20)	(29)	第60図 大九川流域遺跡群出土石器実測図 [2] (S=2/3)	(75)

## 図版目次

- 図版1 大九川流域遺跡群第3地点、第4地点、第5地点遺景（東側上空より）
- 図版2 大九川流域遺跡群第7地点、第6地点遺景（南側上空より）
- 図版3 1；大九川流域遺跡群第1地点、第2地点全景（北側より）  
3；大九川流域遺跡群第3地点全景（南側より）
- 図版4 1；第3地点2号堅穴式住居跡全景（東側より）  
3；第3地点1号土壙全景（西側より）
- 図版5 大九川流域遺跡群第4地点余景（上空より）【その1】
- 図版6 大九川流域遺跡群第4地点全景（上空より）【その2】
- 図版7 1；第4地点10号堅穴式住居跡全景（西側より）  
3；第4地点7号堅穴式住居跡土壙検出状況
- 図版8 1；第4地点7号堅穴式住居跡遺物検出状況  
3；第4地点遺物検出状況（下城式土器）
- 図版9 1；大九川流域遺跡群第5地点全景（南側より）  
3；第5地点1号溝状遺構全景（北側より）
- 図版10 1；大九川流域遺跡群第6地点全景（東側より）  
3；第6地点1～4号溝状遺構遺物検出状況（東側より）  
5；第6地点5号土壙遺物検出状況（南側より）
- 図版11 1；第6地点西側全景（東側より）  
3；第6地点2号土壙完掘状況（東側より）  
5；第6地点西側包含層出土遺物
- 図版12 大九川流域遺跡群第7地点東側遺景（南側上空より）
- 図版13 大九川流域遺跡群第7地点東側全景（居館上空より）
- 図版14 1；第7地点東側全景（東側より）  
3；第7地点1、4号溝状遺構土壙断面
- 図版15 1；第7地点1号溝状遺構遺物検出状況（北側より）  
3；第7地点5号溝状遺構全景（北側より）
- 図版16 1；第7地点東側全景（東側より）  
3；第7地点6号溝状遺構遺物検出状況（東側より）
- 図版17 1；第7地点4号土壙全景、3号溝状遺構下層検出状況  
3；第7地点1号井戸全景（南側より）
- 図版18 大九川流域遺跡群出土遺物（1）
- 図版19 大九川流域遺跡群出土遺物（2）
- 図版20 大九川流域遺跡群出土遺物（3）
- 図版21 大九川流域遺跡群出土遺物（4）
- 図版22 大九川流域遺跡群出土遺物（5）
- 図版23 大九川流域遺跡群出土遺物（6）
- 図版24 大九川流域遺跡群出土遺物（7）
- 図版25 大九川流域遺跡群出土遺物（8）
- 図版26 大九川流域遺跡群出土遺物（9）
- 図版27 1；福島遺跡墳墓群全景（南側より）  
3；福島遺跡1号堅棺墓【小児用】（東側より）
- 図版28 1；中須遺跡全景（上空より）  
3；中須遺跡2号土壙遺物出土状況（南側より）
- 図版29 1；前田遺跡第2地点全景（東側より）  
3；前田遺跡第2地点15号土壙（井戸？）全景（西側より）
- 図版30 1；十前垣遺跡余景（南側より）  
3；前田遺跡1号土壙墓全景（南側より）
- 図版31 大九川流域周辺遺跡出土遺物
- 2；第1地点土壙堆積状況  
4；第3地点1号堅穴式住居跡全景（北側より）  
2；第3地点2号堅穴式住居跡カマド検出状況  
4；第3地点包含層遺物検出状況
- 2；第4地点10号堅穴式住居跡カマド検出状況  
4；第4地点7号堅穴式住居跡遺物出土状況  
2；第4地点1号横列跡全景（南側より）  
4；第4地点6号土壙遺物検出状況（小谷式土器）  
2；大九川流域遺跡群第5地点全景（北側より）  
4；第5地点1号、2号溝状遺構土壙断面  
2；第6地点1～4号溝状遺構検出状況（東側より）  
4；第6地点5号土壙全景（南側より）
- 2；第6地点2号土壙遺物検出状況（東側より）  
4；第6地点西側遺物包含層検出状況（東側より）
- 2；第7地点1、4、5号溝状遺構全景（南側より）  
4；第7地点2号溝状遺構遺物検出状況（北側より）  
2；第7地点3号溝状遺構全景（東側より）
- 2；第7地点東側全景（東側より）  
4；第7地点5号土壙遺物検出状況（東側より）  
2；第7地点3号溝状遺構下層土器群検出状況  
4；第7地点1号井戸完掘状況（南側より）
- 2；福島遺跡10号土壙墓検出状況（南側より）  
3；福島遺跡2号土壙遺物出土状況（北側より）  
2；中須遺跡3号堅穴式住居跡全景（南側より）  
4；中須遺跡10号堅穴式住居跡遺物出土状況  
2；前田遺跡第2地点3号堅穴式住居跡全景（南側より）  
4；前田遺跡第2地点1号土壙遺物出土状況  
2；前田遺跡全景（東側より）  
4；前田遺跡1号井戸遺物出土状況（北側より）

## 第1章 はじめに

### (1) 調査の経過

九州の東部に位置する大分県の地形は、西に九州の屋根と呼ばれるくじゅう連峰を抱えるなど、全体に山岳地形の占める割合が高いことができる。一般にこうした山岳地形は平野部に比べ降水量が多く、中でも英彦山系、津江山系、くじゅう山系、祖母・傾山系の年間降水量は2,400mmを越える。こうした自然条件を考慮し、大分県では各地で治水を目的とした河川改修事業を推進しており、八面山に源を発する犬丸川でも中小河川改修事業が計画されるに至り、1985年から事業が実施されることとなった。

他方、1981年～1987年にかけて実施された一般国道10号線中津バイパスの建設に伴う埋蔵文化財発掘調査では、犬丸川周辺で多くの遺跡を確認し、従来の調査成果と併せ犬丸川流域の歴史的重要性を改めて認識させることとなった。

こうした状況を踏まえ、中津市教育委員会では大分県教育委員会と協議を行い、計画された犬丸川中小河川改修事業の実施に際し、中津市大字加来から野依に至る区間について埋蔵文化財の調査対象区間とし、大分県中津土木事務所と事前協議を行うこととした。

事前協議は当該年度毎に実施し、確認調査の結果に従い年度毎に委託契約を交わした。各年度毎の調査地点及び、事業内容は以下のとおりである。

- 1988年度（昭和63年度）第1地点、第2地点（確認調査）
- 1989年度（平成1年度）第3地点（本調査）、第4地点（確認調査）
- 1990年度（平成2年度）第4地点（本調査）
- 1991年度（平成3年度）第5地点（本調査）、第6地点、他（確認調査）
- 1992年度（平成4年度）第6地点、第7地点（本調査）
- 1993年度（平成5年度）第6地点（本調査）、第8地点（確認調査）
- 1994年度（平成6年度）第9、10地点（確認調査）、遺物整理
- 1995年度（平成7年度）遺物整理
- 1996年度（平成8年度）遺物整理、報告書刊行

なお、事前協議の過程において隣接する下毛郡三光村大字森山に所属する部分の取り扱いについて問題となった。本来、埋蔵文化財の調査は原因者の委託により、遺跡の所在する当該教育委員会により実施されるべきであり、そうした原則に従えば、三光村所在の遺跡については三光村教育委員会もしくは、大分県教育委員会により調査がなされるべきである。しかし、本調査のテーマが犬丸川流域の歴史的考察であることや、明らかに同一遺跡であるためその連續性の問題、さらに大分県教育委員会と三光村教育委員会の調査体制の問題などから、大分県教育委員会の了解を得て一括して中津市教育委員会で調査を実施することとした。結果的には、そのことが調査をよりスムーズに進めることとなり、さらに、近年取り沙汰されている一定地域における、埋蔵文化財担当職員の相互派遣の問題に対するテストケースとなった。同一遺跡を行政区の違いだけで機械的に分割して調査する手法は見直すべきで、遺跡を第一義に考えた方法を模索すべきである。

## (2) 調査組織

調査組織は以下のとおりである。

調査責任者	古野代代	中津市教育委員会 教育長 (1988年12月23日まで)
	黒川英敏	タ 教育長職務代理者 (1989年2月8日まで)
	武信 元	タ 教育長 (1993年1月31日まで)
	高橋忠隆	タ タ (1997年1月31日まで)
	前田佳穂	タ タ (1997年2月1月から)
調査事務	下原恒利	タ 市民文化センター館長 (1989年3月31日まで)
	石井邦弘	タ タ (1990年3月31日まで)
	宮崎俊幸	タ タ (1992年3月31日まで)
	土井 勝	タ タ 館長兼文化財係長 (1995年1月31日まで)
	麻川尚良	タ タ 館長 (1995年2月1日から)
	山本民子	タ タ 文化会館係長 (1989年3月31日まで)
	竹下 力	タ タ (1990年3月31日まで)
	塩谷十起雄	タ タ (1991年3月31日まで)
	上田一孝	タ タ (1992年3月31日まで)
	佐藤輝正	タ 文化財係長 (1994年4月1日~8月31日まで)
	田中布由彦	タ 文化財係長 (1994年9月1日から)
	タ タ	文化財係 (1994年8月31日まで)
	宮垣和恵	タ 文化財係 (1994年8月31日まで)
	渡辺明美	タ (1992年9月30日まで)
	金丸孝子	タ (1992年10月1日から)
調査員	清水宗昭	大分県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係係長 (1989年3月31日まで)
	渋谷忠章	タ 第二係係長 (1989年4月1日から)
	高橋 徹	タ 第二係 (1992年3月31日まで)
	玉永光洋	タ タ (1992年4月1日から)
	松本啓子	タ タ (1989年度 現:安岐町教育委員会)
	栗焼恵児	中津市教育委員会 市民文化センター文化財係 (1994年3月31日まで 現:豊前市教育委員会)
	棚田昭仁	タ タ (1992年3月31日まで 現:豊前市教育委員会)
	富田修司	タ タ (1992年4月1日から)
	高崎章子	タ タ (1994年9月1日から)
	花崎 徹	タ タ ( )

なお、賀川光夫（別府大学教授[現:名誉教授]）、小田富士雄（福岡大学教授）、後藤宗俊（別府大学教授）の各氏には終始調査について指導を受けた。また大分県教育委員会文化課諸氏及び、近隣市町村の文化財担当者諸氏には有益な助言をいただいた。さらに大分県中津土木事務所工務課の歴代担当諸氏には工期の調整、予算措置など細部にわたり理解と協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。

## 第2章 地理と歴史的環境

### 犬丸川流域の地理的環境

犬丸川流域遺跡群は、現在の行政区画によれば大分県中津市に属し、古代以来のそれによれば、豊前国下毛郡にあたる。中津市は、大分県の北端に位置し、東は宇佐市と、南は下毛郡三光村と、西は山国川を境として福岡県築上郡と接し、北は遠浅の海が開け周防灘から瀬戸内海に連なっている。人口は約6,800人を数え、市域は55.67km<sup>2</sup>余りの中核都市である。行政的にみれば、城下町時代の中津町を中心として豊田村、大江村、小楠村、大幡村、鶴居村、如水村、和田村、三保村、今津町と明治以来順次合併をし、1955年に現在の市域となった。

地形的にみれば、起伏の少ない平坦な地形である。下毛原台地と呼ばれる洪積台地が中央に広がり、西部に山国川の活動による沖積平野である中津平野が大部分を占めている。東端に、長峰台地と下毛原台地の間に犬丸川が流れ、小冲積層を形成している。南東の端には八面山よりつづく旧耶馬渓溶岩流の末端である三保山丘陵がある。

犬丸川は、下毛郡三光村八面山に源を発し、八面山の北東部を北西方向に流れ、三保山丘陵を取り巻くようにして途中からその流れを北東方向に転じて、長峰台地と下毛原台地との間に侵食谷と比較的明瞭な河岸段丘を作りながら、河口付近で五十石川と合流して周防灘に注いでいる。

### 犬丸川流域の歴史的環境

旧石器時代の遺跡については、近年発見例が増えているとはいえ才木遺跡など断片的にすぎない。縄文時代になると遺跡の数は増大する。時期としては後期の遺跡が大半を占めており、代表的な遺跡として棒垣遺跡があげられる。この遺跡のすぐ側には入垣貝塚があり、集落と貝塚で構成された遺跡である。犬丸川流域には、長久寺貝塚、植野貝塚等が点在している。

弥生時代の遺跡も多く、森山遺跡、樋多田遺跡、大坪遺跡、福島遺跡、野依遺跡などがあげられる。森山遺跡は三保山丘陵裾部に、福島遺跡は、ボウガキ遺跡を含む台地上にあり、それぞれの遺跡は犬丸川を挟んで低地に位置する樋多田・大坪遺跡、犬丸川流域遺跡と対峙する。樋多田遺跡、大坪遺跡、犬丸川流域遺跡は、縄文時代から奈良あるいは中世に至るまでの複合遺跡でもある。

古墳時代前期、中期については不明な点が多く、唯一鍋島孤塚古墳を数えるのみである。しかし、後期になると様相一変し、三保山丘陵末端に森山横穴墓群、岩崎横穴墓群、城山古墳群・横穴墓群、洞上横穴墓群等がある。集落跡としては前田遺跡第2地点、大坪遺跡、樋多田遺跡、中須遺跡などがあり、横穴墓・古墳群と各集落遺跡との関係については近年の調査により一定の方向が示されつつある。丘陵にある伊藤田・野依窯跡群での須恵器の生産はこの時期開始された。

奈良時代には、野依遺跡、森山火葬墓等があり、野依地区には条里跡があったことが知られており、生活の場が平野部に求められるようになってきた時期である。また、犬丸川流域には中世城館が多く、大畠城、山中城、上・下伊藤田城、野依城、犬丸城などがあげられる。

以上、犬丸川流域に限って遺跡を列挙することによって略述をした。最後に、台地上では近年下毛郡衙と目される長者屋敷遺跡が発見された。別に、福島では祭祀を含む遺跡が発見されており、長者屋敷遺跡から嵩神社、犬丸川を抜ける古代官道付近は、今後の展開が注目される地域である。



第1図 中津地方主要遺跡分布図 (S = 1/50000)

- |             |             |          |            |            |
|-------------|-------------|----------|------------|------------|
| 1. 大丸川流域遺跡群 | 2. 沖代条里     | 3. 中津城   | 4. 落枝進宿館跡  | 5. 高瀬遺跡    |
| 6. 豊田小学校遺跡  | 7. 三口遺跡     | 8. 相原廃寺  | 9. 相原山首遺跡  | 10. 帆旗邱古墳  |
| 11. 長者屋敷遺跡  | 12. 鹿神社     | 13. 佐知遺跡 | 14. 百留横穴墓群 | 15. 原遺跡    |
| 16. 大坪遺跡    | 17. 桶多田遺跡   | 18. 草山遺跡 | 19. 倭島遺跡   | 20. ホウガキ遺跡 |
| 21. 洞ノ上窯跡   | 22. 伊藤田城山窯跡 | 23. 夜鳴窯跡 | 24. 踏ヶ迫窯跡  | 25. ホヤ池窯跡  |
| 26. 才木遺跡    | 27. 前田遺跡    | 28. 横野貝塚 | 29. 十前垣遺跡  | 30. 中須遺跡   |

## 第3章 調査の記録

### (1) 調査の概要

調査は前述のごとく、先行して実施されていた一般国道10号線中津バイパス関係の調査結果と、洞ノ上地区団体営岡場整備事業及び、野依地区県営岡場整備事業の結果、並びにボウガキ遺跡での調査成果を参考として実施した。したがって、こうした調査成果を考慮し事前に調査地区的設定を行うこととし、それ以外については確認調査の結果、必要に応じて調査地区を設定した。

#### ① 第1地点

##### i) 調査位置

下毛郡三光村大字森山82-1番地、82-2番地、外

##### ii) 調査面積

2,932m<sup>2</sup>

##### iii) 調査経緯

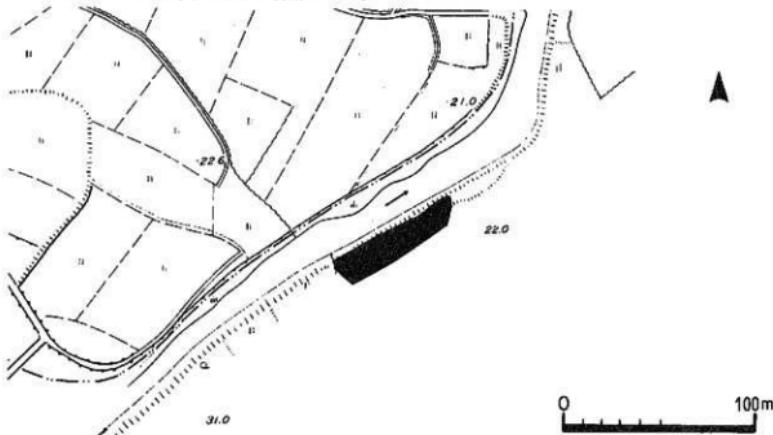
周辺では前述のとおり、一般国道10号線中津バイパス関係の調査で極多田遺跡や椎現島遺跡などが確認されており、地形的にも関連する遺跡の広がりが考えられたため、調査地区を設定した。また、河川に接した地理的条件による特徴的な地層を確認する意味で、手掘による調査を実施した。

##### iv) 調査概要

調査は地形を考慮して、都合6本のトレントを設定して実施した。調査の結果、若干の遺物は検出されたものの、特に遺構などは検出されなかった。また、土層の観察から河川に面した地点で、はかなり厚く水堆性の二次堆積層が見られた。

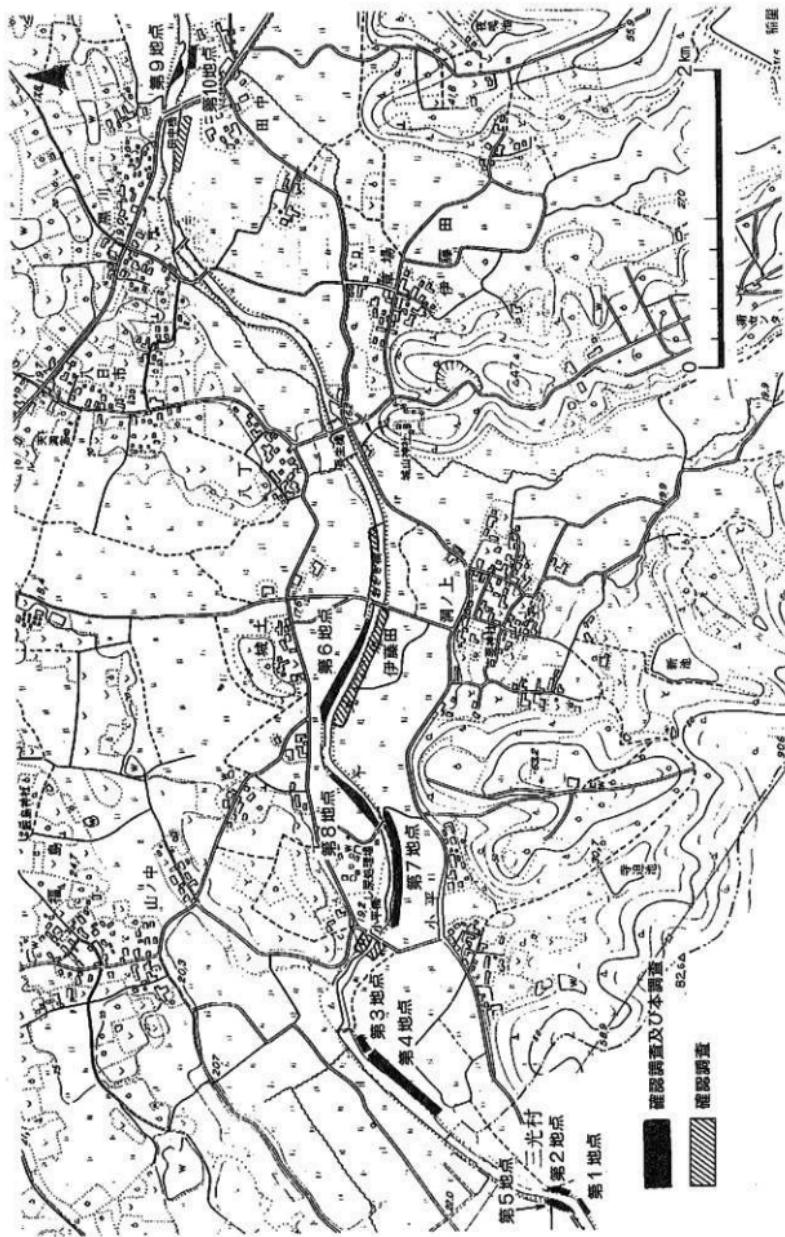
##### v) 調査所見

特に本調査の必要はないとの判断された。



第2図 第1地点地形図(S=1/2500)

第3圖 大丸川流域調査位置図



②第2地点

i) 調査位置

下毛郡三光村大字森山5番地、6番地、7番地

ii) 調査面積

2,706m<sup>2</sup>

iii) 調査経緯

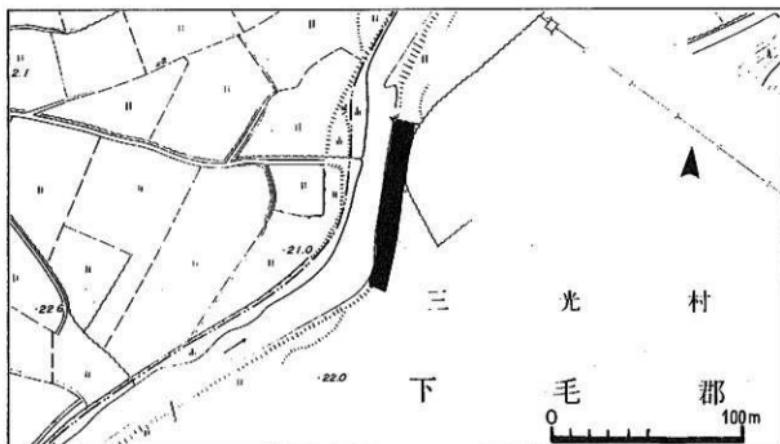
前述の権現島遺跡の北面にあたることから、遺構の広がりが予想されたため調査地区を設定した。権現島遺跡では中世の所産と考えられる溝状遺構や、縄文時代後期の包含層が確認されており、第2地点においても関連する遺構の存在が十分予想された。

iv) 調査概要

調査は権現島遺跡での所見を考慮し、都合9本のトレーナーを設定して、かなり密な確認調査を行った。なお、ここでも手掘による作業を行ったが、これは縄文時代後期の包含層を意識したものである。

v) 調査所見

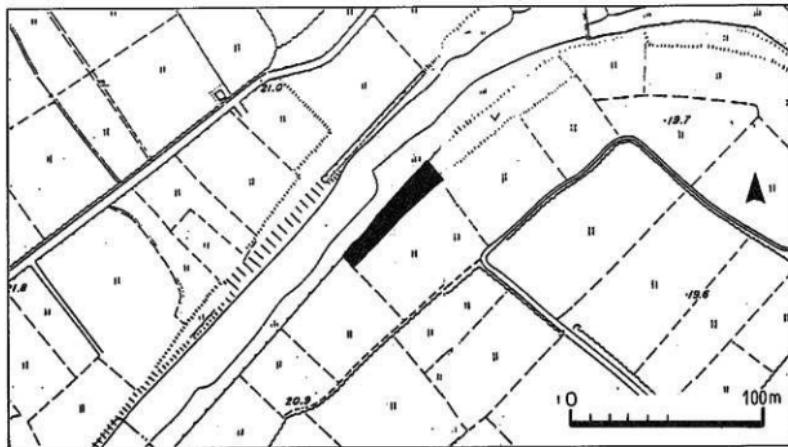
調査の結果、権現島遺跡に共通する所見を得ることができず、本調査の必要はないものと判断された。ただ近接する第1地点とは異なり、地山はかなりしっかりした赤褐色土をベースとしていることから、続く調査地点に望みを持たせた。



第4図 第2地点地形図(S=1/2500)

### ③第3地点

- i) 調査位置  
中津市大字福島389番地～393番地
  - ii) 調査面積  
240m<sup>2</sup>
  - iii) 調査経緯  
1989年度の事前協議で、本地点を含む一帯については遺跡の立地する可能性が低いと考えられていたが、対象面積が全体で10,000m<sup>2</sup>にも及ぶことから、右岸左岸ともとりあえず確認調査を実施することとした。
  - iv) 調査概要  
調査はとりあえず時間的に緊急を要する右岸下流の地点について、重機による確認調査を実施することとした。  
また、左岸については右岸の結果次第で、重機による確認調査を実施することとした。
  - v) 調査所見  
調査の結果、右岸では5世紀代とみられる土師器の高杯と、竪穴式住居跡を確認したため、ここを第3地点とし急遽本調査を実施することとした。  
また、左岸については後日確認調査を行った結果、遺物・遺構などは全く確認できなかった。



第5図 第3地京地形図( $S=1/2500$ )

#### ④第4地点

##### i) 調査位置

中津市大字福島394番地～396番地外  
下毛郡三光村大字森山1番地、3番地外

##### ii) 調査面積

3,319m<sup>2</sup>

##### iii) 調査経緯

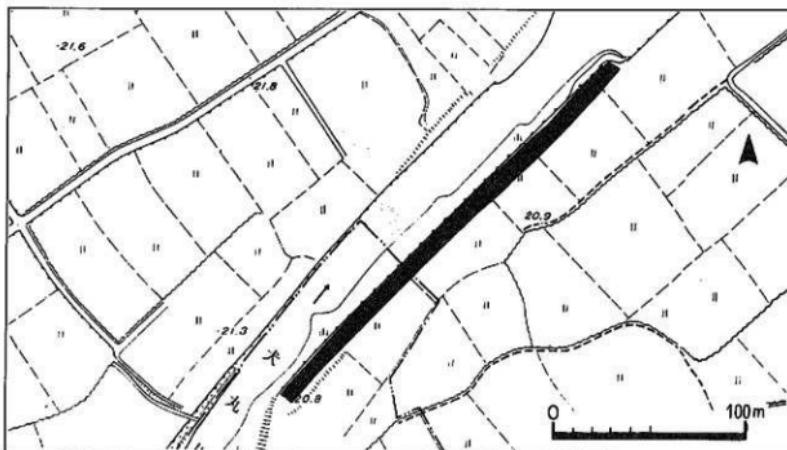
第3地点での調査結果を受け、急遽その上流を第4地点として確認調査を行うこととした。特に、中津市域では未発見の5世紀代の集落が存在することは確実であったため、その検出に全力を挙げた。

##### iv) 調査概要

第3地点での反省を踏まえ、手掘により確認調査を実施した。調査は全体にまんべんなく幅2mのトレンチを8本設定し、遺構の検出に努めた。調査は全体が水堆性の二次堆積土であるため遺構面の把握が容易ではなく、その検出に神経を振り減らしながら、慎重に行った。

##### v) 調査所見

調査の結果、各トレーニチで多くの遺物と遺構を確認できた。特に注目されたのは景德鎮窯の合子で、上下揃った完形の秀品である。また管玉や石鏸、土師器の高壊なども出土し、弥生時代から中世に至る複合遺跡が存在することが確認された。



第6図 第4地点地形図(S=1/2500)

⑥第5地点

i) 調査位置

中津市大字加来763-1番地、787番地外

ii) 調査面積

1,110m<sup>2</sup>

iii) 調査経緯

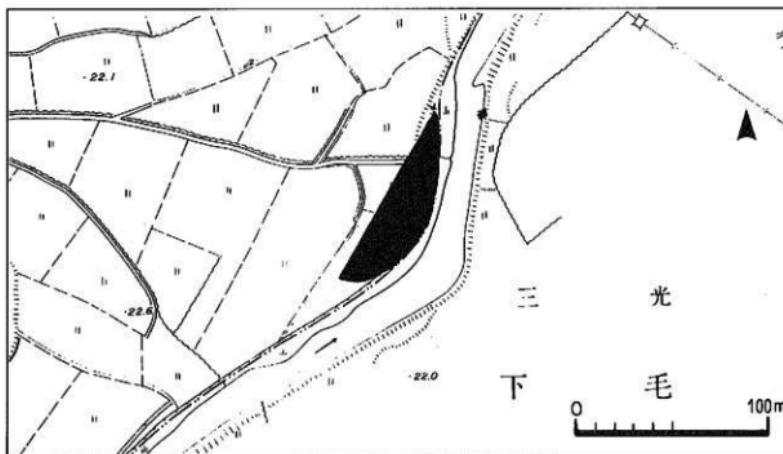
対岸の第2地点では権現島遺跡につながる遺構を検出することはできなかったが、第5地点とした本地区は極多田遺跡と接しておらず、弥生時代中期もしくは、古墳時代後期の集落跡が確認されるものと推定された。また、場合によっては縄文時代晚期の自然流路も視野に入れての調査となった。

iv) 調査概要

重機により、都合5本のトレンチを設定して確認調査を実施した。また河川の際では、河床近くで流木が確認できたため、縄文時代晚期の自然流路を意識し、一部掘り下げを行った。

v) 調査所見

調査の結果、幅1m程の溝状遺構2条を確認したため、本調査を実施することとした。また縄文時代晚期の自然流路については、地山面での土層変化が認められず、さらに、河床近くで確認できた流木も包含層を伴わないことから、第5地点の方向へは流れていなかつたと判断された。



第7図 第5地点地形図(S=1/2500)

## ⑥第6地点

### i) 調査位置

中津市大字伊藤田3637-1番地、3642番地外

### ii) 調査面積

5,052m<sup>2</sup>

### iii) 調査経緯

本地点は、近接する北側の丘陵上に「城土の地下式塙」(市指定史跡)が所在することや、対岸には中世(12~13世紀)の居館である前田遺跡や、前田遺跡第2地点が所在することから、調査地区として設定した。

また、対岸(右岸)についても確認調査を実施した。

### iv) 調査概要

調査は地形に沿ってトレンチを設定し、重機により実施した。しかし、以前既に、一度護岸工事を実施しており、幅10m近い調査区を設定したもの、現護岸工から3m以上は搅乱されていた。

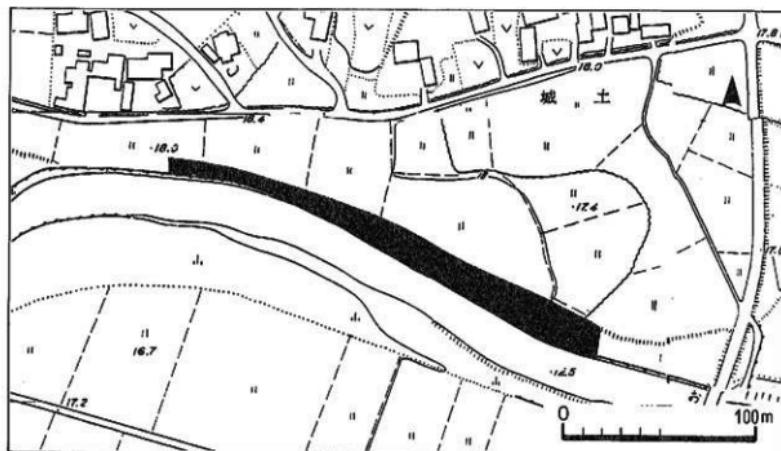
対岸についても重機による確認調査を実施したが、大部分が河川敷であり遺存状況はよくなかった。

また、尾崎橋下流左岸についても重機による確認調査を実施した。

### v) 調査所見

予想通り中世の瓦器碗など、まとまった資料を得ることができた。ただ、地点によってかなりばらつきがあり、第4地点の様な全面に遺構を確認できるような状態ではないため、部分調査も検討したが、全体の把握が必要であると判断し全面調査とした。

対岸の河川敷及び、尾崎橋下流については遺構・遺物は検出できなかった。



第8図 第6地点地形図(S=1/2500)

⑦第7地点

i) 調査位置

中津市大字福島2~25番地外

ii) 調査面積

4,212m<sup>2</sup>

iii) 調査経緯

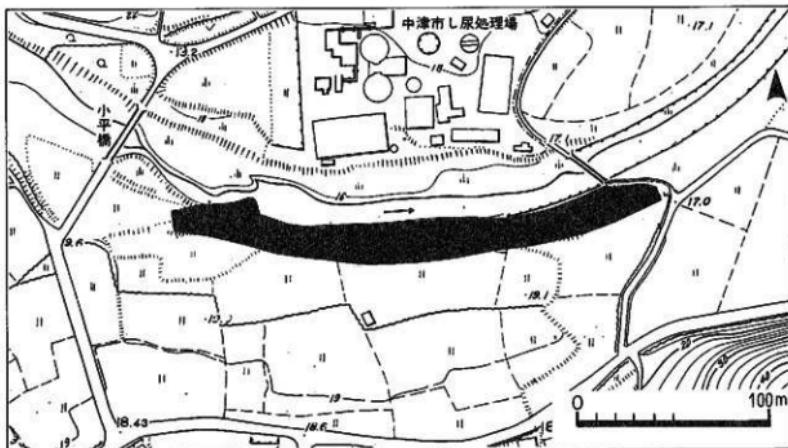
第7地点については、北側の丘陵上に縄文時代後期の貝塚と集落がセットで確認されたボウガキ遺跡（大分県指定史跡）が所在し、特に貝塚部分から左岸までは20m程度しかないため、調査地点として設定した。

iv) 調査概要

調査は小平橋を中心右岸、左岸共に手堀により実施した。これは前述のごとく、縄文時代の造構を意識したもので、河川流域という地理的特殊性を考慮したものであった。しかし左岸側は表土下に拳大の河原石を含む疊層で構成されており、貝塚の立地する地層より一段低いものと考えられた。

v) 調査所見

調査の結果、小平橋右岸下流で黒耀石片や縄文土器片を検出したため、地形を考慮し、ここから大免橋までを対象として、本調査を実施することとした。ただし、本調査の結果主体は中世の居館であった。



第9図 第7地点地形図(S=1/2500)

⑧第8地点

i) 調査位置

中津市大字福島1444番地～1454番地

ii) 調査面積

2,931m<sup>2</sup>

iii) 調査経緯

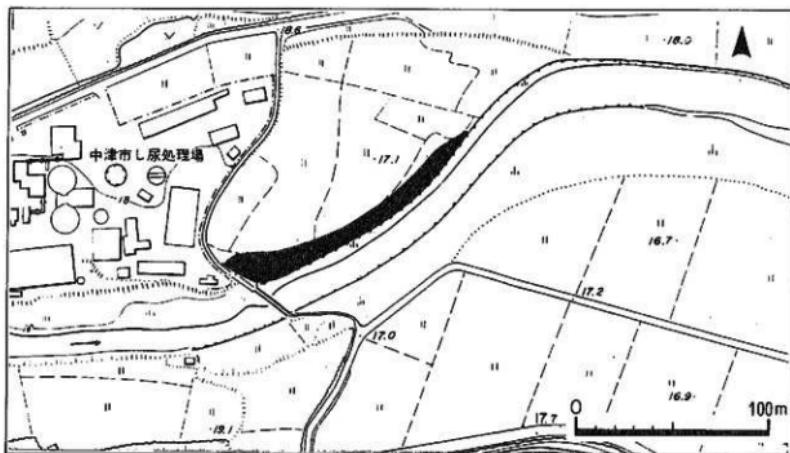
対岸の第7地点の調査結果及びに、第6地点から続く立地条件を考慮して、調査地点を設定した。また後背地はボウガキ遺跡が立地する丘陵であり、弥生時代遺跡の存在も確認されていることから、関連遺跡の存在が十分予想された。

iv) 調査概要

調査は重機により幅2m程のトレンチを、地形に沿って縦断する形で行った。調査地点の河川側は高さ1m程の土手を築き、簡易の堤防としていたため既に擾乱されていた。したがって調査はこの土手の内側に限って行う事とした。調査区全体は水田であったが、表土下は小礫を含む砂質土がベースとなっており、常に水が湧いている状況であった。

v) 調査所見

結果としては造構・遺物は検出できず、本調査の必要はないとの判断された。



第10図 第8地点地形図(S=1/2500)

⑨第9・10地点

i) 調査位置

中津市大字伊藤田3643番地外

ii) 調査面積

4,400m<sup>2</sup>

iii) 調査経緯

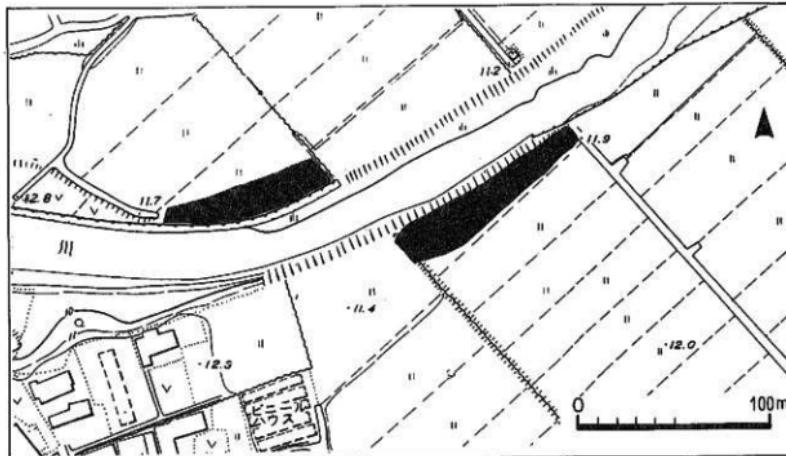
本地点の南東に近接する野依では、12世紀後半～13世紀中頃の瓦器碗や土師器、青磁等が確認されていることから、川をはさんで第9地点と第10地点の二地点を設定して調査を行った。

iv) 調査概要

調査は重機による掘削とし、第9地点に3本、第10地点に6本のトレンチを設定した。第9地点は、後世に埋め立てられた場所で、遺構、遺物とも検出できなかった。第10地点では、40cmほど下げたところで河原石が多量に出土した。このため、以前は氾濫原であったと判断した。

v) 調査の所見

調査の結果、両地点ともこれ以上の調査の必要なしと判断した。



第11図 第9、10地点地形図(S=1/2500)

## (2) 第3地点の調査

### 【遺跡の概要】(第12図、図版3)

犬丸川流域の調査で特に問題となったのは、本地域に所在する黒川古墳、城山古墳、岩井崎横穴群、城山横穴群、さらに伊藤田窓跡群といった墳墓群、ならびに生産遺跡を構成した集団の集落がどこに存在したかということであった。この課題については、1984年から1988年にかけて実施された、洞ノ上地区的面積整備事業に伴う発掘調査で、いくつかのテーマに基づいた試みがなされてきた。その結果、前田遺跡第2地点と呼ばれる6世紀前半～7世紀後半の集落跡で、その一端を窺い知る成果を得る事はできたが、結論を得るには至っておらず、本調査の実施はそうした意味からも注目された。

第3地点は犬丸川が東進する屈曲点手前に位置し、第2地点から約500m下流にある。本来この下流域を一括して1つの調査区を設定すべきであったが、事業の都合上、この部分だけを第3地点として調査を行った。調査区は最大幅6m余り、総延長50m程の狭い区域に限定されたものとなつたが、6世紀後半の竪穴式住居跡2軒、土壙1基などを検出することができた。このことにより、本流域で同時代の集落跡が所在することが確実となり、その後の調査に一定の方向性を与えることとなった。

### 【遺構と遺物】

#### ① 竪穴式住居跡

何れも主軸を北方向に向け併行して建てられている。

##### SH-01 (第13図、図版3)

南半は調査区外で未調査であるが、一辺4.9m程の方形プランをもつ、竪穴式住居跡である。遺存状況は比較的良好く、住居跡の壁は深さ15cmを測り若干の遺物を伴う。主柱穴は4本で構成されると考えられるが、内2本は調査区外のため未検出である。柱穴は何れも径35cm、深さ40cm程度、カマドは検出できなかった。

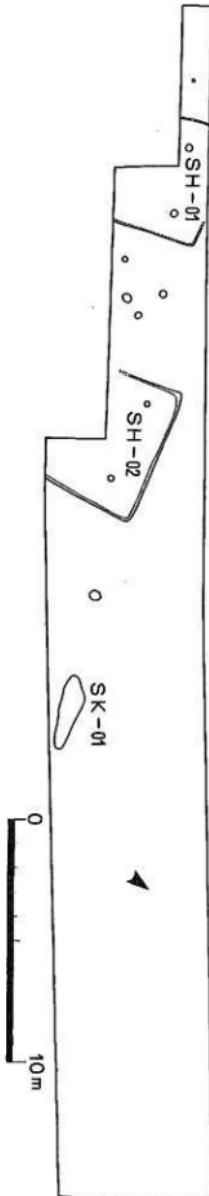
##### 遺物 (第17図、表1、図版18)

土器器の甕(1、2)、桶(4)がある。甕は何れも小片で、全体を知ることはできない。桶はやや大型ながら手づくねで作られており、外面は指圧痕を明瞭に残す。なお3は弥生中期の甕の底部で、流れ込み遺物である。

##### SH-02 (第14図、図版4)

やはり南半は調査区外で、未検出である。一辺5.5mの方形プランを成し、SH-01に比べ一回り大型のものである。深さは17cm程度で、北辺にカマドが構築されている。主柱穴は4本と推定されるが、内2本は調査区外で、検出された柱穴の規模は径25cm前後深さ15cm程

第12図 第3地点調査記録図(S-1/200)



である。

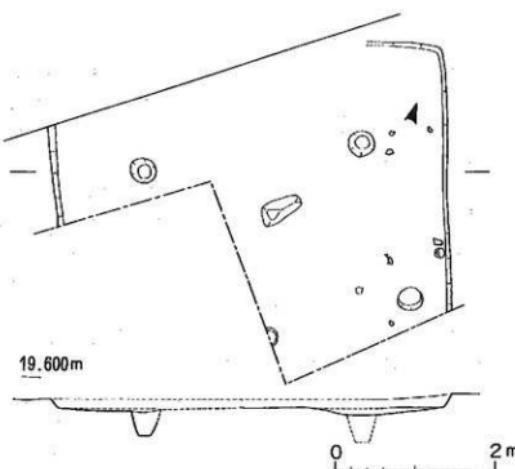
カマド（第15図、図版4）は袖部分を明瞭に検出し得なかつたが、袖先端に埋められた河原石の立石と、 $60 \times 40\text{cm}$ の範囲で火床面を確認したため、カマドと認識された。支脚には土師器の椀（5）を伏せて二次的に利用しており、左袖部分に添えるように須恵器の壺身（7）がみられた。カマドの廃棄に際して、特別な行為は認められない。こうした袖先端に河原石を用い、立石を行うのは豊前地域に一般的な在り方で、一つにカマドの補強と言った意味合いをもつと考えられる。また、場合によつてはこの立石を支脚として、アーチ状に横長の河原石を渡すものもよくみられ、カマド前面を石で組んでいる。カマド内の支脚は、細長い河原石を用いるのが一般的で、土器を二次的に利用する例はあまり多くない。また、カマドの使用を止めたとき“カマド封じ”とも言うべき行為を見ることができ、当時の精神文化を考えるうえで興味深い。

遺物（第17図、表1、図版18）  
カマド付近を中心に、前述のような遺物を検出できた。他には須恵器の壺蓋（6）等もあり概ね6世紀後半の年代を与えることができる。

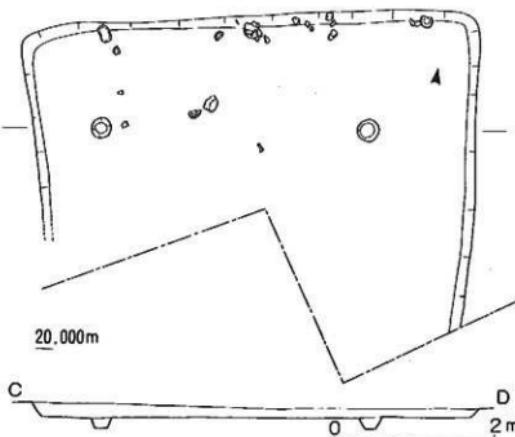
## ②土壤

### SK-01（第16図、図版4）

長さ300cm、最大幅90cmの長楕円形で、遺物を伴う。左右が共に一段落ち込んでおり、遺物は上



第13図 第3地点1号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)



第14図 第3地点2号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)

位に浮いた状態で検出された。

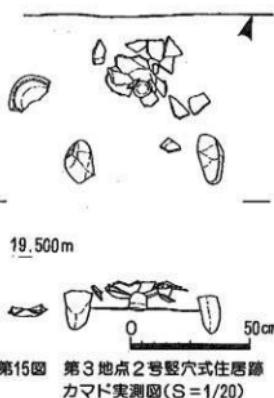
遺物（第17図、表1、図版18）

土器器の壺（9）、高坏（10）等がある。

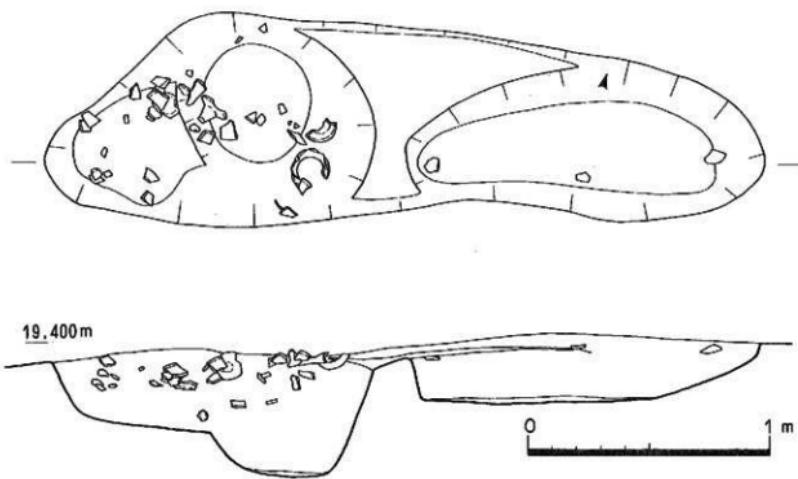
#### 【遺跡の性格】

調査された遺構は、共伴する土器からみて6世紀後半の單純期のものと考えられ、竪穴式住居跡の主軸を北方向に向かって、住居跡の北辺にカマドを持ち、4本の主柱穴で構成されるというこの時代に一般的な在り方を示す。注意すべきは調査区中程の包含層から検出された土製品（第17図11、12、13、図版18）で、11は円盤状で、つまみともとれる突起を持つ。何かを模したものか。12は断面円形で、斜めに貫通する穴を穿つことなどから、紐で吊り下げる様にして使用したと推定される。平面形は人型を呈しており、呪術的意味合いを持つのかもしれない。13は断面円形の筒形土製品で、中央に径1cm程の貫通する穴を穿つ。用途は不明であるが、生産にかかわるものかもしれない。

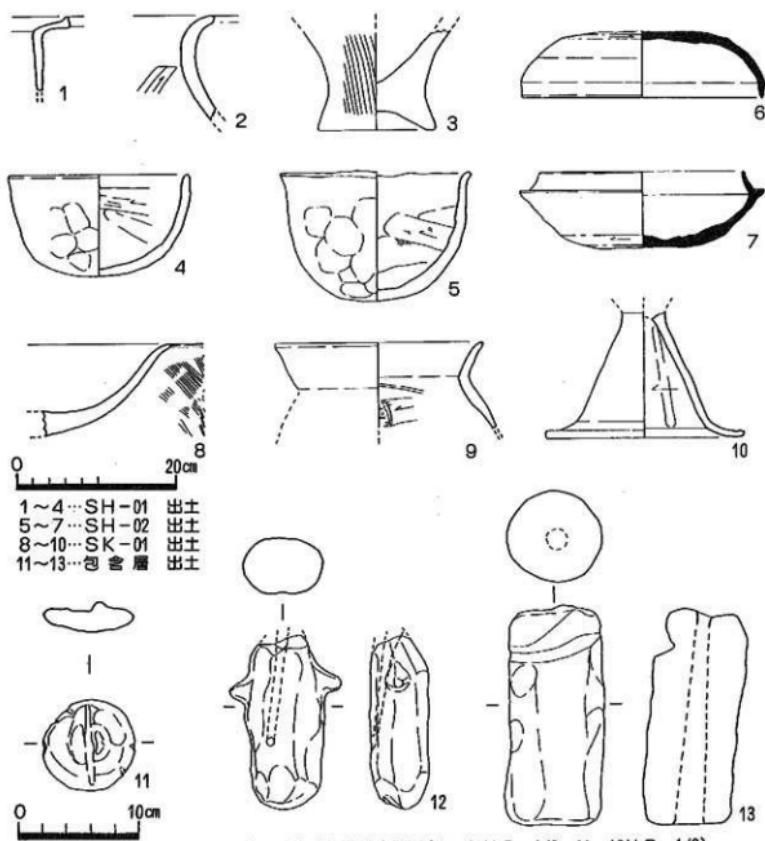
この第3地点の遺構は、基本的には後に調査された第4地点の一部であり、今後周辺地域の状況と併せ、古墳時代集落の在り方として注目すべきである



第15図 第3地点2号竪穴式住居跡  
カマド実測図( $S=1/20$ )



第16図 第3地点1号土壤実測図( $S=1/20$ )



第17図 第3地点出土遺物実測図(1~10はS=1/3 11~13はS=1/2)

地點 No	遺物 名	器種	口徑	器高	式 様	性 別	有年 (%)	色	調 査 成 分	的 上	調 査 及 び 特 徴	考 察	
											表1. 第3地点出土遺物観察表 (単位cm)		
S 1	土師器	鉢						小灰	黄白色	良	角セメント○	調査不明凡	
H 2	土師器	鉢						小灰	棕褐色	良	角セメント○斜石○板状石○	内面削り、外側ナメ	
O 3	泥生土器	鉢					7.1	5	棕褐色	良	角セメント○斜石○板状石○	内面ナメ、外側ハケ目	
I 4	土師器	鉢	11.1	3.3			7.0	棕褐色	良	角セメント○斜石○板状石○	内面削り、外側面鋸き文	外底部黒斑	
S 5	土師器	鉢	11.0	8.0			10.0	赤褐色	中強	角セメント○斜石○	内面削り、外側粗神丸		
H 6	板状器	平皿	15.0	4.1	10.0		9.0	深紫褐色	良	板状物○	外底入井部へツ割り内外面面粗張ナメ		
O 7	板状器	环身	12.6	4.7	7.2		7.0	深紫褐色	良	石英○	内底粗張ナメ板状物、下面下半粗張 ヘラ削り後本調査、上半同様ナメ		
SK 8	土師器	鉢					1.0	褐色	良	角セメント○斜石○板状石○	外底ハケ目、調査不明確		
O 9	土師器	鉢	13.0				3.0	灰褐色	良	角セメント○斜石○板状石○	内面削り、外側丁寧なナメ		
I 10	土師器	高杯					12.3	4.0	灰褐色	良	角セメント○斜石○板状石○	内面削り、外側丁寧なナメ	
W 11	土製	人形	直径3.7	厚3.0	0.0	同	同	同	同	同	チバノ	笠置用?	
合	12	土製	人形	今安2.1十	厚3.3	0.0	同	同	同	同	チバノ、上から下に穿孔	笠置用?	
混	13	土器?	全長3.8	厚4.2	1.00	青白色	良	角セメント○斜石○板状石○	手づくね、粘土壁を充てている				

### (3) 第4地点の調査

#### 【遺跡の概要】(第18図、図版1)

遺跡の立地する場所は丘陵部のほとんどない中津平野が耶馬溪より続く丘陵地と接する位置に相当し、見上げる丘陵上には森山遺跡が立地する。その丘陵裾部には岩井崎横穴墓群が開口し、第3地点の正面近くで対峙する格好になっている。第4地点はこの第3地点と連続する遺跡で上流側に位置する。本来、同一の遺跡であるが、事業年度の違いで、分けて調査された。

調査区は大丸川右岸の縁に沿って幅7~15m、延長250mと細長いもので、ほぼ全面にわたって縄文時代から鎌倉時代前期にいたる土器等の遺物を含む包含層がかぶさっており、その上面が中世以降の造構検出面となっている。そして包含層下の地山に弥生、古墳、平安時代の造構が掘り込まれている。

上面で検出した造構には土壙、Pit、溝状造構等があるが、その分布はまばらで、調査区の北東部でいくつかの造構を完掘しても遺物の出土をみなかつた。残りの造構も覆土や形態がほとんど同一のため無遺物であると思われ、いずれも試掘時の出土遺物に伴う造構群ではないと判断された。時代の新しい無遺物の造構もかわりなく貴重な歴史資料に違いないはずだが、遺物も豊富で堅穴住居跡等の作業量を費やす造構が多数検出されることが予想される包含層下の検出面を面的に把握せぬまま、日程を経過していくのが不安に思われ、残りを完掘しないまま包含層下の面の検出を急いだ。遺憾の思いを感じる。

下の面で検出した造構群はほぼ全面にわたって分布を見せるが、重複して造構が切り合っているものは多数を数えない。造構の種類には堅穴住居跡、掘立柱建物、溝状造構、柵列、土壙、Pit群、土器埋納造構等があり、集落遺跡としての様相をあらわしている。集落の営まれた時期は3世紀から6世紀にまで及び、古墳時代の集落変遷を知りうる好資料となる遺跡であるが、調査区は上述のごとくトレンチのような設定なので、集落の全体像は残念ながら調査からは知りえなかつた。

#### 【造構と遺物】

ここでは包含層下の検出面で確認した造構と遺物について以下概要を述べる。

造構は堅穴住居跡、掘立柱建物、Pit群、土壙、溝状造構、柵列等が検出されており、集落遺跡の様相を示している(第18図)。これらより出土する遺物としては縄文時代から鎌倉時代にかけてのものまであるが、造構に直接伴うと考えられる遺物は弥生時代後期、古墳時代前期から後期、平安時代中期のものがある。

造構の分布は、ほぼ全面にわたり大きな粗密の差はないが、調査区中央を斜めに横切るSD-02付近で他の造構の途切れを認めることが出来る。調査区自体がトレンチのような設定なので言及するには無理があるが、集落の中心的まとまりが時期によって移動している事を反映しているものと思われる。

### ①竪穴住居跡

平面形態には方形、長方形と壁面がゆるい弧を描く隅丸の方形もしくは長方形のものがある。それにカマドを持つものと炉を持つものがあり、対面する2側壁に壁溝が設けられるものも1軒確認された。

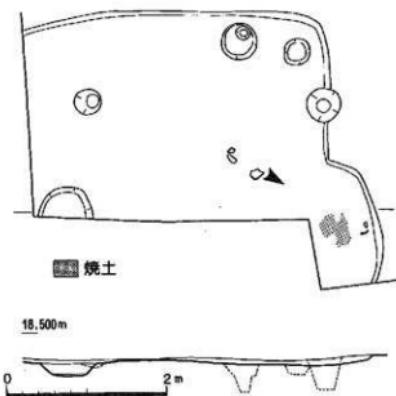
分布はSD-02の北東側に位置するSH-01~05と南西側にあるSH-06~12に二分される。切り合い関係が認められるものは、SH-04・05とSH-06・07のみだが、ほとんどが調査区の境界とぶつかっており、全形を検出し得たのはSH-10・11の2軒だけである。

#### SH-01(第19図)

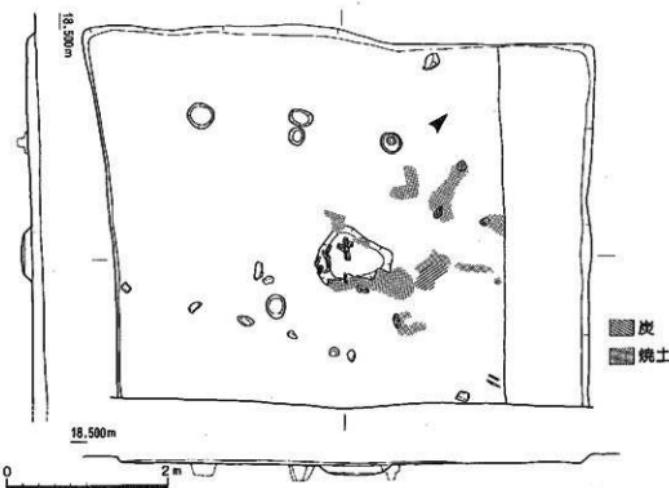
調査区の東隣に切られた形で検出された。プランは壁面がゆるい弧を描く方形もしくは長方形で北西側壁面には張出し部分が認められる。この張出し部分には焼土が残されている事からカマドの可能性もあるが袖や支脚の跡は見られなかった。北西-南東軸の残存長4.4m、北東-南西軸は残存長3.4mだが板に張出し部分を中心として反転させると5.6mに復元される。

遺物(第34図、表2、図版18)

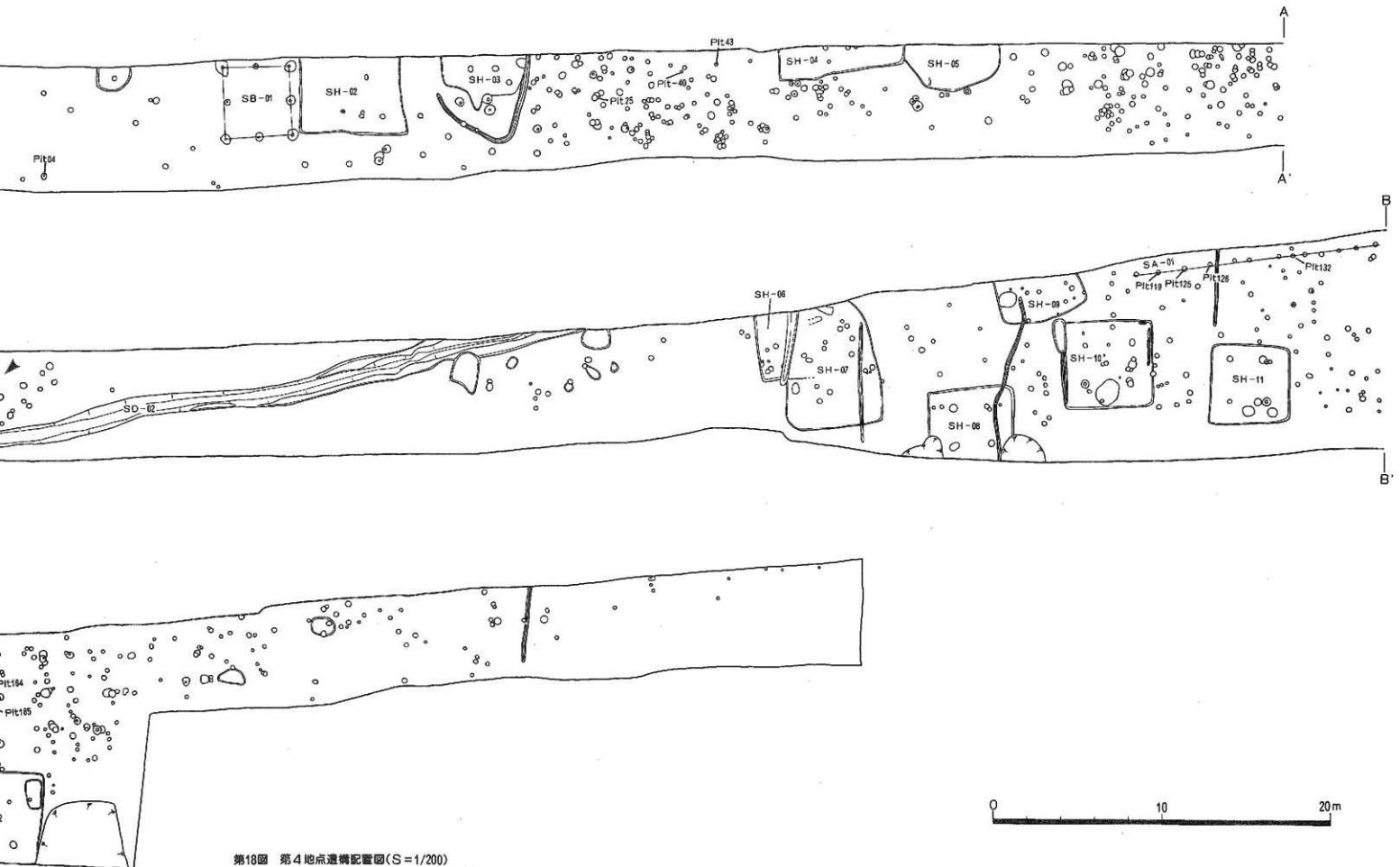
床面上より菱形土器の口縁部と底部(1,2)、覆土中よりは完形に復元出来るものを含む須恵器



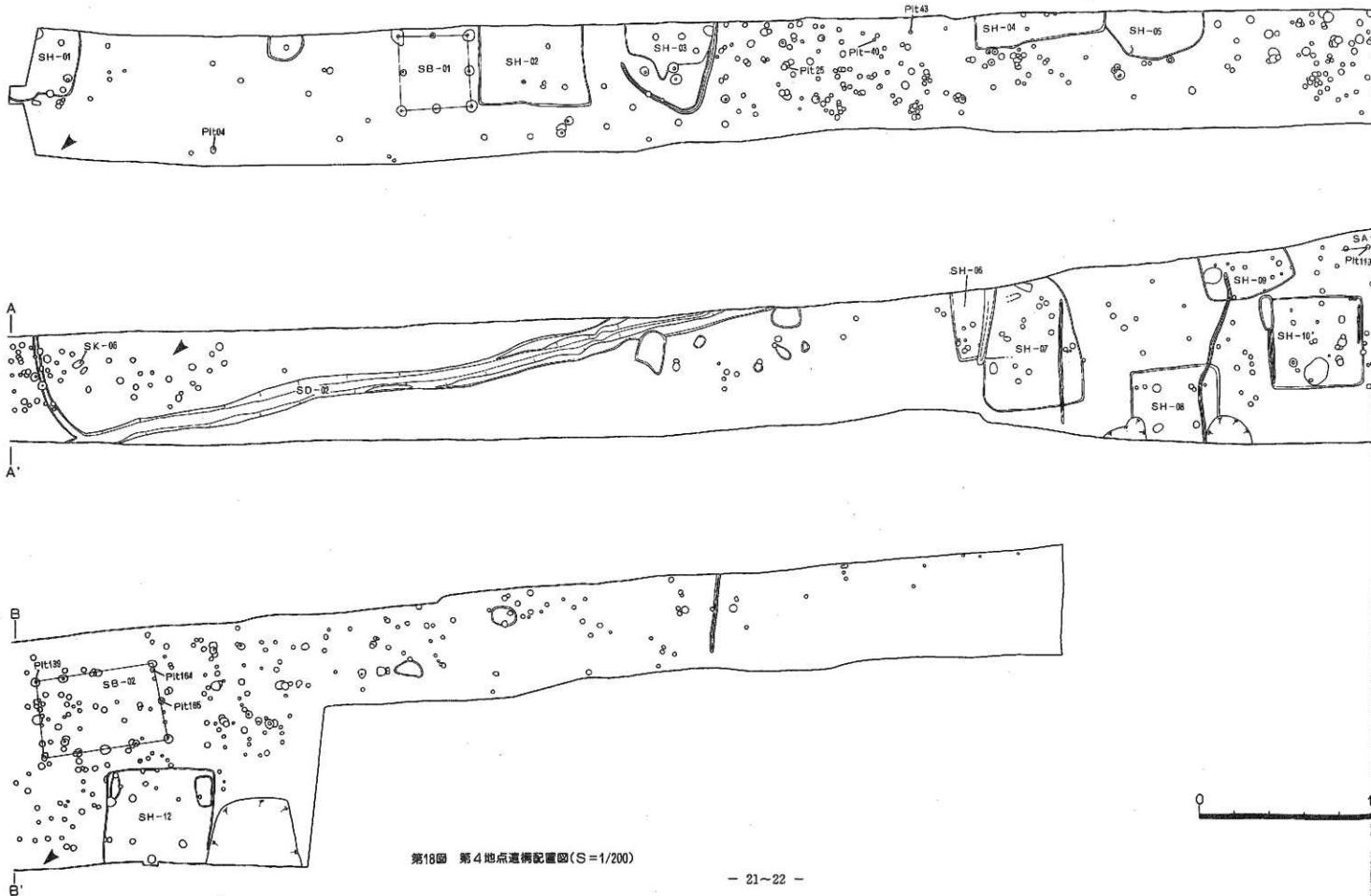
第19図 第4地点1号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)



第20図 第4地点2号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)



第18図 第4地点遺構配置図 ( $S=1/200$ )



第18図 第4地点遺構配置図(S=1/200)

数器種(3~10)が検出された。

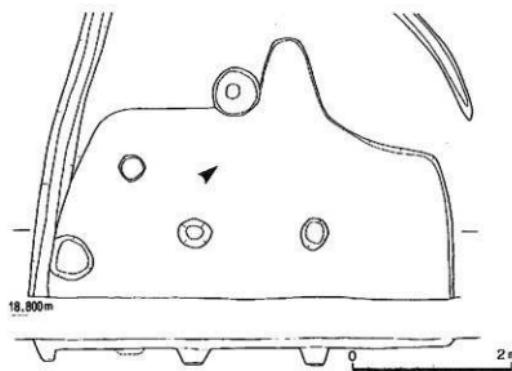
#### SH-02 (第20図)

南東側壁面部を調査区の境で切られた形で検出された。平面は長方形プランで、床面中央に炉跡があり、北東側壁面に沿ってベッド状遺構が設けられる。図の断面にベッド状遺構が表されていないのは、作業員の手によって調査担当者が油断した隙に掘り下げられていたため消失したことによる。調査担当者の不注意である。

規模は北東-南西軸6.32m、北西-南東軸は炉の位置を中心として復元すると5.8mになる。残存長は4.7mを測る。

#### 遺物 (第35図、表2、図版19)

床面直上より二重口縁壺の口縁部(14)と完形に復元出来る壺形土器(12)がある。これらとともにうつ土中の資料に壺形土器(11)、鉢形土器(13)等がある。15,16は上層からの出土品である。



第21図 第4地点3号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)

#### SH-03 (第21図)

南東側を調査区の境界で切られた形で検出された。

平面は壁面が弧を描く隅丸の方形もしくは長方形のプラン。北西側の壁面中央には張出しがみられるが性格は不明。北東-南西軸が5.0mを測り、南東-北西軸は張出しを含めずして残存長2.36m。

#### 遺物 (第35図、表2、図版19)

上層より瓦器枕や須恵器壺等、下層からは土師器の壺形土器、壺形土器、鉢形土器、手すくねのミニチュア土器等(18~25)そしてPit中から土師器高壺形土器(22)が検出された。

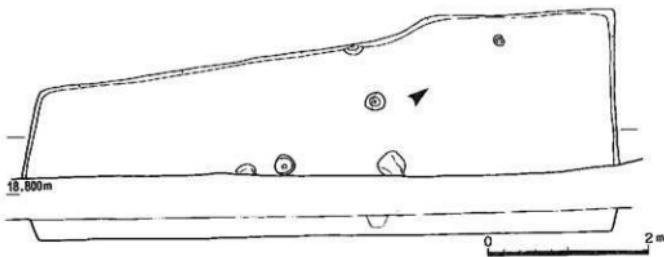
#### SH-04 (第22図)

南東側の大部分が調査区外に隠されている。

平面は長方形のプランになるだろう。北東-南西軸7.4m、南東-北西軸で残存長1.92mを測る。

#### 遺物 (第36図、図版19・20)

床面直上と下層で小型丸底壺、鉢形土器、高壺形土器等を出土している(26~30)。



第22図 第4地点4号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)

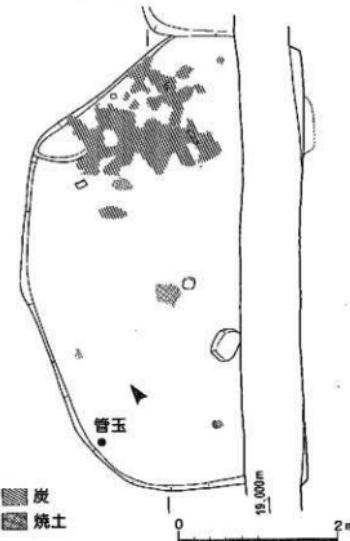
#### SH-05 (第23図)

南東側の過半部が調査区外に隠されて  
いる。

平面は壁面が弧を描く隅丸の方形もし  
くは長方形のプランで主軸が他のものと  
は異なっている。北側壁面には西側に偏  
してカマドの破壊された跡とみられる焼  
土塊とカーボンの集中が認められる。南  
-北軸5.1m、東-西軸残存長3.7mを測  
る。

#### 遺物

南西隅付近の床面で碧玉製の管玉1点  
があるが、試掘の際にも管玉1点が第1  
トレンチより出土している（第40図-8、  
表3）。



第23図 第4地点5号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)

#### SH-06 (第24図)

南東側は調査区外に隠れ、南西側はSH-07に切られている。

平面は方形もしくは長方形プランとなる。北西-南東軸は推定5.17m、南東-北西軸で残存長  
3.9mを測る。

#### 遺物（第36図、表2、図版20）

北側隅付近で完形に復元出来る高壺形土器、鉢形土器、小型の壺形土器等が上層からまとまつて  
て検出された（31～35）。南東側の調査区境界付近では床面直上より完形の壺形土器が出土した  
（36）。

SH-07 (第24図、図版7・8)

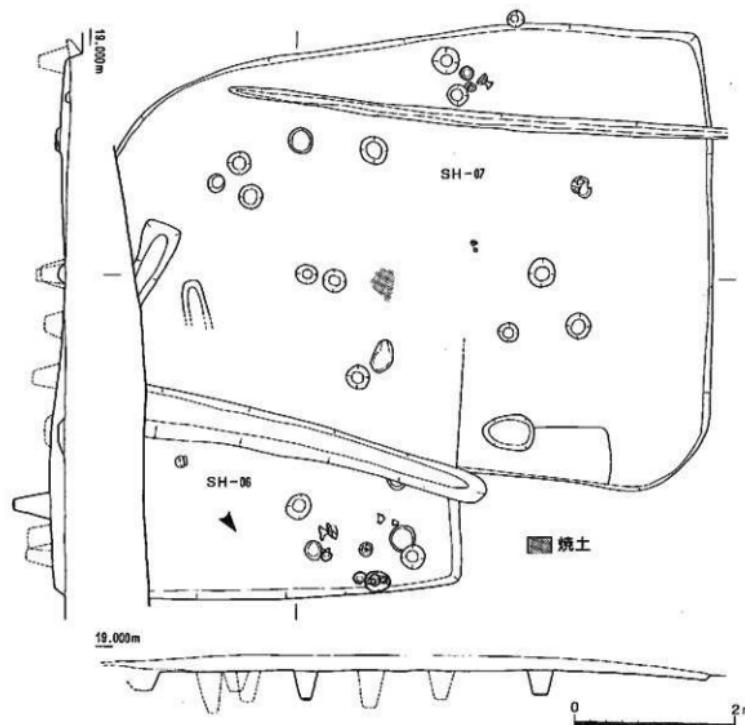
南東側の一辺が調査区外で隠れている。

平面は整面がゆるい弧を描く北西-南東に長い隅丸の長方形プランを示す。床面中央付近に径35cmほどの馬蹄状をなす焼土塊(図版7-3)が検出された。通常の地床炉で見られるような皿状のPitもこの位置には存在しない。またカマドになるわけでもない。炉からカマドへと移行していく時期とも重なるので注意をはらっておく必要があるだろう。

規模は北東-南北軸5.7m、北西-南東軸7.3m(推定)を測る。

遺物(第36図、表2・3、図版20)

中央付近の上層から須恵器の蓋壺(40,41)、その西側で完形に復元出来る丸底の壺形土器が床面直上からと、南西側壁面そばの中央には高壺形土器、鉢形土器、小型丸底の広口壺3点(37~39)がセットで床面直上より出土した。また打製石器3点が上層より出土している。これについては「(?)石器について」で詳述する。



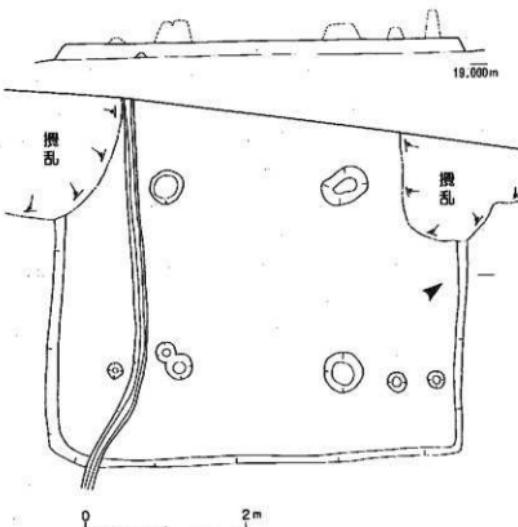
第24図 第4地点6、7号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)

### SH-08 (第25図)

北西側壁面部が調査区外となっているが、この隠れた壁面中央にカマドが設けられていることがタイプから推定される。

平面方形で主柱穴は4個所の $2.2 \times 2.2\text{m}$ (心々)に配置されている。北東-南北軸が $5.1\text{m}$ 、北西-南東軸残存長 $4.53\text{m}$ で推定長は $4.7\text{m}$ 。

出土遺物は下層より6世紀後半代の須恵器环身口縁が出土している。



### SH-09 (第26図)

南東側の過半部が調査区外となっている。

平面は壁面が弧を描く方形もしくは長方形で主軸方向がSH-05とのみ近似値を示す。

また北側壁面に接し西側へ偏した位置にカマドの残欠がSH-05と同様に位置し、ともに一つのタイプをなしていると思われる。

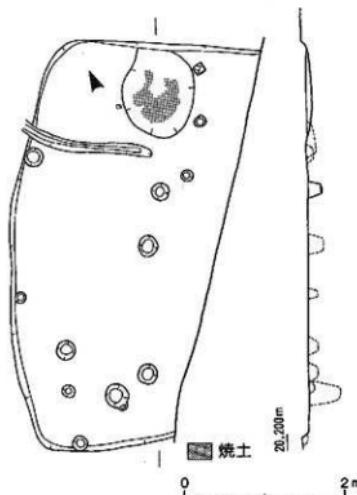
規模は南-北軸 $5.1\text{m}$ 、東-西軸の残存長 $2.6\text{m}$ を測る。

### SH-10 (第27図)

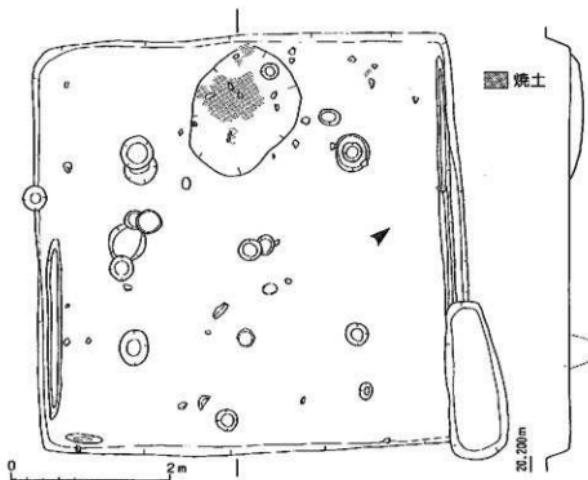
東側の隅が土壤に切られている他は全形を検出し得た。

平面方形で北東側と南西側の南半に壁溝が設けられている。北西壁の中央に接してカマドが見られる。主柱穴は4個所の北東-南西が $2.7\text{m}$ 、北西-南東で $2.3\text{m}$ を測り、カマドを挟む方向がやや広くなっている。

第25図 第4地点8号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)



第26図 第4地点9号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)



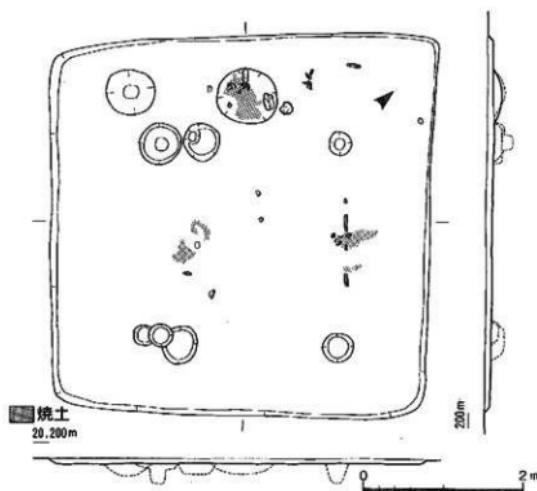
第27図 第4地点10号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)

カマドは袖部等の上部は破壊されて失われており、焚口床部の焼土面のみが残る。基部の下側には構築前の作業として幅1.35m奥行1.65mを測る不整梢円の皿状Pitが掘らされている。

規模は北東-南西軸が5.35m、北西-南東軸で5.2mを測る。

#### 遺物(第37図、表3、図版21)

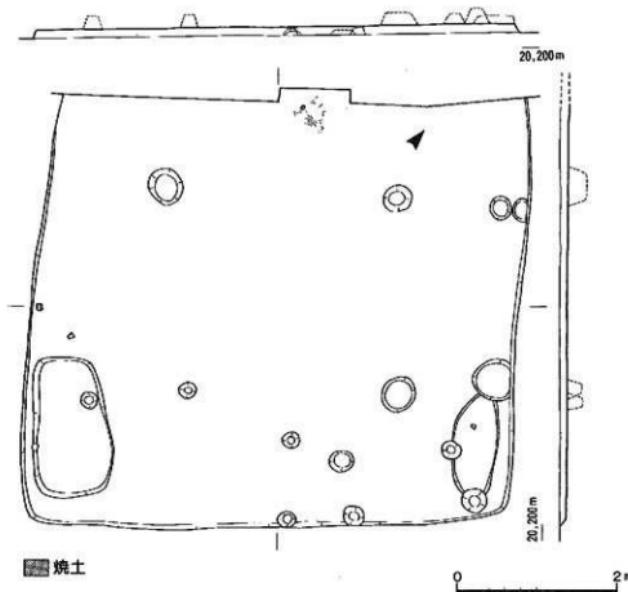
上、下層で須恵器の長頸壺(45)、蓋坏(47~50)や床面中央付近の下層で土師器の甕形土器口縁(46)等がある。



第28図 第4地点11号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)

全形を完全に検出し得た唯一の竪穴住居跡である。

平面方形で北西壁の中央にはカマドの痕跡を残している。カマドは幅0.75m、奥行0.65mを測る梢円の皿状Pitが掘られた上に構築される。焚口床部は被熱により焼土化している。構造物は支脚石と向かって右側の袖石が立った状態で残存していた。また、左側の袖石掘り形も



第29図 第4地点12号竪穴式住居跡実測図(S=1/60)

確認出来、最も保存状況が良好であった。

主柱穴は4個所で北東—南西方向が心々2.2m、北西—南東は2.5mを測る。

遺物（第37図、表3、図版21）

カマドとカマド周辺で土師器の鉢形土器（51）等が検出されている。

#### SH-12（第29図）

北西側の壁面が調査区の境界で切られた形になっているが、ほぼ全体を検出している。平面は北東—南西に長い長方形プランで北西側壁面の中央にはカマド跡がみられ。主柱穴は4個所に配置される。主柱穴の配置にややばらつきが感じられるが、対角上に対面する柱穴をセットに見ると上手く棟がのるように見える。柱間の距離は心々で東側柱穴と南側柱穴が2.6m、北側柱穴と西側柱穴で2.85m、東側柱穴と北側柱穴は2.4m、南側柱穴と西側柱穴では2.4mを測る。さらに対角では東側柱穴と西側柱穴が3.85m、南側柱穴と北側柱穴は3.5mになっている。

カマドは北西側壁面中央のやや北東よりに位置している。上部は既に破壊されていて、焚口床部の焼土のみが残存していた。基部の下には径0.5mを測る不整円形の皿状Pitが掘られている。

遺物（第37図、表3）

カマド内から出土した須恵器蓋坏の坏身（52）等がある。

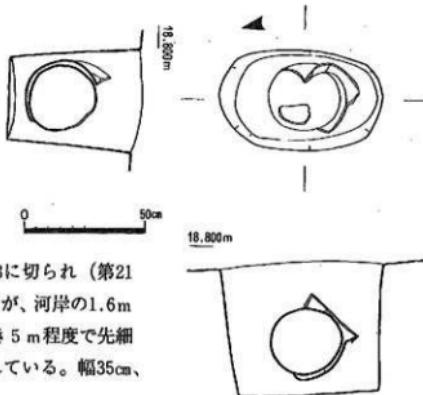
### ②溝状遺構（図版6）

溝状遺構は7条ほど検出したがSD-02以外では出土遺物も見られなかった。SD-03~07は遺構覆土や切り合い関係から中世以降の所産だろう。

SD-01

調査区の南東側の壁から一部をSH-03に切られ（第21図）ながら、河に向かって直線的に延びるが、河岸の1.6mほど手前で屈曲し、東側へゆるい弧を描き5m程度で先細りながら消える。途中でPit 2個に切られている。幅35cm、深さ8cm前後を測る。

出土遺物はとくに見られない。



第30図 第4地点6号土壤実測図  
(S=1/20)

SD-02

調査区の中央を斜めに横切るような形で検出された。南から北へ向かって直線にはしる。その間の距離は41mほどで、幅1~1.7m、深さ0.35mを測る。

検出した部分の中央付近は約20mにわたって他の遺構が見られず、その両側も遺構のまばらな区間が続いている。他の遺構の分布を二分する形をなしている。

北端部の調査区の境界と接する付近で東からのびてきたゆるい弧を描く幅0.3~0.5m、深さ0.25mほどの溝状遺構と合流している。この溝状遺構とは遺構覆土が同一で切り合いも確認し得なかった。またどちらも、土壤、Pit等の他の遺構群から切られている様子から相対的関係では近いように思われる。前後関係は分らないが、出土遺物の内容も同一なので同時に機能していた時期はあると思われる。

遺物（第37図、表3、図版21）

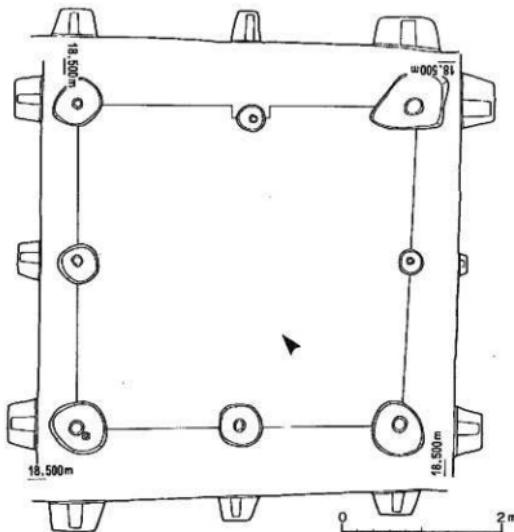
下層と底面ではまったく見られないが、上層では完形のもの等含め、まとまった資料の出土をみた。53・54は弥生の壺形土器で須玖2式、55は古式土師器の甌で下層の上面の上に伏せた形で検出されたが、検出直後に調査区全体が浸水する川の増水があり、出土状況を固化しえなかった。56は庄内期の東海系器台、57、58は布留期の壺形土器、59は布留期の高坏脚部、60は手づくねのミニチュア土器。

### ③土器埋置遺構

SD-02の北東側で集中しているPit群中にて検出された。

SK-06（第30図、第38図、表3、図版8・21）

遺構は0.67×0.41mの平面小判形で深さは0.55mを測る掘り方に組み合わせた2個体の上器を埋置したものである。山陰系の小谷式二重口縁甌を縦に半截したものを中に置き、その胴部の中



第31図 第4地点1号掘立柱建物跡実測図(S=1/60)

に、頸部から上を欠く胸部球形の壺が据えられている形になっている。本来は球形の壺の孔を半截した二重口縁壺をかぶせてふさいでいたのが、ずれ落ちてきたのだろう。

印象としては、小児用壺棺基が連想されるが、壺にあいた孔の径は14cmほどで、早産で死亡したような嬰兒以外では難しいだろう。

#### ④掘立柱建物(第31・32図、図版5)

明確に確認し得たのは2棟のみであるが、まだ検討が十分でないため、さらに数棟を加えられるのは確実だろう。

#### SB-01 (第31図)

調査区北東側でSH-02の北東側壁面と並んで検出された。2×2間で総柱はない。四隅の柱穴は60~65cmの円形で間にはいる柱穴はそれよりも一回り小さい50cm大とさらに一回り小さい30cm大のものがある。それぞれ同じ大きさの柱穴は南北の軸上で対面し、隣接している壁に位置している。

心々間の距離は基本的に2.0mのプランとなっている。

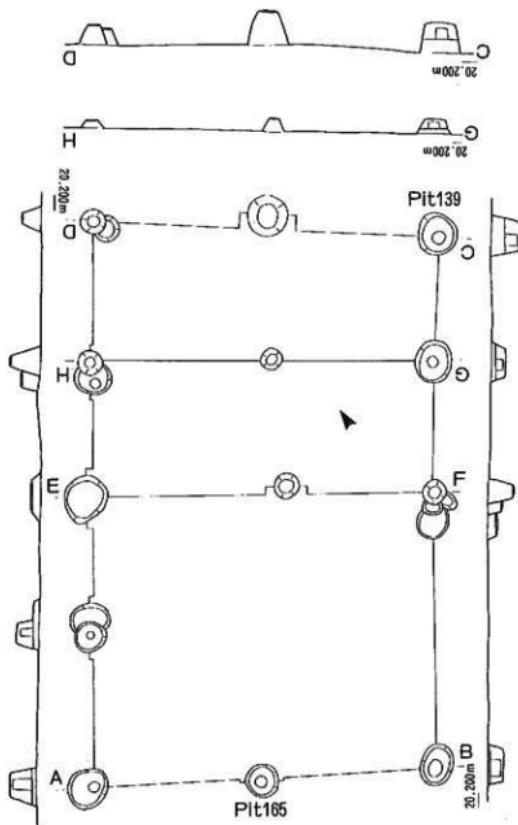
出土遺物は8基の柱穴のうち6基の柱穴で土器片が出土しているが、いずれも小片で図示し得るものではないが、観察した様子から弥生時代後期に位置づけられよう。(註1)

#### SB-02 (第32図)

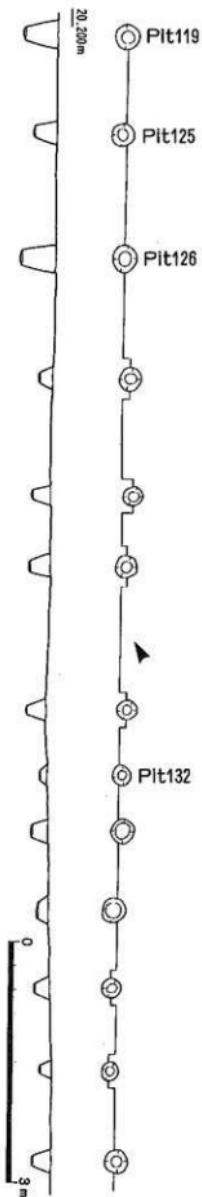
梁行2間4.4m、桁行4間7mで、梁行側の柱間隔で2.2m、桁行側の柱間隔は多少のばらつきがあるが1.8mを基本にしている。東面する平側で柱が1本立てられておらず、その部分の梁行の間柱もぬけている。東面する南よりの箇所であるから、出入口と考えるのが自然だろう。

出土遺物はPit-139より11世紀前半頃のヘラ切り底土師皿、Pit-164から8世紀代の須恵器壺蓋、Pit-165からは土師器碗、黒色土器A類碗、Pit-170では土師器碗と8世紀代の須恵器壺身がある。

いずれも小片で出土状況も遺構の時期を特定出来る良好なものはないが、概ね11世紀代の土器が中心を占めている。



第32図 第4地点2号掘立柱建物跡実測図(S=1/60)



第33図 第4地点 1号柵列跡実測図( $S=1/60$ )

## ⑤柵列遺構

調査区南よりの位置で南東側調査区境界と1m弱の距離で平行するものが1条検出された。

### SA-01（第33図、図版8）

12間14.38mを測る柵列で1間の距離は0.70~1.78mと大きなバラツキがある。遺構の中央付近北側から6間目が1.78mを測る最大値でその北側1間と南側2間が0.70~0.88mの最小値であってこれらを挟む両側の数値は北側で1.5m前後、南側で1.0m前後とそれぞれに安定している。よって北から6間目の位置はやはり区切りとして意識された場所で柵の切れ間かも知れない。

出土遺物はPit-119より黒色土器B類楕、土師器碗、須恵器壊蓋があり、Pit-125・126からは土師器楕、Pit-132ではヘラ切りの土師器皿と土師器碗を検出した。これらは概ね11世紀前半頃を中心とする時期になるだろう。

## ⑥Pit及び包含層（第39、表3・40図）

Pitの集中する地点は概ね、3か所が挙げられる。まず第一はSH-03とSH-04にかけての間、次にはSD-02の北東側の地区、そしてSB-02の柱穴跡が含まれるPit群がある。この何れも未確認の掘立柱建物の柱穴群を含んでいる可能性が高い。

出土遺物には縄文時代後期の石器、弥生時代中期・後期の土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器、平安時代・中世の土師器・瓦器等の多くがあるが、明らかに遺構に伴うと思われるものは、少數である。

### Pit-04（第39図-65、図版21）

調査区の北東側端部から約10mの所で検出された遺構で、径30×40cm、深さ35cmのPit中に押し潰されたように弥生時代終末頃の壺形土器が納まっていた。

### Pit-25（第40図-80、図版22）

SH-03からSH-04のあたりに集中して分布するPit群中に所在し、別の2個のPitに切られてい る。出土遺物には瓦器碗がみられる。

### Pit-40（第39図-67、図版21）

Pit-25同様にSH-03からSH-04付近に集中するPit群中にみられる。出土遺物は瀬戸内系の古式土師器高壊脚部がある。

### Pit-43（第40図-77~79、図版22）

これもまたPit-25・40と同じPit群に含まれる。出土遺物は完形のものを含む瓦器皿がある。

## 包含層（第39・40図、図版21・22）

出土遺物には縄文時代から弥生時代中・後期、古墳時代初頭から終末までと奈良・平安時代、中世と幅広くあり、それらには比較的保存状態の良い遺物が残されている。

63・64は弥生時代中期初頭の蓋と壺でどちらも完形に近い状態で出土した。64は下城式。66は弥生時代終末から古墳時代初頭の壺形土器。68～72は試掘時に検出された土師器で68は高壺、69は鉢、70は長頸壺か。71・72は弥生時代終末から古墳時代初頭の壺。73は須恵器高壺壺部。74～76は試掘時に検出された須恵器。81はSH-03上面付近から検出された瓦器椀。82は試掘時に検出された碧玉製管玉。83～85は試掘時に検出されたもので一括遺物、景德鎮産の青白磁合子。

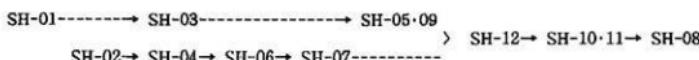
#### 【遺構の性格】

検出された遺構には弥生時代後期、古墳時代前期～後期、平安時代中期の土器を伴うものがあり、竪穴住居跡などいずれも集落遺跡を構成する性格を示している。

調査した竪穴住居跡を年代順に列記すると以下のようになる。

SH-01(3C中前後) ⇒ SH-02(4C中) ⇒ SH-03・04(4C後) ⇒ SH-06(4C後～末) ⇒ SH-07(5C前～中) ⇒ SH-05・09(5C後前後) ⇒ SH-12(6C前) ⇒ SH-10・11(6C前～中) ⇒ SH-08(6C後)

SH-01は北西側壁面中央に張出しを有し、この部分が被熱しており、また須恵器の出土もあってカマドを持つ竪穴住居跡のようにもみえる。しかし、床面出土の遺物や平面プラン、主軸方向などを検討するとSH-03に先行する同系譜のものと考えられる。これに対し、SH-02からSH-04の系譜が併行して存在する。さらにSH-03から途中を置いてSH-05・09への系譜も想定出来る。これらを模式的に表すと次のようになる。



以上から集落の変遷をみると、調査区の下流側から上流側へ住居跡が次第に移動していくことがいえるが、SH-08以降はまたSH-01の下流側（第3地点）へ戻って竪穴住居の造営を続けたか、未調査の地域に後続する住居を営んだのだろう。

さらに系譜的には2系統の竪穴住居跡が4・5世紀の期間に想定出来、これが6世紀にはカマドの受容後、定型化した方形プラン・4本主柱穴の一般的な形態のものへ包括されていく過程が看取される。

今回発見された土器埋置遺構（SK-06）は山陰地方を中心として分布する「壺棺墓」の新例と認められるものである。壺棺墓には古墳の埋葬主体に従属性に伴う例と数基の壺棺墓が群をなし営まれる例、集落跡から発見されるものがある。類例では古墳の埋葬主体に伴うものが大部分を占め、九州でも熊本県で数例が紹介されており、再葬墓の可能性が指摘されている（註2）。本例は集落跡からの発見例に位置づけられる。東森市良氏の論考（註3）によると古墳から発見される壺棺と独自の壺棺墓群を形成するものや集落跡から発見されるものは、土器の質に違いがあるという。前者は「埴輪ないし円筒棺に類似する厚手で大形のものであるのに対して、後者は「胎土、焼成が良く、一般的の土師器と同様の質で、前者に比して小形のものが多い。」としている。本例はこの

集落跡から発見される壺棺墓の山陰地方での在り方にまさに一致している。九州での類例としては福岡市早良区の有田遺跡群170次調査で検出されたPit 2がこれにあてはまるだろう。

SK-06の壺棺は頸をかいた孔の口径が14cmほどで、新生児でも埋葬にやや難がある。これを熊本県での報告例と同様に再葬墓と位置づければこの問題はクリア出来るが、検出状況等に相違があるのでこの位置づけは難しいと思われる。他の時代・時期の例からも集落跡発見の同時代の墓は小児墓であることが通例であることから、SK-06は小児墓と考えたい。付け加えると、集落中のSH-02-04に近い時期と思われる。また有田遺跡群170次調査のPit 2も集落中に単独で存在し、住居跡SC01が同時期の遺構として紹介されている。

まとめるとSK-06は山陰地方を中心に分布する「壺棺墓」の一例で山陰系の小谷式の二重口縁壺を使用する4世紀代に位置付けられるものである。そして集落跡から単独で発見された例に属し、その小さな口径から早産等で死亡した嬰兒が葬られていた可能性が考えられるということがいえるだろう。

掘立柱建物は検討不足のためわずか2棟を示したのみとなった。Pit群出土の土器には弥生時代終末の土器、3~12世紀の土師器、6~9世紀の須恵器、黒色土器A類・B類、瓦器等があり、これららの時期の掘立柱建物が存在した可能性が残されている。

SB-01はSH-01が最も近い時期の住居跡と考えられるが、SH-01とは主軸方向が異なっており、むしろそれに後続する時期のSH-02と一致し、近接している。恐らくはSH-02と同系譜で先行するSH-01と同時に営まれた住居跡が調査区外に存在し、それにSB-01が伴うのだろう。SH-02の選地も前代から所有する場所として意識されていた土地であることによるのかも知れない。

SB-02は横列遺構SA-01との関係で注目しなければならない。両者は同一の主軸方向で築造されており、時期も11世紀前半の年代がともに与えられる。

集落の中心は遺跡の立地から東側の調査区外に広がっていると考えるべきで、SA-01はこれらを囲む施設と考えられる。SB-02は柵の外側の河岸に面して位置し、柵の切れた場所に集落の中心部を隠す形で建てられている。また出入口と考えられる場所は集落の柵の内側を向いている。この出入口から建物へ入った所には梁行の間柱が立てられておらず、土間が設けられる構造であったのかも知れない。

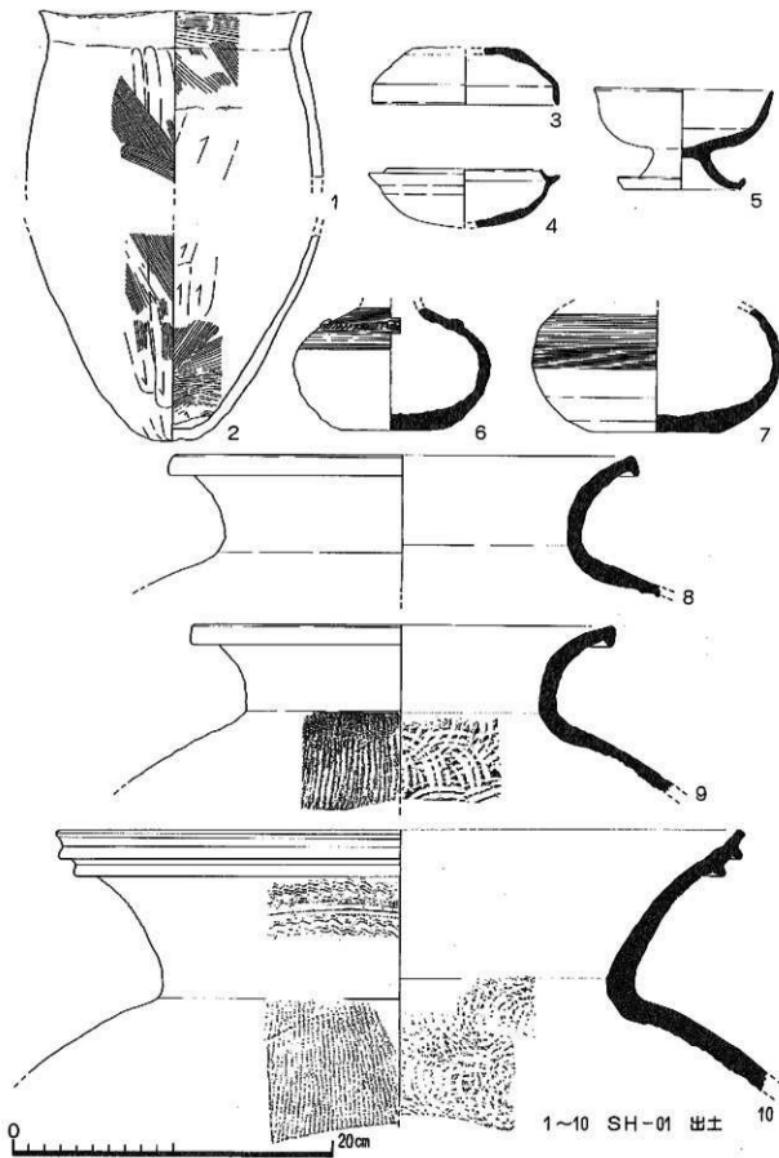
試掘時に発見された資料で12世紀の景德鎮産の青白磁合子から平安時代後期にはこの地に富裕な有力者がいたことが分かる。それは恐らくSA-01の柵に囲まれた居館の主につながる者であったのかも知れない。

この第4地点の遺構群では古墳時代集落に伴うものが主体を占め、時代を通した集落の変遷を知りうる資料となっている。調査区の設定が狭長のため集落構成等は今回の調査では分からなかつたが、遺跡の評価としては、竪穴住居跡・土器の縦年を古墳時代全体を通して一遺跡の資料で成しうる貴重なものといえる。

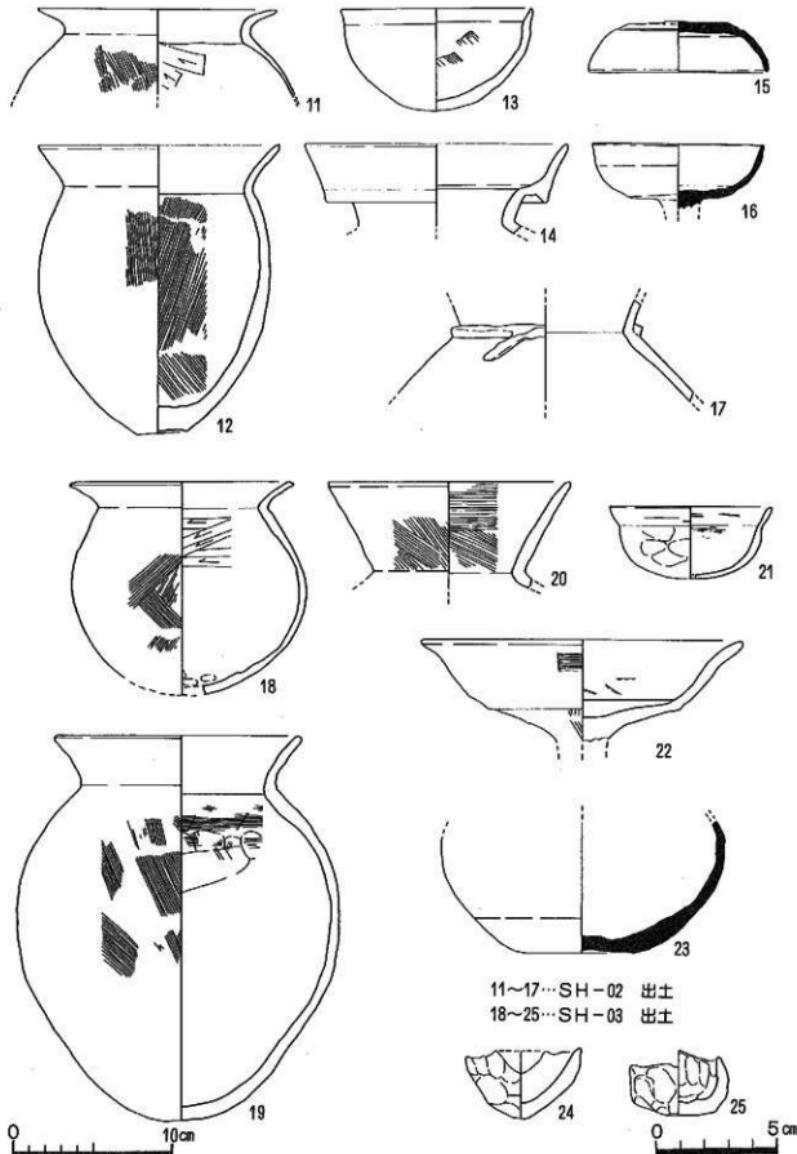
註1. 大分県教育庁文化課の村上久和氏に実見していただいての所見である。

2. 高木正文『古墳時代の再葬』『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』巻1 1982

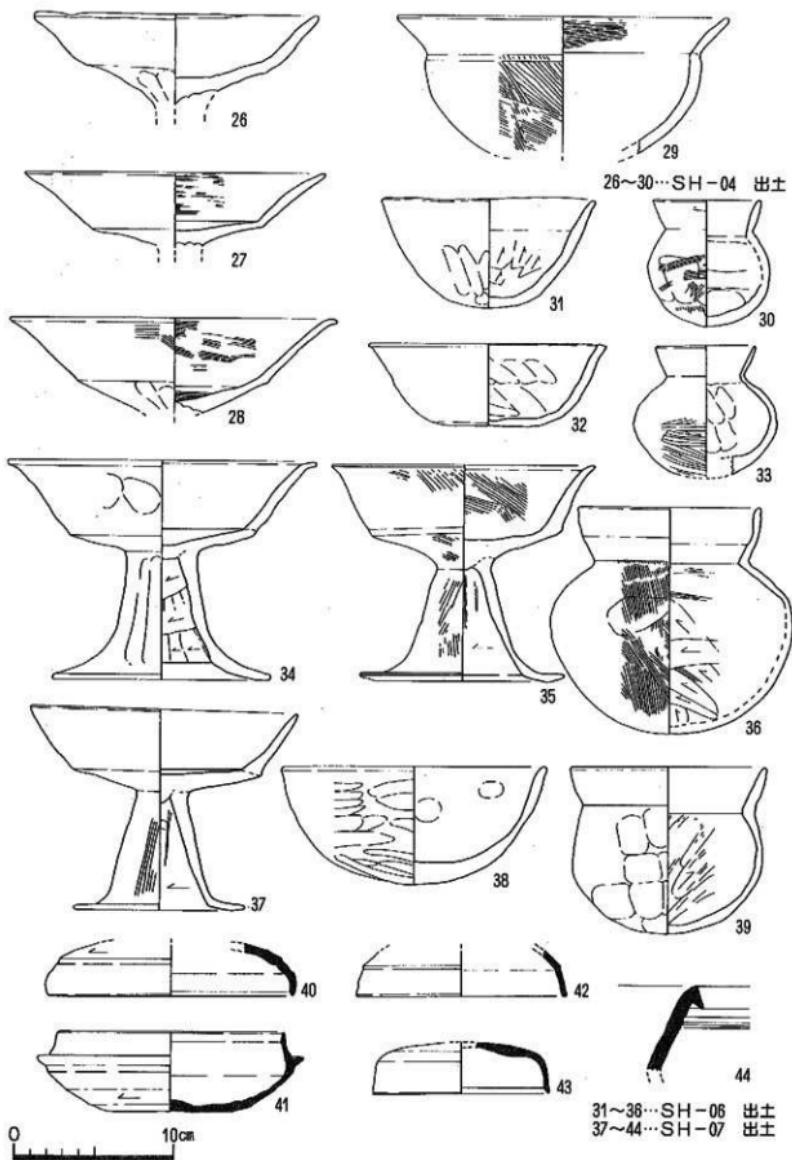
3. 東森市良『山陰地方発見の壺棺とその特色』『考古学研究』第14巻第2号 1967



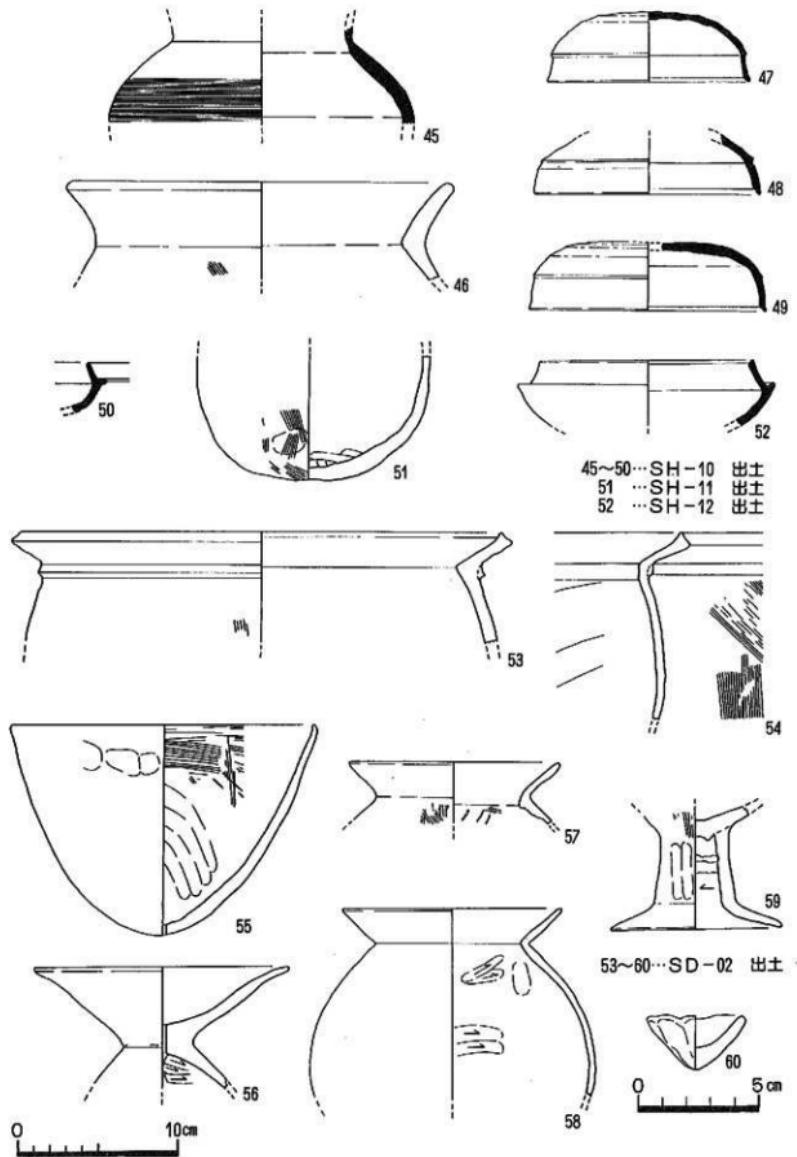
第34図 第4地点出土遺物実測図(1)(S=1/3)



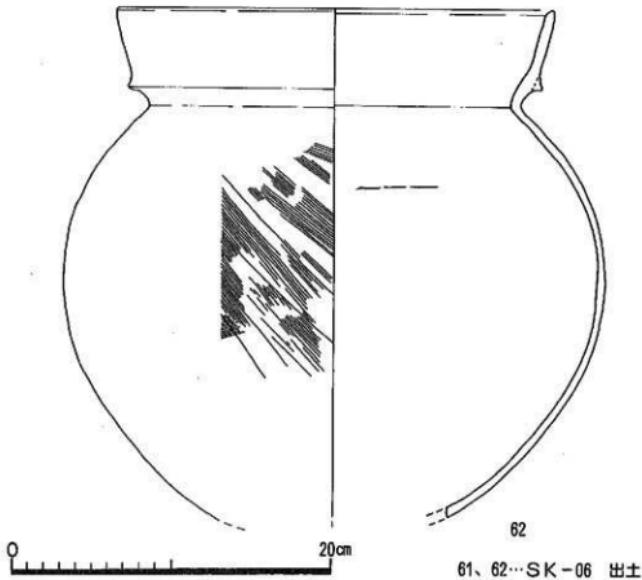
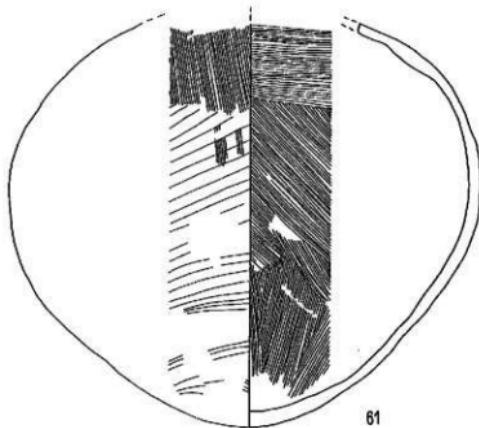
第35図 第4地点出土遺物実測図(2)(11~23はS=1/3 24、25はS=1/2)



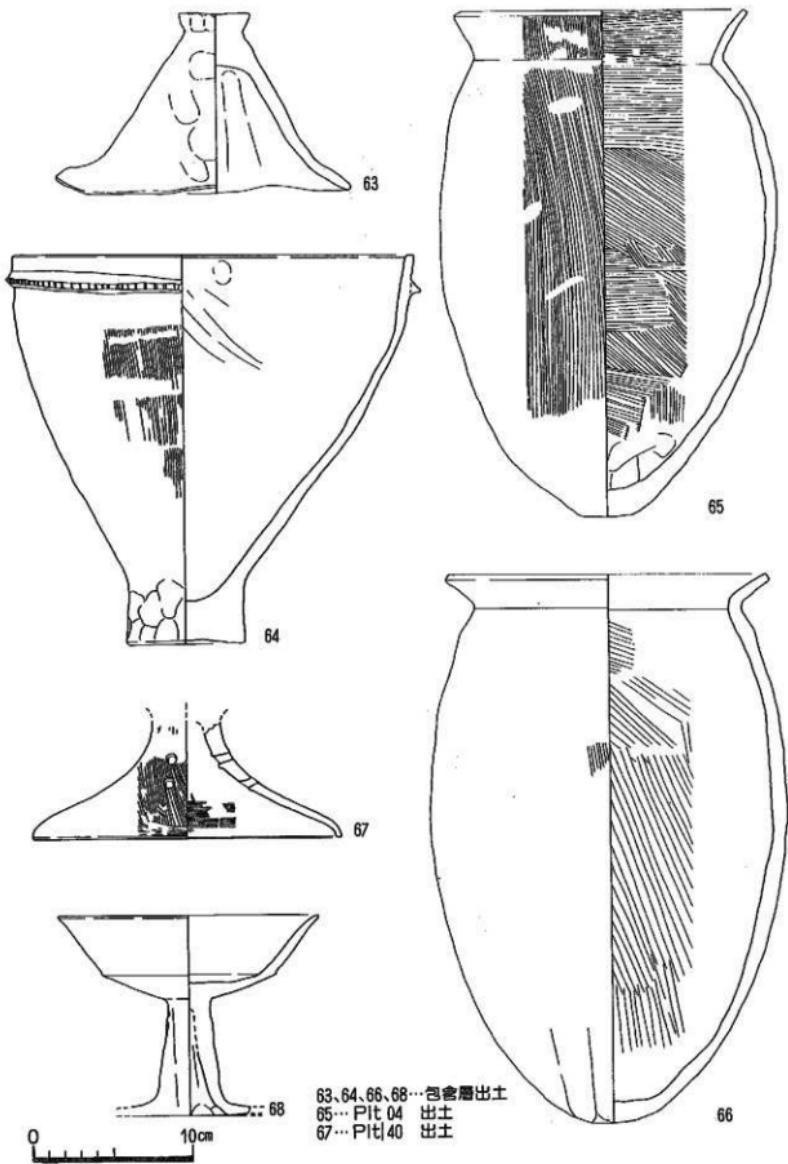
第36図 第4地点出土遺物実測図(3)(S=1/3)



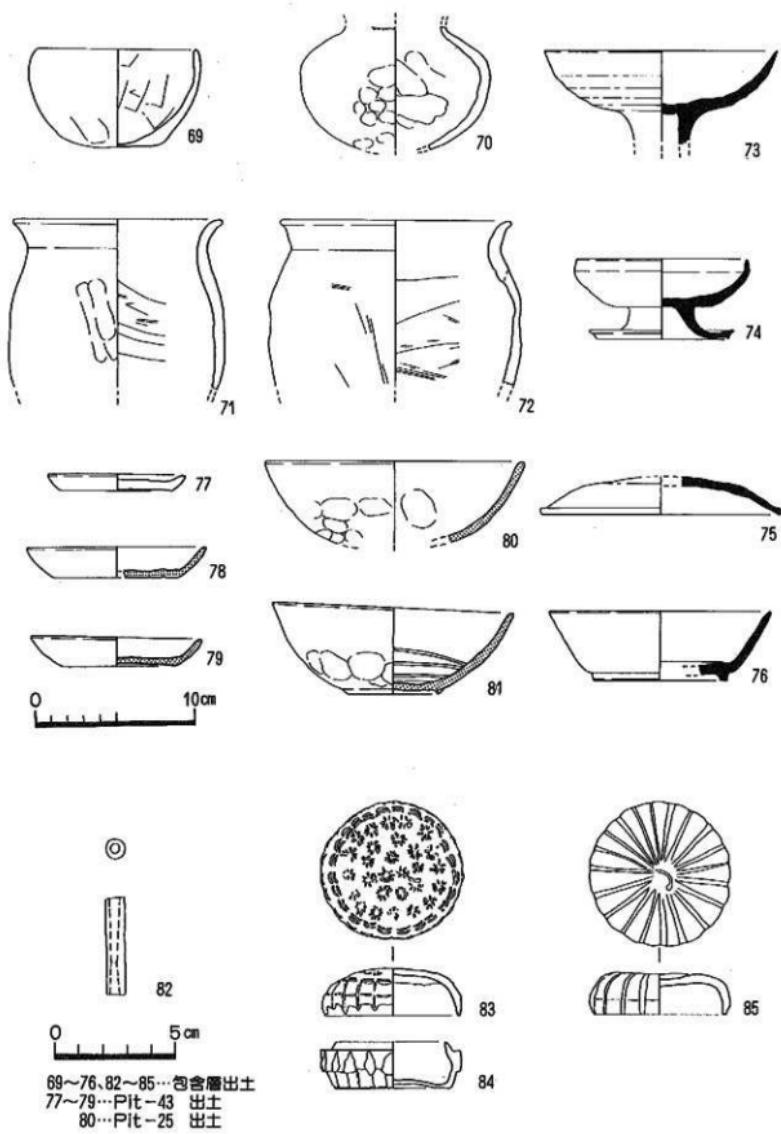
第37図 第4地点出土遺物実測図(4)(S=1/3)



第38図 第4地点出土遺物実測図(5)(S=1/3)



第39図 第4地点出土遺物実測図(6)(S=1/3)



第40図 第4地点出土遺物実測図(7) (69~81はS=1/3、82~85はS=1/2)

## 一 土器

表2. 第4地点出土遺物観察表(1)

(単位 cm)

出土地点 番号	器種	口径	器高	底径	残存 率(%)	色 調	表 面 状 態	胎 士	内 壁 及 び 外 壁 特 徴
									成形 (初期)
S	1 生土器 貝		17.0		5	淡褐色	良	板砂鉄	内凹面傾方向に削り後ハケ目 黒斑あり
	2 生土器 貝				20	淡褐色	良	板砂鉄	内外面傾方向に削り後ハケ目 加強あり
H	3 領唐器 环形	11.4	3.5	6.6	30	灰褐色	中佳	斜長石△	縫合線ナメ、尖井部ナメ
	4 領唐器 环形	9.4	3.7	3.0	100	灰褐色	中佳	灰長石△石英△	周辺粘土ナメ
D	5 領唐器 环形	11.2	8.2	7.0	70	暗青灰色	良	板砂鉄	底部下平軸面へ削り、底部外縫合ナメ
	6 領唐器 环形			6.4	50	淡青灰色	堅	斜長石△、石英△	内外面傾向ナメ上半分カス目、底部ナメ
I	7 領唐器 环形				7.8	30	内 外 淡 灰 色	堅	斜長石△
	8 領唐器 貝	28.4				小片	古褐色	堅	板砂鉄・内面2~4%のレモン
II	9 領唐器 貝	25.6				小片	古褐色	堅	石英△
	10 領唐器 环形	42.4				小片	古褐色	堅	石英△
S	11 上部器 貝	15.0				内 外 淡 灰 色	良	角セメント粘土石英△石英△	削痕有りハケ目、内面ベラ削り
	12 十脚器 爪	15.0	17.0	2.1	80	淡褐色	良	角セメント△斜長石△	底部未剥離、内外面ハケ目、内外面傾向不明瞭
O	13 土器器 爪	12.0	8.2		80	内 外 淡 灰 色	中佳	角セメント△石英△石英△	内面ハケ目ナメナメ、外面ナメ、口縫合部ナメ
	14 土器器 爪	18.4				小片	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△
Z	15 土器器 爪	11.1	3.2	8.1	100	淡褐色	堅	斜長石△石英△	二重口縫、内外面トゾ
	16 領唐器 环形	16.6			50	内 外 深 黑 色	良	2~3%のレモン	底部下平軸面へケズリ後 内外面傾向ナメ
S	17 土器器 爪					小片	淡褐色	良	角セメント粘土石英△板砂鉄
	18 十脚器 爪	14.0	13.3		80	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面ケズリ後ナメ、外面ハケ目 黑斑あり
II	19 土器器 貝	14.5	24.8		40	淡褐色	良	角セメント△石英△板砂鉄	外側ハケ目、下半はハケ後ナメ
	20 土器器 爪	15.0			20	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	傾斜内面基盤に一回ハケ目
O	21 土器器 爪	18.0	4.5		40	淡褐色	中佳	角セメント△斜長石△	内面ハケ目
	22 土器器 爪	18.0			60	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	体部下平軸面えき
S	23 領唐器 环形				6.8	20	淡褐色	堅	斜長石△石英△
	24 土器器 爪	4.7	2.8		90	淡褐色	中佳	角セメント△斜長石△石英△	内面ハケ目
G	25 土器器 爪	3.7	1.8~2.7		95	淡褐色	中佳	角セメント△斜長石△石英△	手すり跡
	26 土器器 爪	12.4			60	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面ハケ目
H	27 土器器 爪	18.7			60	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面ハケ目
	28 上部器 爪	26.4			60	淡褐色	良	角セメント△石英△	内面ハケ目
A	29 土器器 爪	26.8			20	淡褐色	良	角セメント△斜長石△板砂鉄	内面ハケ目
	30 土器器 爪	6.6	7.9		100	淡褐色	良	角セメント△石英△	内面削痕あり、外側下平軸面ハケ目
S	31 土器器 爪	13.4	8.8		95	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面ハケ目
	32 十脚器 爪	14.8	5.8	7.0	95	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面削痕あり、外側下平軸面ハケ目
H	33 土器器 爪	8.7	8.3		50	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面削痕あり、外側ハケ目
	34 土器器 爪	18.2	13.8	13.8	80	淡褐色	良	角セメント△斜長石△板砂鉄	内面削痕あり、斜長外縫合ナメ、内面削り
O	35 土器器 爪	18.4	12.5	12.8	95	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面削痕あり、外側ハケ目
	36 土器器 爪	11.2	14.2		100	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	斜長内面削り後ナメ、外側ハケ目
S	37 土器器 爪	18.8	12.4	18.6	100	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面ハケ目
	38 土器器 爪	18.4	7.3		100	赤褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面削痕あり、内面削り
H	39 土器器 爪	18.3	12.0		100	淡褐色	良	角セメント△斜長石△石英△	内面削痕あり、内面削り
	40 領唐器 环形	15.2			20	淡褐色	良	石英△	大溝削痕へ削り後削痕ナメ
O	41 領唐器 环形	14.0	4.9		40	灰褐色	中佳	石英△	底面ハケ目削り後未剥離、体部下平軸面ハケ目
	42 領唐器 环形	13.8			30	灰褐色	良	板砂鉄	内外面傾向ナメ
7	43 領唐器 环形	11.0	3.3	18.0	40	内 外 灰 色	良	石英△	内外面傾向ナメ 外面状れ

表3. 第4地点出土遺物総表(2)

(単位:c.m.)

出土 地名 NO	遺物 名	種 類	口 径	高 度	底 径	残存 (原形) %	色 調	牌 法	地 土	出 現 状 況	備 考	
S H 44	細部器	瓶				5.0	青灰色	良	白色磨砂○	内外面ナメ、肩面二条の枕縫の下に平行タキ	内面吸着力	
S 45	漆器蓋	蓋				1.0	淡青灰色	良	鈍具石○石板○	内外面ナメノゾー、肩部外面カキ目、	外面白吸着力	
S 46	土器蓋	蓋	23.6			5	淡青褐色	良	角セン石○石板○鈍具石○	赤ナメ、肩部外側ハケ目	外底厚塗り	
H 47	漆山器	杯	12.6	4.2	4.0	4.0	青褐色	良	石灰土○角セン石○鈍具石○	大井漆山器へラ取り		
H 48	漆山器	杯	14.0			1.0	青褐色	良	鈍具	圓輪縫	外側吸着力	
I 49	漆器蓋	蓋	14.8	4.2	4.0	4.0	淡青灰色	良	石板○	大井漆山器へラ削り		
I 50	漆器蓋	蓋				1.0	淡青灰色	良	石灰土○角セン石△	四筋模ナメ		
S H 51	土器蓋	蓋				4.0	赤褐色	外段	角セン石○鈍具石○鈍砂○	外底部押さえ後ハケ目、内底部削り並びナメ	鋸削着	
I 52	漆器蓋	蓋										
S H 53	漆山器	盆	13.2			1.0	淡青灰色	良好	石板○	内外面四輪ナメ		
S 54	漆山器	盆	20.3			5	淡青白色	良	角セン石○斜板○△鈍砂○	内外面ナメ、腹部突起がめぐる		
S 55	土器蓋	蓋				5	淡青褐色	良	角セン石○石板○	内面ナメ、外底ハケ目、腹部突起がめぐる	底底あり	
I 56	土器蓋	蓋	18.6	13.1	9.5	9.5	淡青褐色	良	角セン石○斜板○	外面丁寧なナメ、内底ナメあけ後	鋸削着	
O 57	土器蓋	蓋	15.6			7.0	淡青色	良	角セン石○斜板○	円輪縫へカキ目、武市上から下へ穿孔		
I 58	土器蓋	蓋	13.9			5	淡青色	良	角セン石○斜板○	内面内面刷り、外側ハケ目		
I 59	土器蓋	蓋	13.6			3.0	淡青色	良	角セン石○斜板○	内面内面刷り、外側ハケ目		
I 60	土器蓋	蓋				16.0	淡青色	良	角セン石○斜板○	内面丁寧なナメ、斜板内面刷り		
S K 61	土器蓋	蓋	4.1	2.2		9.5	淡青白色	良	角セン石○斜板○△鈍砂○	上から下へ穿孔		
I 62	土器蓋	蓋				8.0	青褐色	良	角セン石○斜板○	手づくね	包庇?	
I 63	漆山器	盆	11.0	8.0	5.0	8.0	淡青色	良	角セン石○斜板○	内面丁寧なナメ、外側ナメ後	口継続部分あり	
I 64	漆山器	盆	21.9	24.2	7.4	8.0	赤褐色	良	角セン石○斜板○	内面内面刷り	墨塗りが大きい	
P I 65	漆器	盤	17.6	31.5	3.4	9.5	淡青色	良	角セン石○斜板○△鈍砂○	内面ナメ、外底ハケ目、底部のみ指揮され	器脚脚栓不確	
P I 66	漆山器	盆	19.8	34.4	6.0	6.0	淡青褐色	良	角セン石○斜板○△鈍砂○	内面内面刷り	内底泥付着	
P I 67	漆山器	盆				19.0	2.0	淡青褐色	良	角セン石○斜板○	外側丁寧なハケ目、面部に外から内へ穿孔	外表面黒面あり
I 68	土器蓋	蓋	16.2	12.4		8.0	淡青色	良	角セン石○石板○△鈍砂○	内面丁寧なナメ、斜板ナメ、大井丁寧		
I 69	土器蓋	蓋	9.8	6.1	5.6	9.0	淡青色	良	角セン石○斜板○	内面ナメ		
I 70	土器蓋	蓋				3.0	淡青色	良	角セン石○斜板○△鈍砂○	内面内面刷り、外側下半面押さえ		
I 71	土器蓋	蓋	12.8			3.0	赤褐色	良	角セン石○斜板○	内面内面刷り		
I 72	土器蓋	蓋	14.2			2.0	淡青色	良	角セン石○斜板○△鈍砂○	内面内面刷り		
I 73	漆器蓋	蓋	14.5			4.0	黑色	良	斜板	外側内面刷り	内面自然板	
I 74	漆器蓋	蓋	18.6			8.2	6.0	黑色	良	斜板△	内面ナメ、内面黒面あり	
I 75	漆器蓋	蓋	14.8			4.0	淡青褐色	外段	角セン石○斜板○	内面ナメ		
I 76	漆山器	盆	13.6	4.4	4.4	1.0	淡青褐色	良	斜板	内面ナメ		
P I 77	土器蓋	蓋	8.6	1.0	7.0	1.0	淡青褐色	良	角セン石△斜板長石○	内側脚栓ナメ、斜切り底脚栓		
P I 78	土器蓋	蓋	11.2	1.9	8.0	4.0	淡青褐色	良	角セン石○斜板○長石○	内側脚栓ナメ、斜切り底脚栓自あり		
P I 79	瓦	瓦	10.6	L.8	7.2	9.0	淡青褐色	良	角セン石○斜板○長石○	内底脚栓ナメ、斜切り底脚栓自あり		
P I 80	瓦	瓦	16.2			3.0	灰色	良	角セン石○斜板○	内底脚栓ナメ		
P I 81	漆	漆	15.1	5.8		9.0	赤白	良	角セン石○斜板	内面ヘラ底面、外側押さえ削し		

## 一管玉

出土 地名 NO	遺物 名	管 種	口 径	高 度	底 径	残存率 (原形) %	色 調	穿 孔	孔 孔	備 考
II 82	岩下製	管	2.0	8.4	0.2	100	淡青褐色	圓穿孔		

## 一貿易陶器

出土 地名 NO	遺物 名	器 種	口 径	高 度	底 径	残存率 (原形) %	色 調	底 部	地 土	特 徴	製 作
他 83	青白陶	合子盤	5.5	2.0	5.0	100	淡青白色	反白	良	内面白級板のみ無地	基盤板系
企 84	青白陶	合子盤	4.4	1.8	4.8	100	淡青白色	反白	良	受部のみ無地	基盤板系
脚 85	青白陶	合子盤	5.2	1.7	4.8	100	淡青白色	反白	良	内面白級板のみ無地	基盤板系

## (4) 第5地点の調査

### 【遺跡の概要】(第41図、図版9)

遺跡は現在の北大バイパスと接する下流側の犬丸川左岸に位置しており、樋多田遺跡から連続する遺構群に含まれる。また、河川の対岸には権現島遺跡が所在している。犬丸川はこれらの遺跡に臨む地点で逆S字形の蛇行した流れを見せる。第5地点は樋多田遺跡とともにこの屈曲した流れの内側のスペースに立地している。

当初は樋多田遺跡の遺構群に一括される遺跡で、弥生時代中期、古墳時代後期あるいは縄文時代晩期などの遺物が遺構に伴うのではないかと予想したが、予想とはやや異なり、弥生時代後期と古墳時代前期のものが検出され、むしろ第4地点と近い時期的内容のものだった。

遺構は溝状遺構2条、不明土壙1基、Pit多数でこのうち溝状遺構2条でまとまった出土遺物が得られているが、後は少數のPitで遺物が出土したに過ぎない。

### 【遺構と遺物】

#### ①溝状遺構

2条の交叉して切り合う条溝を検出した。

#### SD-01 (第41図、図版9)

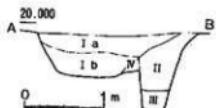
幅1.5m程、深さ1.0m程度の断面逆台形に近い形態で、現在の犬丸川に平行して50m余りを検出した。底部の傾斜は川の方向と同じく南側から北側へ下がっている。調査区の南西側ではSD-02と交叉して切られている。南西側の端部は川の侵食によって削られた河岸崖面に達して消えている。これによって遺跡の形成後に河川が流路を変化させていることが分かる。

第1層と第2層の境界部付近の断面で壁面の立上がりが屈曲をみせ、そこから外傾し、内湾しながら上端に至る。SD-01は5層まで分層したが、1層と2層の間に最も大きな画期を見出す事が出来るだろう。

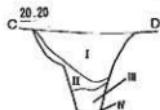
#### 遺物 (第42図、表4、図版22)

第1層からまとまった遺物が出土したが、第3層以下では遺物の出土は見られない。

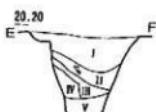
1～5は第1層からの出土遺物でいずれも庄内併行期のものである。1は単純口縁の大形の壺で底部を欠損しているもの。頸部は強くくびれて口縁部は大きく外反する。外面の頸部から肩部にかけて指押さえの痕を残し、口縁は内外面ともナデ調整で仕上げられている。内面は体部を横方向にヘラ削りしその後にナデ、頸部には刷毛目調整を施している。体部に粘土づみの痕を残した箇所が見られる。2は高壺の壺部で二段にひらく形態が特徴的なものである。内外面とも横方向のナデを施し、その後に多方向のナデ調整で仕上げている。3は壺で胴部より下の部分を欠失しているが胴部球形をなすと思われるもの。頸部は「く」の字に強く屈曲して明瞭な稜をなし口縁部は外湾して大きく開き、端部はやや肥厚して角ばる。外面は肩部に指押さえの痕を残し、刷毛目の後、ナデ調整を施している。内面は肩部で粘土づみの痕を残し、胴部には指押さえが見える。頸部は刷毛目調整の後、ナデで仕上げている。4は片口の鉢で胴部下半から下を欠失する。外面は刷毛目を口縁部では横方向に胴部は縦方向に行い、その後に横方向、縦方向に磨きを施している。内面は体部をヘラ削りし、その後に刷毛目を施し、最後は磨きで仕上げている。5は低脚高壺かまたは器台の脚部。プロポーションは截頭円錐に近い形で内湾しながら端部に向かって



- I a 茶色土 SDO 2層土やや砂質を含みアズキ大の  
マンガン結晶を含む。  
I b 茶褐色土 SDO 2層土 I aに対し粘質が強いが分層は明確に  
しない褐色土ブロックを含む。  
II 茶褐色土 SDO 1層、茶色と褐色のブロック土が混在する  
粘質はさほど強くない。  
III 淡褐色土 IIに比べてやや明るく砂質が多い。  
IV 茶褐色土 II層に類似、暗山面の海り誤りかもしない。

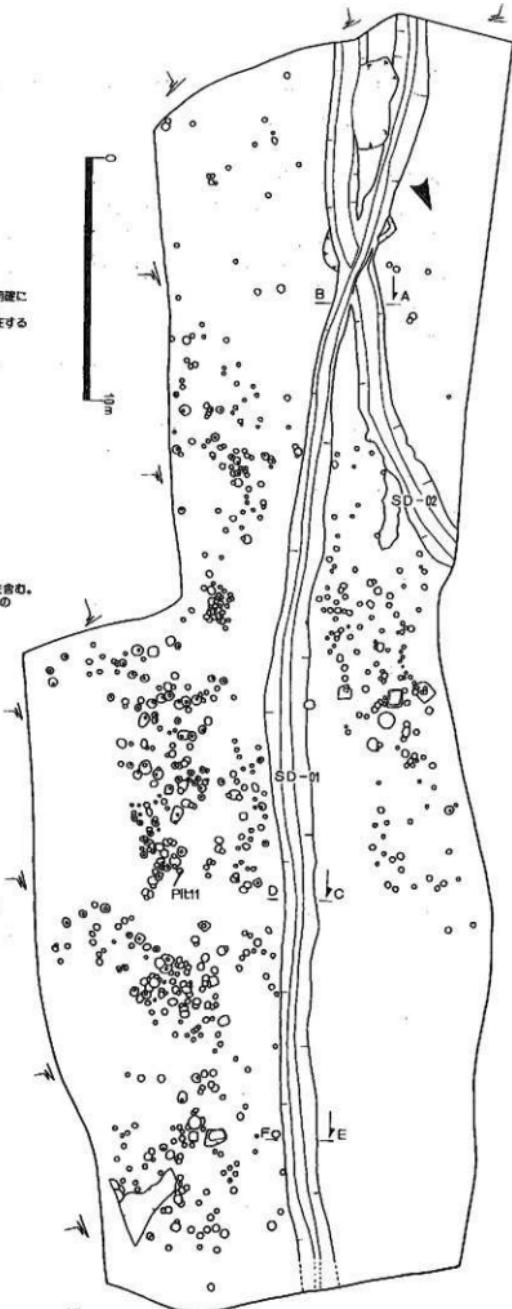


- I. 暗茶褐色土 粘質は多いが、やや砂質を含む。褐色ブロックを含む。  
II. 茶褐色土 茶色と褐色のブロック上が混在するSection I の  
層に對応する粘質はさほど強くない。  
III. 淡茶褐色土 Iよりはやや細く粘質は強めで強い。  
IV. 深茶色土 砂質



- I. 茶褐色土 粘質だけ砂質が多く含まれる。アズキ大の  
マンガン結晶を多く含む。  
II. 深茶褐色土 粘質土で褐色のブロックを含む。  
III. 淡茶褐色土 IIに比べてやや明るい褐色ブロックの割合が多い  
Section 1, 2のIIに對応する。  
IV. 国色土 砂質が強く、底層土と差えられる溝内側の  
土壁等の褐色ブロック。  
V. 淡褐色土 IIに比べてやや灰色粘質土を多く含む  
下に行くにつれて砂質が強い。

第41図 第5地点遺構配置図(S=1/200)  
及び溝状遺構土層図(S=1/60)



広がる。四方には円孔が付される。外面は刷毛目調整、内面は上部にシボリの痕を残し、下半は横方向のナデ、坏部内面もナデ調整で仕上げられている。

#### SD-02 (第41図、図版9)

幅1.7m程、深さ50~60cm程度の断面が逆台形になるもので、調査区の南西部で隅を横切るように22mほどを検出した。主軸はほぼ南北で、西側を中心点とするゆるい弧を描く平面形をとる。底面の傾斜は北から南へ下り、現在の犬丸川へ注ぎ込む形になっている。これはSD-01とは逆の流路方向を示す。

#### 遺物 (第42図、表4、図版22)

弥生土器、古式土師器、須恵器などがあり、流れ込みの遺物が含まれていることを示している。

6は弥生土器の長頸壺になると思われるもので、あるいは無頸壺か。胴部は上半より上部が消失しているが、偏球形を呈するだろう。内面はヘラにより縱方向のナデ調整が施されている。底部は平底で断面はレンズ状になっている。弥生時代後期中頃のものだろう。8は須恵器の甕口頸部でやや直立ぎみにゆるく外反し、端部が屈曲して広がる。内外面ともナデ調整で仕上げられ、内面の肩部に至る箇所では削りがみられる。9は遺構底面直上で検出した古式土師器の甕で造営時期に最も近い資料と考えられるもの。「く」の字口縁の頸部がしまって明瞭な稜線が内外面につく。器面調整は内外面とも刷毛目で仕上げられている。時期は庄内式併行期をあてることが出来る。

#### ②Pit (第41図)

Pitはいくつかの集中箇所があり、複数が切り合っているものも多数見られる。しかし遺物の出土数は以外と少なく、紹介出来るものは多くを数えない。

#### Pit-11

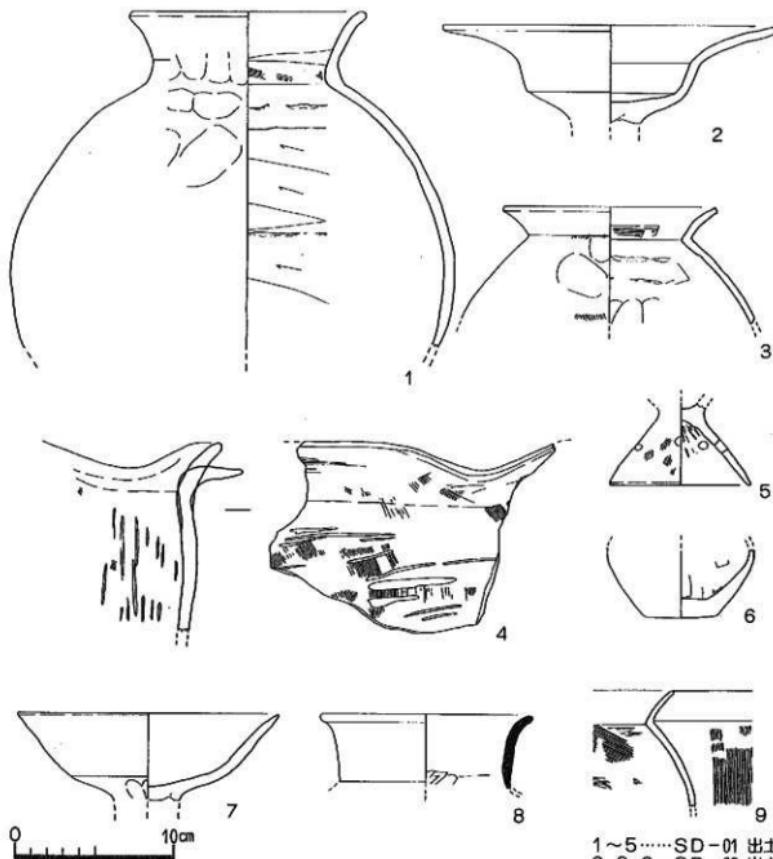
遺構は調査区北東部の最もPitが集中するPit群中に位置しており、他の遺構との切り合いは見られない。

#### 遺物 (第42図、表4、図版22)

土師器の高坏坏部で屈曲点が真中より下位にあり、上部はゆるやかに外反する。外面に指押さえの痕を観察出来るが、器面調整は不明。時期は樋多田遺跡B区SB1出土土器と同時期が想定される。

#### 【遺跡の性格】

2条の溝状遺構はともに4世紀前半を下らない時期の所産と考えられ、川に沿って近くに造られていることや、立地が蛇行する河川の弧を描く内側であることなど、古墳時代初頭の水田灌漑施設の可能性もあり、興味深い。そして出土土器の時期は第4地点の竪穴住居跡に同時期のものがあり、関連も考えられる。Pitには樋多田遺跡B区SB1と同時期の遺物を出土するものがあり、遺跡の位置関係から見ても、関係を認めてよいだろう。また溝状遺構から出土の弥生土器や須恵器そして表採の石器なども同様に考えていいだろう。



第42図 第5地点出土遺物実測図(S=1/3)

1~5……SD-01 出土  
6、8、9……SD-02 出土  
7……Pit-11 出土

土器

表4. 第5地点出土遺物観察表

(単位 cm)

出土 地點 No.	器 種	口 径	底 高	底 径 (mm)	残存 部 分 %	調 査 部 位	調 査 部 上 の 特 徴	備 考
S	1 上部器 壺	14.4			5.0	模様色	皮 角セン石窓斜具石窓 模様紋○	内面内面削り後ナデ、外曲ナデ 底部内面ハケ口あり 外面下部削りなし
	2 下部器 高环	21.1			5.0	模様色	皮 角セン石窓斜具石窓○	内外面ナデ、内式部多方向ナデ
D	3 上部器 壺	13.2			2.0	模様模色	皮 角セン石窓斜具石窓○	削頭内面削り後ナデ 削頭外面及び上縁部内面ハケ口
	4 下部器 筋				2.0	内 傷跡色 外 模様模色	皮 角セン石窓斜具石窓 模様紋○	内面削り後ハケ口削り方向に磨き 外側ハケ口削り方向に磨き
I	5 上部器 高环				5.8	5.0 浅黄色 4.6 3.0 模様模色	庄 角セン石窓斜具石窓○ 角セン石窓斜具石窓○	外面ハケ口、内面ナデ、剥り痕あり、穿孔4ヶ所 内面ナデあり、外曲不明瞭
	6 异生土器 壺				4.0	模様色	皮 角セン石窓斜具石窓○	底面あり
SD	7 上部器 高环	16.2			1.0	模様模色	竹附 角セン石窓斜具石窓○	内面削り不平穢、外曲ナデ、下部削りさえ 削頭内面削りナデ、削頭内面削り
	8 异生土器 壺	13.0			2.0	模様色	皮 角セン石窓斜具石窓○	生焼け
O2	9 上部器 壺							

## (5) 第6地点の調査

### 【遺跡の概要】(第43図、図版10)

八面山に源を発する犬丸川は、下毛郡三光村森山付近で大きく迂回し中津面と名付けられた開析扇状地を侵食しながら、河口付近(今津)で五十石川と合流し周防灘に注ぐ。犬丸川によって開析された平坦面(沖積面)は、三光村森山から中津市加来、福島、伊藤田、野依の各地区に広がるが、総じて狭隘であり、野依付近で若干のまとまりを見せるにすぎない。これは、犬丸川自体が総延長20kmに満たない小規模河川であるためで、流域面積も74km<sup>2</sup>程度である。しかし、流域には今までに多くの遺跡が確認されており、古代から中世にかけて、独自の歴史的足跡を見ることができる。

調査は1991年度に確認調査を行なった結果、遺構が確認されたため表土剥ぎ及び、遺構の検出を実施した。しかし、調査期間及び予算の都合上、本調査の実施は翌1992年度とし、4月から本格的な調査を実施した。ところが、第7地点において工事の都合上急遽本調査を実施する必要性が生じたため、7月になって再度第6地点の調査を中断せざるを得なくなつた。第6地点の調査が再開されたのは翌年(1993年)4月で、終了したのは7月であった。

調査区は延長約210m幅10mで、極めて狭隘な設定となった。これは事業の性格上止むを得ないものであり、必然的に遺跡全体の把握など精査できない部分が生じることとなった。また部分的にかなりの規模で後世の搅乱が認められたが、これは以前に実施された護岸工事によるものと考えられ、搅乱土の中にはコンクリート片なども認められた。

調査の結果、検出された遺構は溝状遺構及び土壤、包含層などで、遺跡全体の性格を把握するには材料不足と言わざるを得ない。また、第6地点が河川の流水により削られる側である左岸に位置したことでもマイナス要因で、検出された遺構群で多くを窺い知ることは困難である。なお地下式壙ではないかと考えられた遺構も存在したが、調査途中で遺構が崩落したため、安全上の配慮から調査未了のまま作業を終えた。

### 【遺構と遺物】

全体的に遺構の配置は散在的であり、調査区東端で4条の溝状遺構と土壤、中程で土壤、西よりの部分で包含層、西端でPit群が検出されたにすぎず、他は搅乱か遺構の無い部分である。

#### ①溝状遺構(第44図、図版11)

調査区東端でまとまって検出された。いずれも同一方向に併行して掘られており、同一時期の所産としてみるのが妥当かと思われる。

##### SD-01

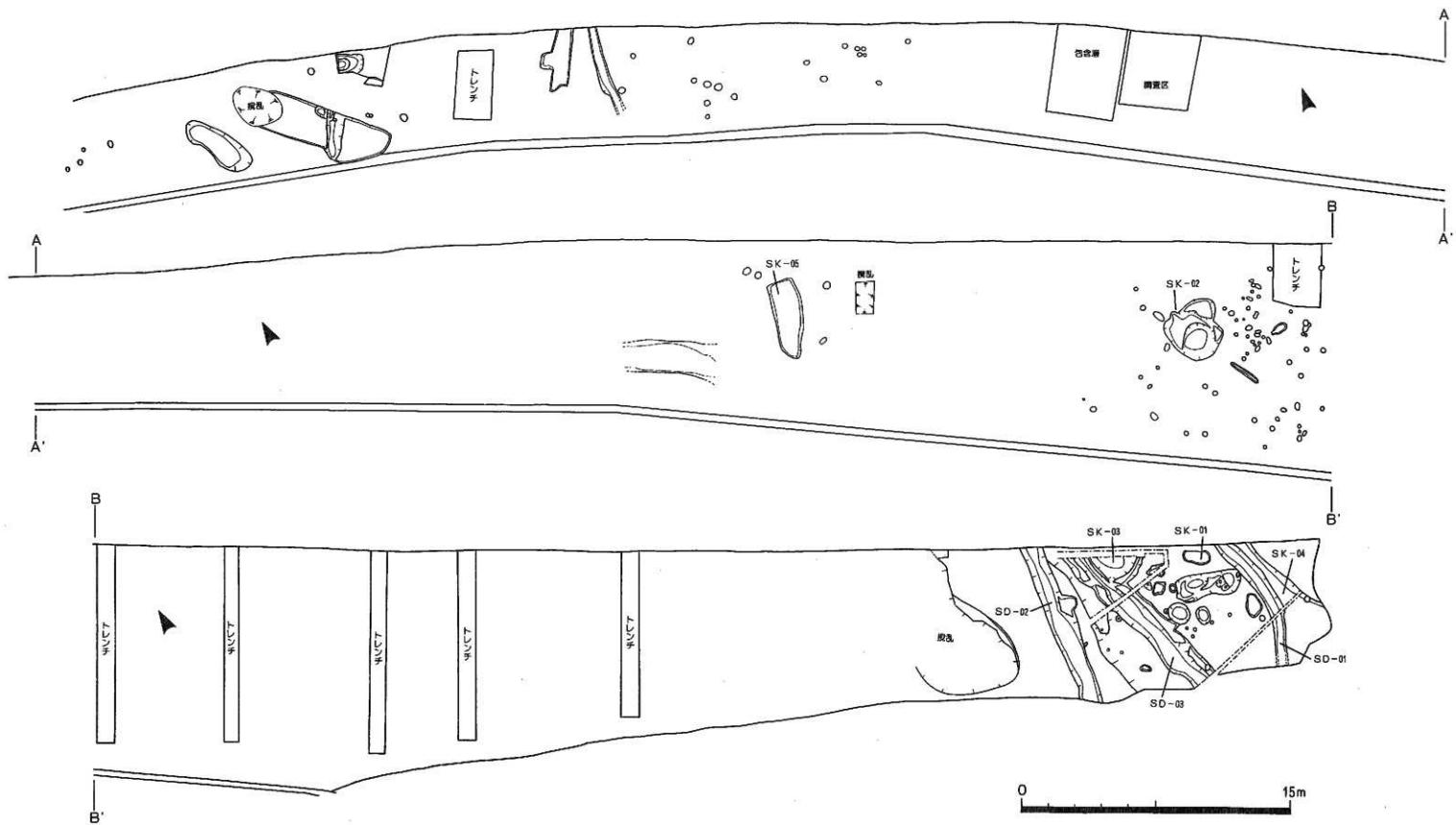
幅80cm程、深さ20cm程度の小規模なもので遺構断面は「U」字を呈し、調査区を斜めに横切る様に北側から南側(河川側)に向か傾斜している。遺物はほとんど検出されていない。

##### SD-02

幅120cm程、深さ30cm程の規模を有し、SD-01に並行して走る。遺物の出土はほとんど無い。

##### SD-03

SD-01とSD-02に挟まれ、これらと並行して走る。二段掘りを呈し上段は北側から南側に向



第43図 第6地点遺構配図図(S=1/200)

末広がりに開き、最大幅400cm程で、すり鉢状の断面を見せ、下段上場との比高差は10~15cm程、北側はSK-03に切られる。下段は幅110cm程、深さ15cm程の規模を有し、若干の遺物を伴う。

#### 遺物（第50図、表5、図版22・23）

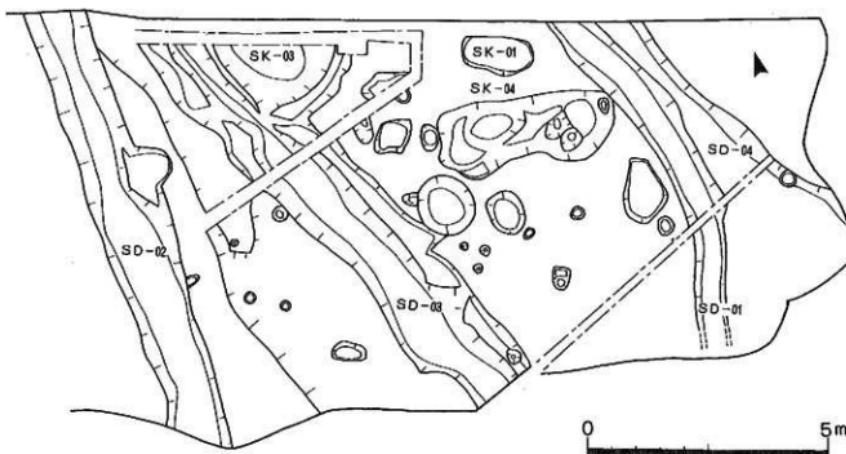
何れも須恵器で坏蓋、坏身、甕などが見られる。坏蓋、坏身をみると大まかに8世紀前半代が考えられるが、4はやや古い要素を見せる。しかし小片でありかつ、溝状造構底面直上ではなく流れ込みと見るのが妥当であり、時期を決定できる遺物ではない。むしろ他の土壌、包含層に共通する要素を見る事ができる。

#### SD-04

西側をSD-01に切られているため全体はつかめないが、推定で幅100cm程度の規模を有すると考えられる。南半部分でまとまった遺物を検出したが、大きく二時期の資料が見られた。

#### 遺物（第50図、表5、図版22・23）

須恵器（5~9）、瓦器椀（12、13）、白磁椀（14、15）、土師器の鍋（11、16）などがみられる。須恵器は6の坏身を含むことから7世紀前半代（第2四半期）の所産と考えられるが、出土状況から溝状造構の成立時期を示すものではないと考えられる。むしろ、瓦器椀、白磁椀などにSD-04を含む4条の溝状造構の時期を求めることが妥当と考えられ、白磁椀は玉縁の口縁をもつなど12世紀代の特徴を有するが、瓦器椀を見ると、高台は断面三角形を成し小径化が見られ、12などは体部が直線的になる傾向も見られる。さらに内外面ともにヘラ磨きがかなり簡略化されており、13世紀中頃の特徴を認めることができる。



第44図 第6地点1~4号溝状造構実測図(S=1/100)

## ②土壙

調査区東端の溝状遺構に付随して (SK-01、03、04)  
また、調査区中央部などに散在的に分布する (SK-02、05)。  
何れも不定形で、特に特徴的ではないが、出土した遺物に  
より二時期に分けられる。

### SK-01 (第45図、図版11)

長軸145cm、短軸80cm、深さ15cm程の楕円形を呈する小  
土壙で、北側は一部調査区外である。

SD-01とSD-03の間に位置する。

### 遺物 (第50図、表5、図版23)

何れも須恵器で壺蓋、壺身、  
甕である。時期は7世紀第1  
四半期か。

### SK-02 (第46図、図版10)

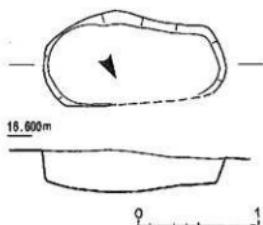
縦じて遺物を含む遺構が少  
ない中で、比較的まとまった  
資料を含んでいた。遺構は長  
軸340cm、短軸300cm程の不  
定形土壙で、3段のテラスを構  
成しながら中心部は円形に落  
ち込む。その比高差は遺構上  
場から30cm程である。また、  
周辺には柱穴がまとまって検  
出されたが、配列は見られな  
い。

### 遺物 (第51図、表5、図版23)

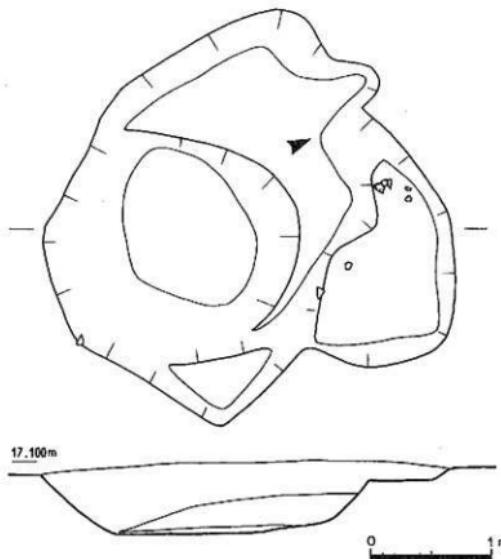
遺物はこの中心部に向け流  
れ込んだ形でレンズ状の堆積  
を見せ、拳大の礫を多く含む。  
遺物は全て須恵器で、甕(20、  
23)、壺身(21、24)、高壺(25、  
26)、横瓶(22)がある。時  
期は21、25などから、7世紀  
第1四半期で取まとると考える。

### SK-03 (第47図、図版11)

北側は調査区外であるが、直径240cm程の円形土壙と思われる。深さは33cmでSD-03と重複する。  
遺物はなく時期は不明である。



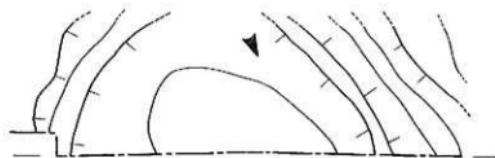
第45図 第6地点1号土壙実測図(S=1/40)



第46図 第6地点2号土壙実測図(S=1/40)

SK-04 (第48図、図版11)

長軸360cm、短軸140cm程の不定形土壙で、小規模なテラスを構成しながら段階的に下がり、西端で底面に至る。比高差は47cmで、遺物を含まないため時期は不明である。



SK-05 (第49図、図版11)

長軸440cm、短軸160cm程の長方形に近い形状を呈する。深さは7cm程で、浅く窪む程度である。遺物 (第51図、表5、図版23) は床面上直上から若干出土しており、土師器の甕(27)、須恵器の脚付杯 (28)などを見ることができる。

### ③包含層

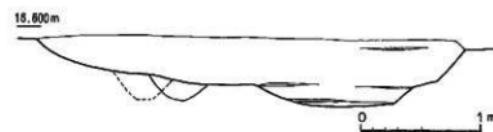
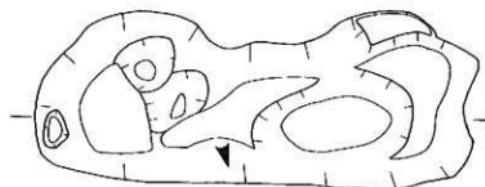
調査区西側でまとまとた遺物が検出された。東側は大きく搅乱されており、遺構を伴わないことや、時期の異なる資料が混在することから包含層として処理した。遺跡の分布する範囲は検出されただけで東西7m程、南北5m程で、北側は一部調査区外で未調査である。

遺物 (第51図、表5、図版23・24)

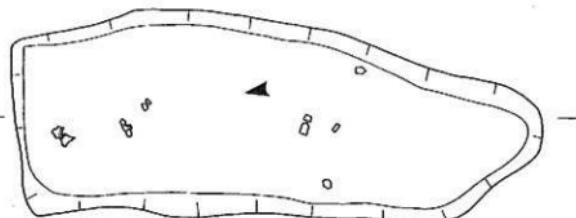
須恵器と土師器が混在しており、古相 (5世紀代) を示すものの (29)、7世紀前半に位置づけられるもの (31、35、36など)、8世紀前半と考えられるもの



第47図 第6地点3号土壤実測図(S=1/40)



第48図 第6地点4号土壤実測図(S=1/40)



第49図 第6地点5号土壤実測図(S=1/40)

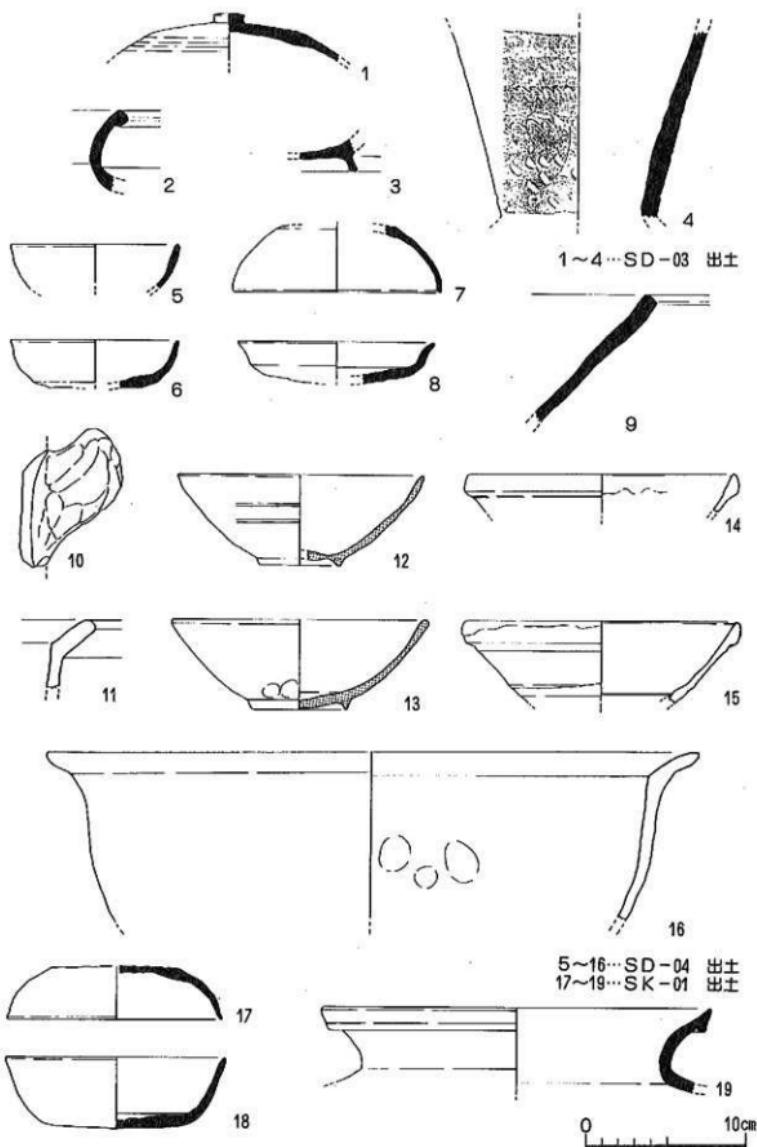
(32、33) の3時期が見られる。こうした在り方は、時期的に本遺跡の性質を示しており、特徴的な造構は伴わないものの注意すべきである。また、図示していないが弥生時代中期の甕も見られる。

#### 【遺跡の性格】

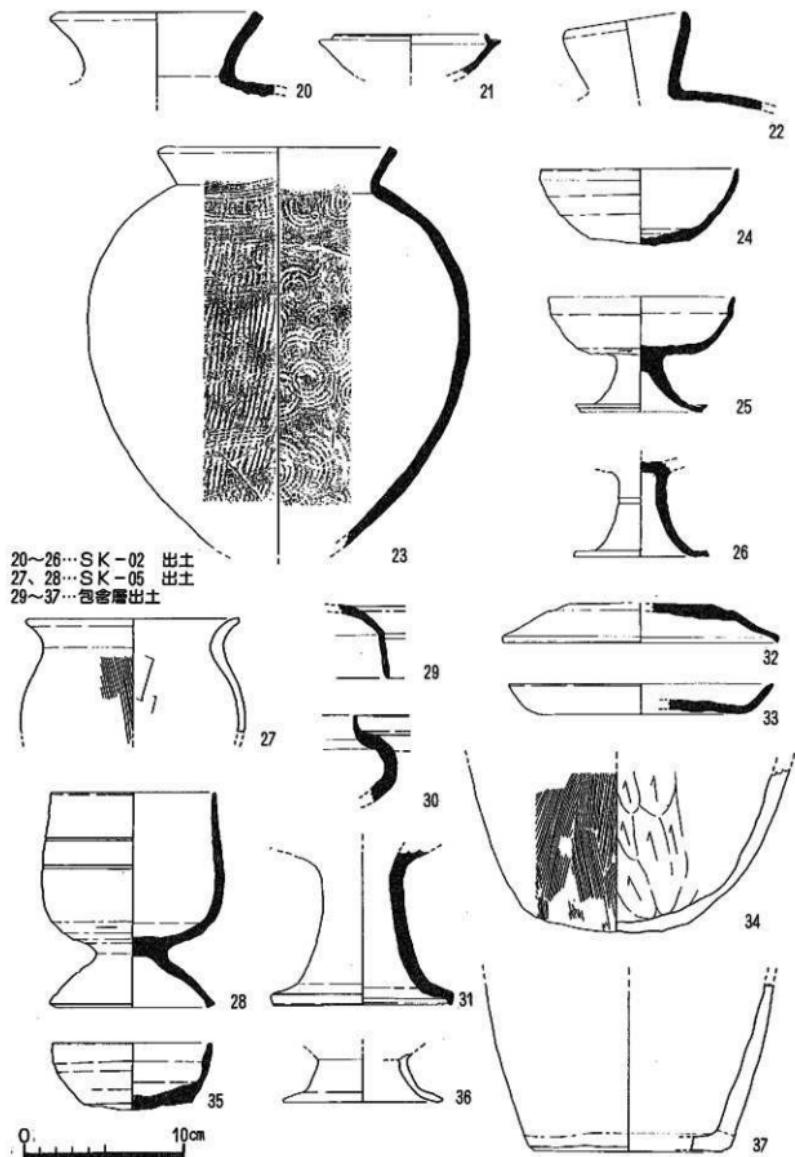
本遺跡については事業の性格上調査区が幅の狭い帯状を呈するため、遺跡全体を把握することは極めて困難なことが予想された。結果は危惧された通りで一定程度の遺構、遺物は検出されたもののこれらを有機的に関連づける材料に乏しく、多くの課題を残した。

まず、弥生時代の資料については中期の遺物が検出されたものの、遺構については特定できなかつた。ただ、周辺には北へ500m程の微高地に八丁遺跡が位置し、調査区北側の微高地に弥生時代の遺跡が所在する可能性はある。古墳時代の資料は一点だけ古相を示すものがあるが、周辺では第6地点右岸の、前田遺跡第2地点で6世紀初頭の竪穴式住居跡が類似するものとして指摘できる。7世紀代の資料は比較的豊富で土壙などを伴い付近に集落の存在を予想させた。特に第2四半期の資料は、伊藤田城山窯跡群B区2号窯跡に特徴的な一群である。13世紀のものは対岸に同時期の前田遺跡が存在し、溝状造構のみの検出ではあるが、調査区北側で今後注意すべきである。

いずれにせよ、多くの成果は得られなかったものの今後に残した課題は多く、周辺地区については注意して見守って行きたい。



第50図 第6地点出土遺物実測図(1)



第51図 第6地点出土遺物実測図(2)(S=1/3)

## 一 器

表5. 第6地点出土遺物記録表

(単位 cm)

地點 No	種 類	口 径	厚 さ	底 形	残存 率 (%)	色 調	施 成	計 上	調整 及 び 寄 手		備 考
									施 成	計 上	
S 1	須恵器 瓢箪				20	淡青灰色	砂粒	斜板石○石英△	目詰模ナデ		
D 2	須恵器 鉢				小片	黃褐色	不良	無砂粒	圓柱模ナデ	牛抜け	
B 3	須恵器 环形				10	古青色	良	斜板石△	圓柱模ナデ、高台内に自磨點		
3 4	須恵器 兵狀壺				5	後古青色	良	石英△	砂粒工具による被文剥離文		
S 5	須恵器 瓢箪	10.4			10	後青灰色	砂粒	石英○	圓柱模ナデ		
D 6	須恵器 瓢箪	10.4	3.8		小片	青灰色	良	石英○白雲母△	武都河窯ヘラ削り、棒部側面横ナデ		
O 7	須恵器 瓢箪	12.5	4.1		8.0	2.0	後青灰色	砂粒	斜板模ナデ、外面部點		
A 8	須恵器 瓢箪	12.2	2.8		2.0	後青灰色	良	斜板石△	直縁ヘラ削り後青灰色、体側側面横ナデ		
S 9	須恵器 瓢箪				小片	淡青灰色	良	石英○無砂粒○	目詰模ナデ		
10	須恵器 鉢				小片	褐色	良	角セメント○斜板石△	てづくね	取手部分	
S 11	土師器 瓢箪				小片	後青色	良	角セメント○斜板石○	模ナデ		
D 12	瓦 磁 瓶				4.0	外曲面褐色	良	角セメント○斜板石○	外面ヘラ削り、折れしており調整小刀痕	内黒	
O 13	瓦 瓦 瓶	16.0	5.6	8.0	6.0	内曲面褐色	良	角セメント○斜板石○	体側外側下区指揮され、調整不規整	内黒	
A 16	土師器 瓢箪	40.5			2.0	外曲面褐色	良	角セメント○斜板石○	内面に指痕、内外面ナデ		
S 17	須恵器 瓢箪	13.2	3.3	7.8	4.0	後青灰色	砂粒	石英○斜板石△	底部ヘラ削り後縫にナデ、体部側面ナデ		
O 18	須恵器 瓢箪	12.4	4.6	8.2	7.0	後青色	不良	斜板△	圓柱模ナデ	直焼け	
1 19	須恵器 瓢箪	24.5			5	後青色	良	角セメント○斜板△	圓柱模ナデ	中焼け	
20	須恵器 瓢箪	12.2			1.0	後青色	良	無砂粒2~3mmの斜板△	頭部側面模ナデ		
S 21	須恵器 瓢箪	8.5			8.0	後青灰色	良	斜板石○	肩部斜面平行タキ、内面側心氏文		
K 22	須恵器 平鉢	7.4			2.0	後青灰色	良	無砂粒○	圓柱模ナデ		
23	須恵器 瓢箪	14.0			4.0	古青色	砂粒	石英△	圓柱模内面心文、外面部から側に平行タキ		
O 24	須恵器 瓢箪	12.3	4.7	6.4	8.0	灰青色	不良	斜板△	上半身側面模ナデ	牛抜け	
25	須恵器 瓢箪	11.7	7.1	7.6	7.0	青灰色	良	石英○斜板石○	底部下側面ヘラ削り、外面部側面模ナデ		
26	須恵器 瓢箪				8.3	5.0	青灰色	良	斜板△	内面部側面模ナデ	
S 27	土師器 瓢箪	13.2			2.0	後青色	良	斜板△	斜板△	内面部模ナデ	
28	須恵器 瓢箪	18.2	13.3	10.5	5.0	青灰色	良	石英○斜板石○	内面部側面模ナデ、底部内面模ナデ		
29	須恵器 瓢箪					後青色	竹	無砂粒			
30	須恵器 瓢箪				2.0	後青灰色	良	斜板石○	内面部側面模ナデ、体部外側下手自然痕		
31	須恵器 瓢箪				11.0	4.0	外曲面黒色	良	石英○	内面部側面模ナデ、外面部點	
32	須恵器 瓢箪	17.1			8.7	4.0	後青色	不良	斜板石○無砂粒△	内面部側面模ナデ、調整不規整	
33	須恵器 瓢箪	16.4	1.9	12.4	4.0	後青灰色	良	角セメント○斜板△	圓柱模ナデ、外底部ヘラ削り後本調整		
34	土師器 瓢箪				4.0	褐色	砂粒	角セメント○斜板△	内面部削り、升角ヘケ日、外底部粗面丸孔		
35	須恵器 瓢箪	10.0	4.1	6.8	8.0	青灰色	良	斜板石○石英△	内面部側面模ナデ、底部ヘラ削り後輪なナデ		
36	土師器 瓢箪				9.9	1.0	後青色	良	角セメント○斜板△	内面部側面模ナデ	
37	土師器 瓢箪				11.7	2.0	後青色	良	角セメント○石英△	内面部側面模ナデ、外面部下側削り、底部地ナデ	

## 貿易物

地點 No	種 類	口 径	厚 さ	底 形	残存 率 (%)	色 調		施 成	計 上	寄 手	製 作 地
						施 成	色 調				
S 14	白磁 杯	16.4			5	黄白色	淡白色	砂粒	ややきめが無い	内面部入あり、気泡多い	中国
S 15	白磁 杯	15.8			3.0	青みがかった淡白色	淡白色	無砂粒	ややきめが無い	外面部泡あり、外面部下側粗	中国

## (6) 第7地点の調査

### 【調査の概要】(第52図、図版12・13)

下毛郡三光村森山で大きく迂回した犬丸川は、中津市福島で洪積台地に遮られさらに大きく迂回し、台地に沿って東進をする。この屈曲点に所在するのが第7地点の遺構群で、北面する洪積台地面には、縄文時代集落として著名な「ボウガキ遺跡」が所在する。また、この洪積台地面には中世の本地域の土豪である福島氏の初期の城館が構えられたと言われ、以前に地下式壙の調査が行われたりした。

こうした歴史的経緯を踏まえ、1992年度に確認調査を実施したところ、小平橋下流の右岸で縄文時代後期の土器、石器などを確認したため、予定を変更し急ぎ本調査を実施することとした。調査は工事日程との関係上4期に分けて実施し、都合A～D地区としたが、同一遺構面であるのでここではあえて区別しない。

調査の結果、検出された遺構は予想に反して中世の溝状遺構が主体であり、期待された縄文時代後期の資料は石器が散見できた程度であった。しかし主体となった中世の溝状遺構からは瓦器などとともに、多くの貿易陶磁器が伴って発見され、その形状から居館を取り囲む方形の濠と考えられた。しかし、ここでも事業の性格上調査区の幅が限られており、総延長120m、最大幅20mという細長い調査区で、遺跡の中心部の調査は将来に課題を残した。

### 【遺構と遺物】

遺構は調査区中央に約30mの空白地帯を挟み、大きく東西に別れた形で検出された。主体となるのは何れも溝状遺構で、特に、東側の溝状遺構は方形に画されており、中世の居館と考えられた。また、この溝状遺構の下層からは弥生時代中期の遺物がまとまって検出されており、河川周辺での調査の難しさを示している。

### ①居館 (第52図、図版13・14)

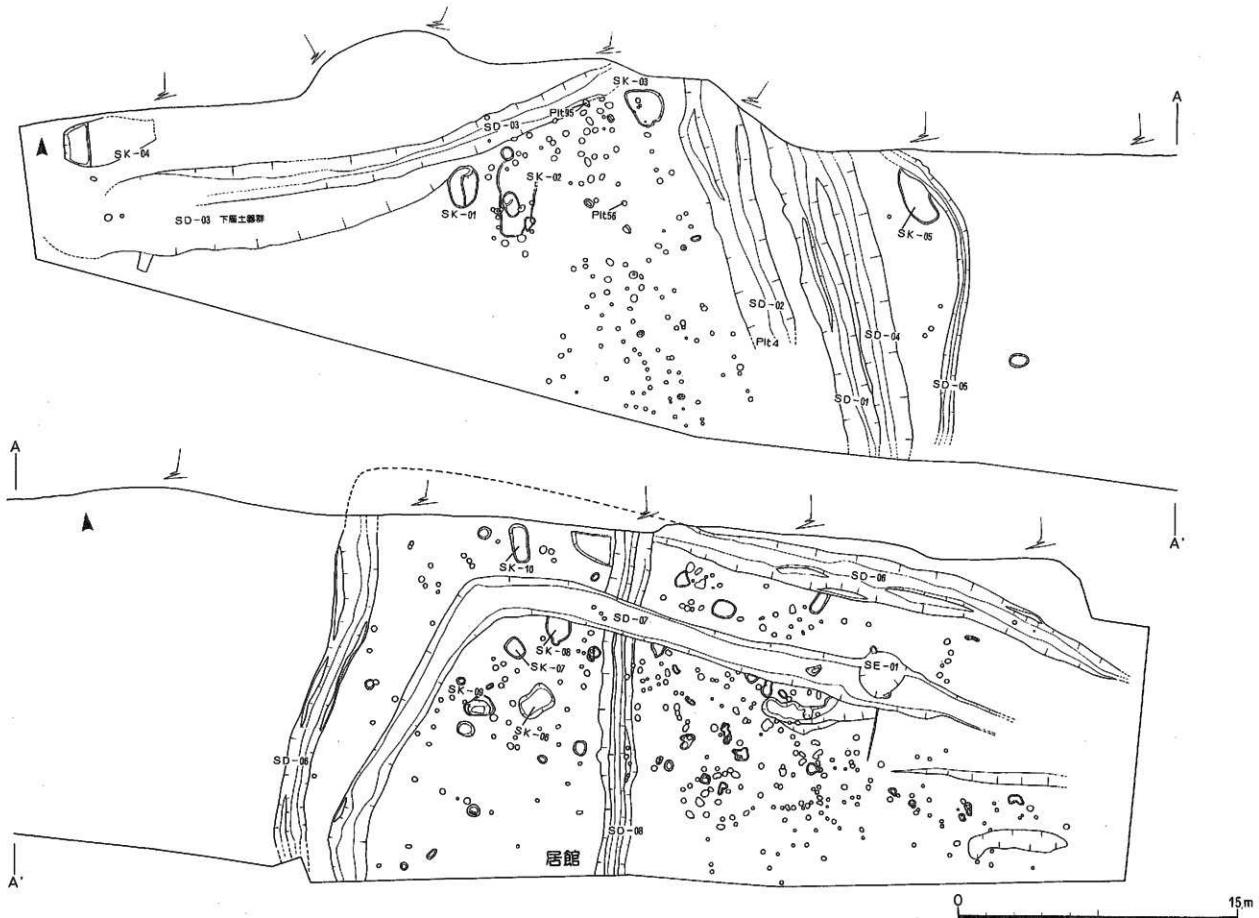
SD-06、SD-07によって構成される二重環濠により区画される居館で、方形区画の二辺と1カ所のコーナーを確認した。居館は主軸をやや東に振り、調査区外南方向へさらに続く。

SD-06は幅150～200cm程、深さ30～40cm程で、方形の北側コーナーを犬丸川の侵食により欠く。遺構断面は「U」字を呈し、東側は地形の削平により消滅する。コーナーが1カ所しか確認できないため、全体の平面規模は不明である。遺構内には、拳よりやや大きめの礫が多く流れ込み、これに伴い遺物もまとまって認められた。

### 遺物 (第56図、表6・7、図版24)

瓦器楕 (59)、青磁皿 (56)、青磁楕 (57、58)、白磁楕 (50～53、55)、白磁の壺? (54)などが見られる。瓦器楕の高台は断面三角形を呈し、内面のヘラ磨きは比較的丁寧になされるが、外側は簡略化される。白磁楕は50のみが玉縁の口縁で、他は平縁である。青磁楕は58のみ同安窯系で、他は龍泉窯系である。瓦器楕の特徴からすれば、13世紀前半代の時期が考えられ、他の貿易陶磁器も概ね妥当な時期幅の範疇であろう。

SD-07はSD-06の内側を沿うように走り、その間隔は300～400cm程である。遺構は幅200cm程、



第52図 第7地点遺構配置地(S=1/200)

深さ30cm程度で、遺構断面は「U」字を呈する。遺物はさほど多くは認められないが、位置関係からすれば、SD-06と同時期であろう。

#### ②溝状遺構（第52図、図版14・15・16）

都合8条の溝状遺構を検出したが、06、07は居館に伴うものでありここでは除外する。また01、02、04は隣接し同一方向に延びることから、極めて強い関係をもつものと考えられる。

#### SD-01

幅200cm、深さ80cm程で、遺構断面は「V」字に近い。SD-04と交わりつつ北側へ延びており、本遺跡の中で最も規模の大きいものである。土層断面を見ると最下層は砂利を多く含んでおり、実際に流水路として機能していた可能性が高い。しかし、上層は一括埋土であり、多量の遺物を含むことから、西側柱穴群に有力な生活遺構を考慮すべきかもしれない。

#### 遺物（第53～55図、表6・7、図版24・25）

1～16は全て貿易陶器で、1～6は白磁碗、7は景德鎮系の合子、8は青磁皿、9～16は青磁碗で、8、9、12は同安窯他は、龍泉窯系である。時期的には11世紀後半を古い例とし、主体は12世紀代、一部13世紀初頭のものを含む。18～21は瓦質の小皿で、22～28は瓦器碗である。瓦器碗の高台は断面三角形を呈し、24、26のように、内面のヘラ磨きは比較的丁寧なものも認められるが、全体にヘラ磨きは粗いか簡略化されている。30、31は瓦質の鉢で、32～39は土師器である。32は甕、33、37、38は釜、34、35は小皿、36は壺、39は鍋である。器種構成は豊富で、瓦器碗を基準とすれば、13世紀前半代の一括資料ということができる。ちなみに17は弥生時代中期の甕で、流れ込みであろうか。

#### SD-02

幅240cm程、深さ90cm程度で、断面は逆台形状を呈する。SD-01の東を並行して走るが、遺物は多く含まない。

#### SD-03

幅120～180cm、深さ50cm程の規模を有する。SD-02に対し直角に屈曲し東から西へ走る。平面形だけで判断するならば、SD-01、02、04などと方形区画を画することなく見えるが、遺構の規模が一回り小さいことから、有機的なつながりはないと考えた。

#### 遺物（第55図、表6、図版24・25）

42の瓦器碗が時期を示すと考えられ、特徴からすれば13世紀初頭か。40、41は弥生式土器で下層の土器群の一部か。

#### SD-04

SD-01と平行し一部交わりながら北側へ延びる。幅180cm程、深さ60cm程で、遺構断面は「U」字形を呈する。土層断面を見ると、切り合い関係ではSD-01を切っており後出である。

#### 遺物（第56図、表6・7、図版24・25）

青磁皿（48）、土師器の壺（44）、瓦器の小皿（45）、瓦器碗（47）瓦質の甕（49）、須恵器壺（46）などが見られる。43は瓦質の深鉢であろうか、口縁付近にスタンプが押される。瓦器碗の特徴からすれば、13世紀中頃と考えられる。

#### SD-05

SD-04東側に位置し、南からやや西に迂回しながら北に延びる。幅60cm程、深さ60cm程で最も小型の溝状造構である。遺物はほとんど無いが、古墳時代の可能性が高い。

#### SD-08

居館を断ち切るように南北に走る。しかし切り合い関係からすれば、SD-06、07から切られしており、居館より前出である。遺物はほとんど検出されていない。

### ③井戸（第52図、図版17）

#### SE-01

250×220cm程の卵形の平面形をもち、深さ約90cmを測る。SD-07を切って掘り込まれており、中には人頭大の河原石を始め、多くの石が投げ込まれていた。こうした在り方は隣接地で調査された前田遺跡などでも認められ、この時期の“井戸封じ”的手法として、この地域では一般的であったと考えられる。

#### 遺物（第57図、表6・7、図版25・26）

瓦器椀（60、61）、瓦器の小皿（63）、土師器の小皿（62）、壺（64、65）、白磁椀（66～68）、瓦質の鉢（69）などが見られる。瓦器椀はかなり粗製で、60などは外面に放射状指頭圧痕が明瞭に見られ、ヘラ磨きは全くなされない。白磁椀は67が玉縁の口縁を有するが、他は平縁である。

### ④土壤（第52図、図版16・17）

全て不定形の土壤で、散在的な分布状況を見せる。いずれも小規模で、用途については明確でない。

#### SK-01

220×160cmの楕円形の平面形をもち、深さ15cm程で、東側に対し西側は一段落ちる。土壤内からは小片ではあるが、比較的まとまった遺物が出土した。

#### 遺物（第57図、表6・7、図版25・26）

瓦器椀（74）、土師器の小皿（73）、青磁椀（75、76）、青磁の皿（70）、などが見られる。瓦器椀は高台断面が方形で、しっかりと貼り付けを行っている。内面も比較的丁寧なヘラ磨きを行っており、さらに体部途中に明確な屈曲点を見せるなど、古相を見せる。時期的には12世紀後半代が想定でき、本遺跡で最も古い様相をもつ。貿易陶磁器のうち、青磁椀は何れも龍泉窯系であるが、皿は同安窯系と考えられる。

#### SK-02

400×200cmの楕円形を呈し、SK-01に隣接する。深さは5cm程度で、北側は削平によりプランが明瞭ではない。また、中央部は140×80cm、深さ10cm程の楕円形の落ち込みを伴う。

#### 遺物（第57図、表6・7、図版26）

瓦器椀（77～79）が主体で、若干の土師器を伴う。瓦器椀は何れも高台が断面三角形を呈し粗製である。ヘラ磨きは明瞭でなく、77などは高台がほとんど退化した様相をみせる。本遺跡出土の瓦器椀のなかで最も時期の下がるもので、13世紀後半代であろうか。

#### SK-03

210×195cmの不定形土壤で、深さは22cm程である。遺物は伴わず、時期は不明である。

#### SK-04

500×250cmの規模を有する不定形土壌で、北側は掘り方がほとんど判別できない。南側は250×140cmの台形状で、深さ30cm程を測る。遺物は小碟を伴い全面に散在的に見られるが、小片であり、時期の特定には至らない。大まかには他の土壌と同時期であろう。

#### SK-05

360×140cm深さ5cm程で、SD-05に切られるが、前後関係については不明である。平面形は梢円形を呈するが用途は不明である。

遺物（第57図、表6）

土師器の釜（80）が見られる。

#### SK-06

200×130cmの隅丸方形を呈し、深さ40cmを測る。土壌内には人頭大の河原石と、若干の遺物を伴う。

遺物（第57図、表7）

青磁の皿？（81）が見られる。

#### SK-07

120×95cmを測り、平面形は隅丸方形である。深さ20cm程で、SK-06の東側に位置する。遺物は伴わない。

#### SK-08

径130cm程の円形を呈し、深さ5cm程度、SD-07に切られる。小碟を伴うが遺物は伴わない。

#### SK-09

160×100cmの不定形土壌で、途中テラスを形成し中央部は円形に落ち込む。円形部分の深さは30cm程で、遺物は伴わない。

#### SK-10

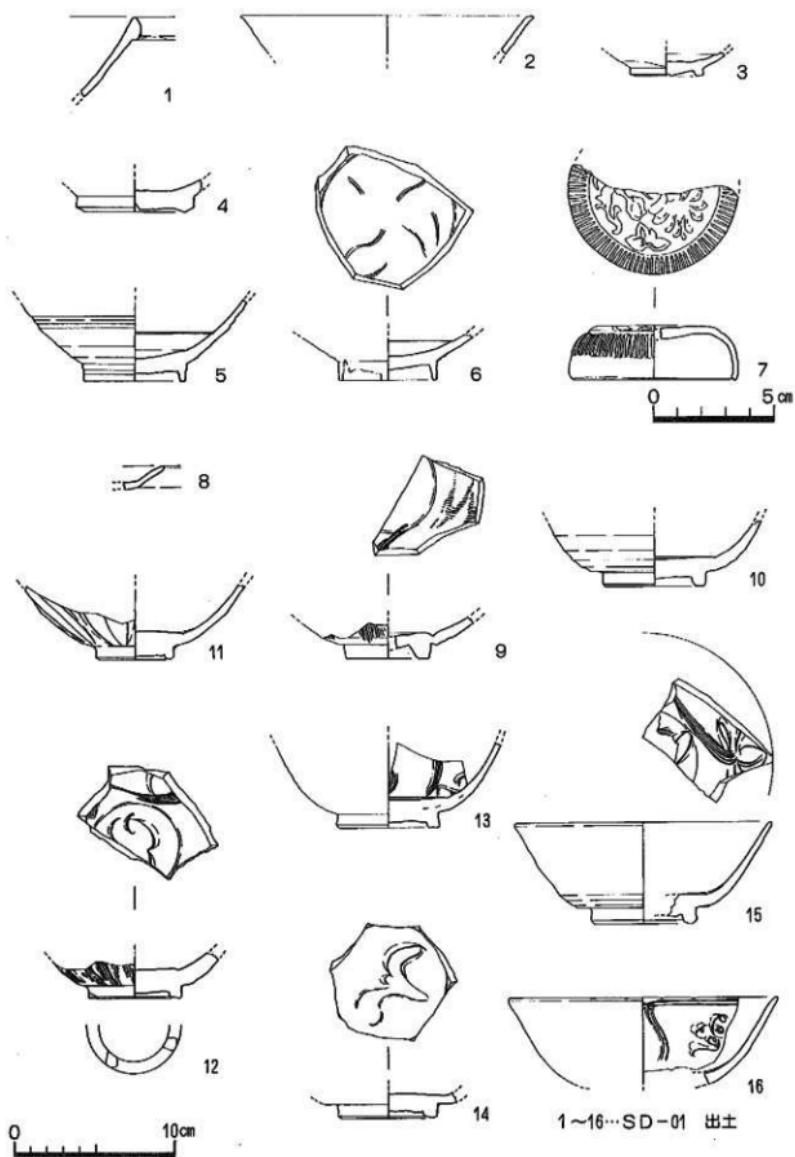
212×94cmを測り、隅丸の長方形を成す。深さ30cm程で、唯一土壌墓の可能性をもつ遺構である。位置的にも居館の二重環濠内（SD-06、SD-07の間）であり、居館の終焉を示すものかもしれない。ただ遺物を伴わず、時期は不明である。

### ⑤SD-03下層出土土器（図版17）

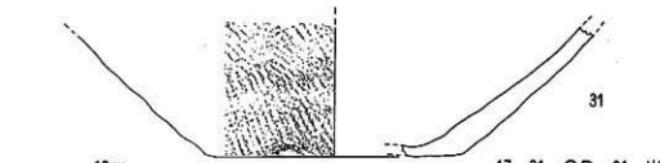
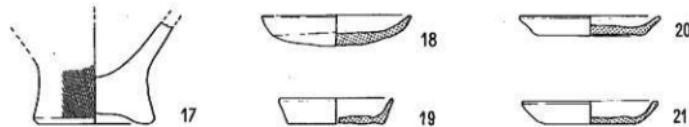
調査終盤でSD-03の下層より弥生式土器の一群を検出した。土層による観察では中世の遺構の乗る面の下層に地形の落ち込みが見られこの落ち込み面に乗る形で一括資料が見られた。特に遺構は伴っておらず犬丸川の氾濫原にあたる点を考慮すれば洪水などによる二次的作用で堆積した可能性が考えられた。

遺物（第58図、表7、図版26）

弥生式土器が主体で壺（84、85、86）及び壺（88、89、90）、高坏（87）等が見られる。時期幅はなく、須玖II式併行であろうか。

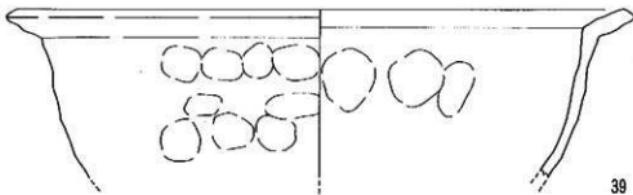
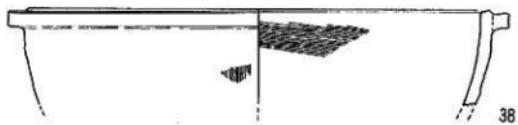
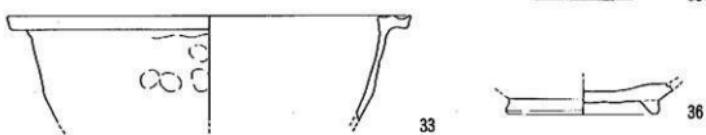
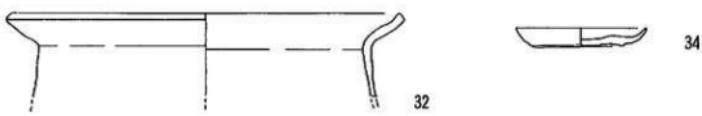


第53図 第7地点出土遺物実測図(1)(1~6、8~16はS=1/3、7はS=1/2)

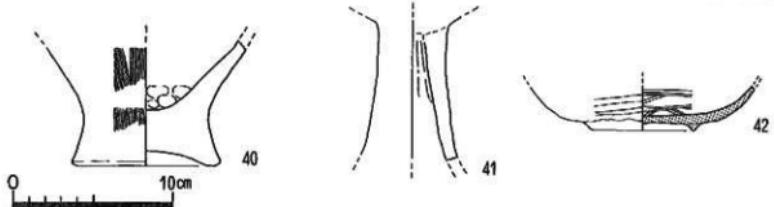


17~31 SD-01 出土

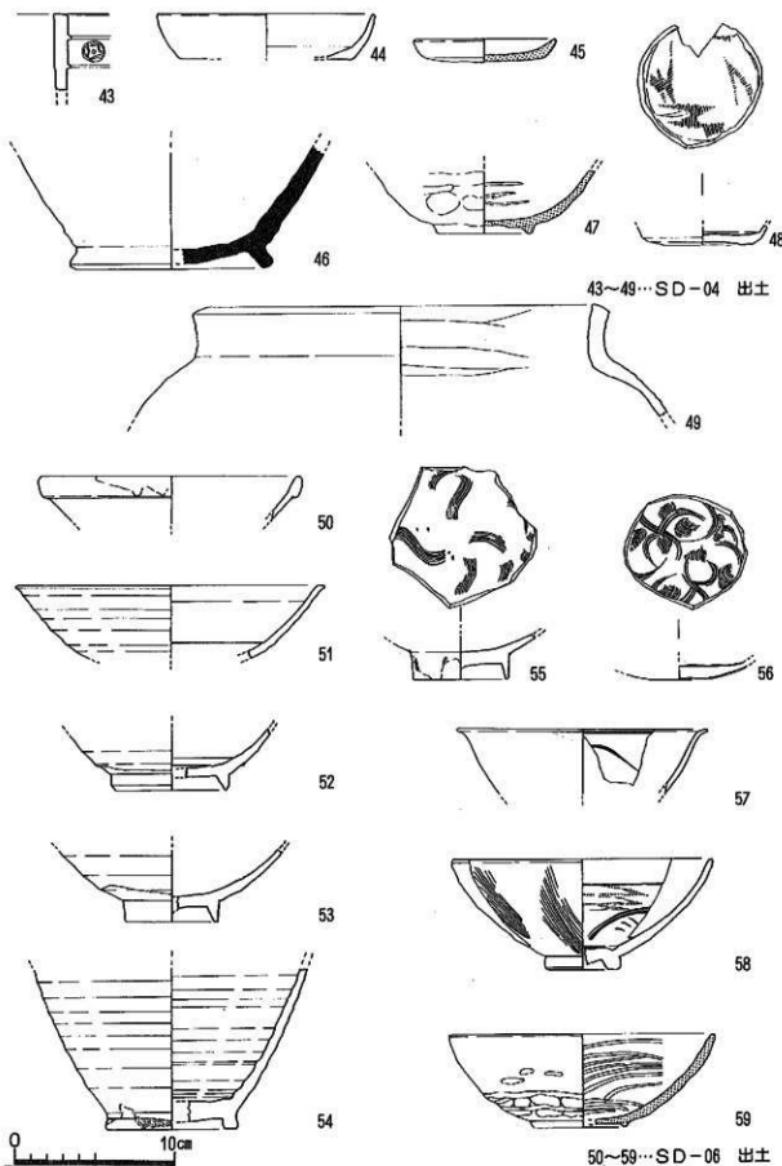
第54図 第7地点出土遺物実測図(2)(S=1/3)



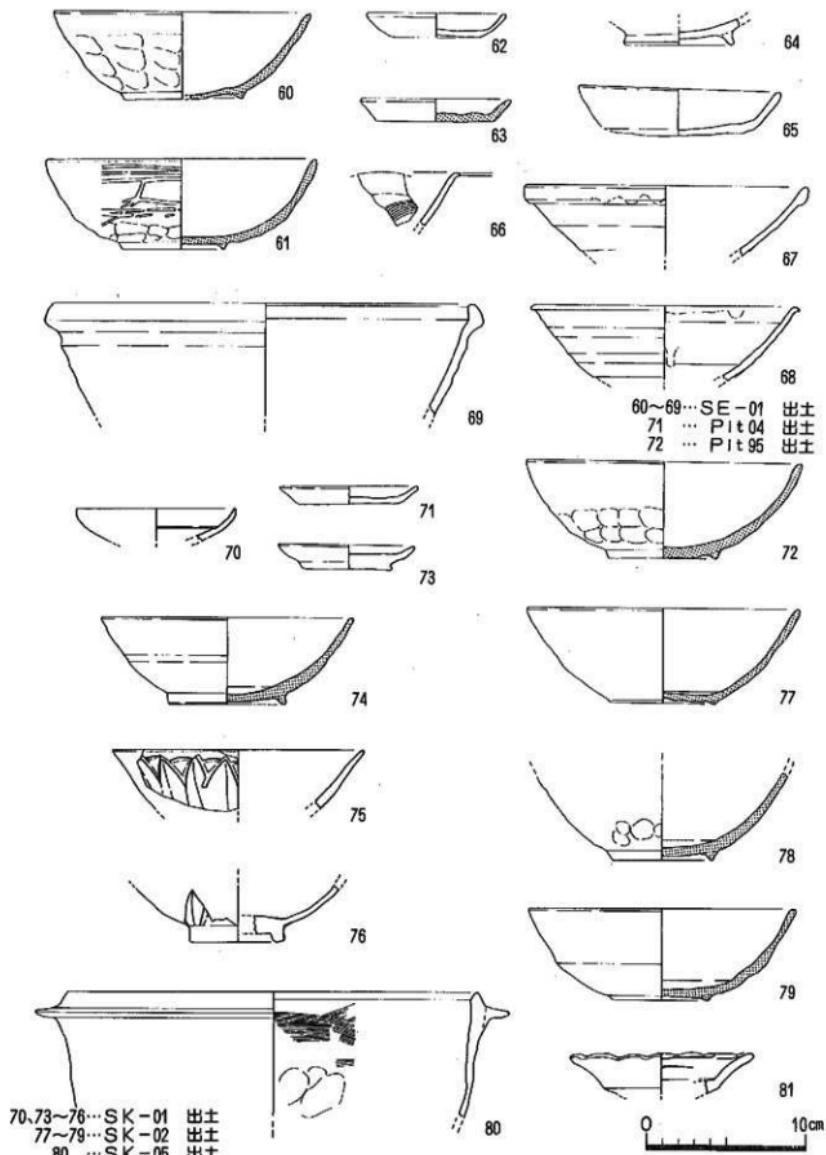
32~39···SD-01 出土  
40~42···SD-03 出土



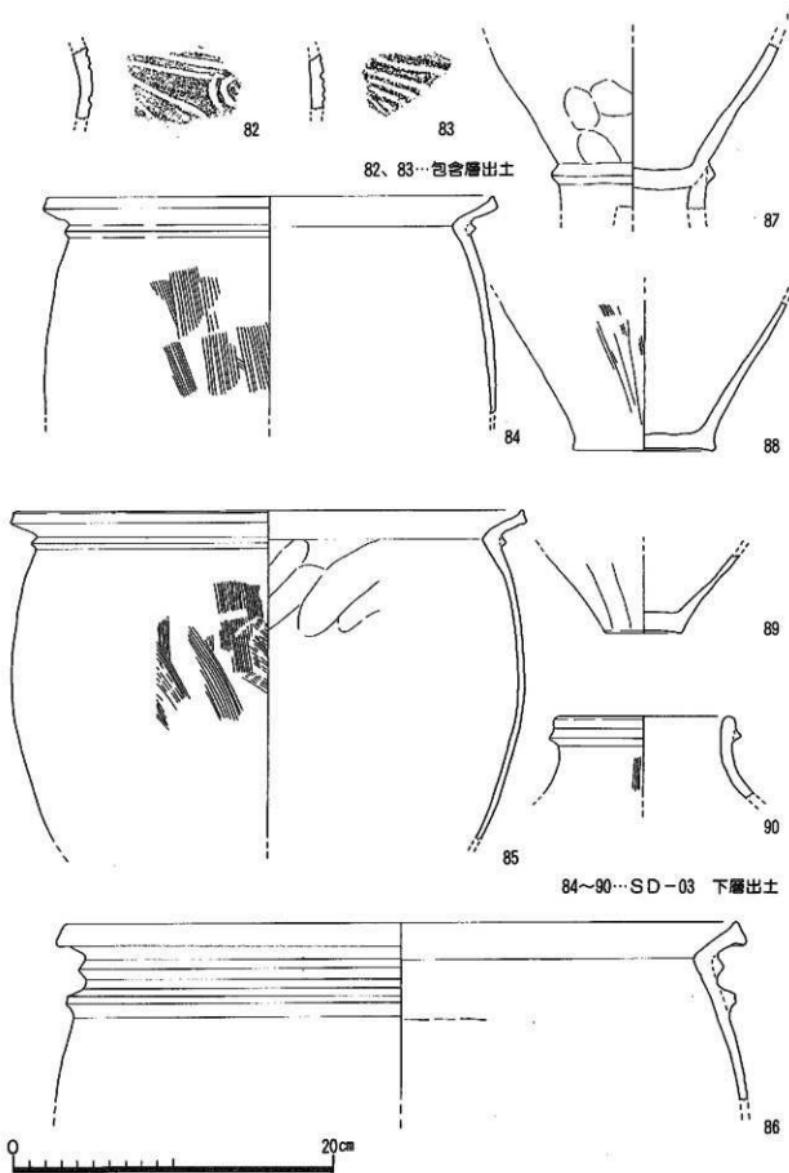
第55図 第7地点出土遺物実測図(3)(S=1/3)



第56図 第7地点出土遺物実測図(4)(S=1/3)



第57圖 第7地点出土遺物実測図(5)(S=1/3)



第58図 第7地点出土遺物実測図(6)(S=1/3)

表6. 第7地点出土遺物觀察表(1)

(単位cm)

出土地點 N番	器種	口径	器高	底径	保存有 色	調 査	積 土	剖 面	及 び 特 徴	備 考	
17	海生土器 瓢			7.6	5	黃白色	良	角せんぐり斜面石底△	外側ハケ付		
18	瓦器 盆	9.3	1.8	8.1	9.0	灰白色・灰色	良	角せんぐり斜面石底△	底部板付・内底部附ナデ		
19	瓦器 盆	7.9	1.6	8.0	4.0	淡褐色	良	角せんぐり斜面石底△	端部赤きり・板付あり・底部板付・斜面不規則		
20	瓦器 盆	8.8	1.2	8.3	4.0	淡褐色	良	斜面石底△	端部赤きり・板付あり・底部板付・斜面不規則		
21	瓦器 盆	8.5	1.4	5.6	5.0	黑色	良	石底△	端部赤きり・内底部ナデ		
22	瓦器 杯	15.4	6.1	8.7	9.0	淡灰褐色	良	角せんぐり斜面石底△	外側下半部押さえ・斜面不規則		
23	瓦器 杯	16.0	5.8	6.0	8.9	9.0	淡灰褐色	角せんぐり斜面石底△	外側下半部押さえ・斜面不規則		
24	瓦器 杯	16.8	5.5	6.2	5.0	暗褐色	良	角せんぐり斜面石底△	外側ハケ付・外側に凹凸の指痕		
25	瓦器 杯	16.6	5.6	7.0	4.0	淡灰褐色	良	端部1-2cmの牛	外側下半部押さえ・斜面不規則		
26	瓦器 杯	16.7	5.4	6.0	6.0	褐色	良	角せんぐり斜面石底△	外側下半部押さえ・斜面不規則		
27	瓦器 杯	17.0	5.7	7.0	6.0	白灰褐色	良	斜面石底△	外側下半部押さえ・斜面不規則		
28	瓦器 杯	17.0	5.3	5.7	4.0	灰褐色	良	斜面石底△	外側下半部押さえ・斜面不規則		
29	瓦器 上器				8.4	4.0	灰褐色	小良	石底○斜面石底○	外側端部斜なナデ・内面斜修不明確	
30	瓦質土器 片	28.0			2.0	淡褐色	良	角せんぐり斜面石底△	斜面付		
31	瓦質土器 瓢			18.0	5	黃褐色	良	斜面石底△	外側斜子口タキ	内面端付	
32	土器器 盆	24.2			5	黃白色	中良	角せんぐり斜面石底△	内面端修不明確		
33	土器器 盆	25.2			5	深褐色	良	斜面石底△	斜面付		
34	土器器 盆	8.1	1.2	5.8		淡褐色	中良	角せんぐり斜面石底△	内外斜修ナデ・底部赤り後赤口あり		
35	土器器 盆	8.5	1.05	6.3		淡褐色	良	赤色鐵鉄△	斜面不規則		
36	土器器 片			9.6	5.0	向	不良	角せんぐり斜面石底○	調整不規則・蓋台内へラ状底が円形にめぐる		
37	土器器 盆	28.7		1.0	内面赤褐色	良	角せんぐり斜面石底△	内面赤ナデ			
38	土器器 盆	25.8			小片	偏紅	良	角せんぐり斜面石底△	外側ハケ付		
39	土器器 瓢	39.4			3.0	暗褐色	良	角せんぐり斜面石底△	内側ナデ・指揮され	轟石	
					~暗褐色						
S 40	海生土器 瓢			8.6	1.0	淡赤褐色	良	角せんぐり斜面石底○	外側ハケ付		
0 41	海生土器 瓢				3.0	淡褐色	中良	角せんぐり斜面石底△	斜面不規則		
3 42	瓦器 杯			1.4	4.0	暗褐色	良	斜面石底△	外側ハケ付・底付・底付上		
S 43	瓦質土器 片				小片	淡褐色	良	角せんぐり斜面石底○	内面削り・外側ナデ		
D 44	土器器 盆	12.6	28.0	18.6	1.0	淡褐色	良	角せんぐり斜面石底△	底部赤り・調整不規則		
O 45	瓦器 盆	8.8	1.4	7.4	3.0	内面灰褐色	中良	角せんぐり斜面石底△	底部赤り・調整不規則		
4 46	陶火器 盆			12.6	2.0	灰白色	良	斜面石底△	内外面端なナデ・高台内自然堆		
47	瓦器 杯				8.0	3.0	灰白色	斜面石底△	内面端なナデ・底付・斜面不規則		
48	瓦器 杯	28.2			1.0	黑色	良	斜面石底△	内面ケズリ・斜面ナデ・外側斜子口タキ	外側斜付	
SDK 50	瓦器 杯	18.0	5.7-5.8	5.9	8.0	黃白色	良	角せんぐり斜面石底△	内面へつき・外側下半部押さえ底へつぬけ		
S 51	瓦器 杯	16.1	5.1-5.5	7.0	7.0	暗褐色	良	角せんぐり斜面石底△	外側斜付され・斜面不規則		
R 52	瓦器 杯	17.0	5.7	8.4	5.0	黃白色	良	角せんぐり斜面石底△	外側へつぬけ・押し出しの跡面		
R 53	瓦器 杯	8.7	1.4	5.6	5.0	黃白色	良	斜面石底△	斜面不規則・底部板目あり		
R 54	瓦器 杯	9.3	1.5	7.2	5.0	淡褐色	良	角せんぐり斜面石底△	内底斜修ナデ・底付赤り・斜面不規則		
O 55	土器器 片				2.0	淡褐色	小良	角せんぐり斜面石底△	斜面不規則		
O 56	土器器 盆	12.4	2.7-3.1	8.5	8.0	淡褐色	中良	角せんぐり斜面石底△	四隅不規則		
1 57	瓦質土器 片	28.5			小片	灰褐色	良	斜面石底△	外側ナデ・内側ナデ		
pIT 58	土器器 盆	8.6	1.1	4.8	9.0	淡褐色	良	角せんぐり斜面石底△	四隅不規則・底面赤り		
4 59	瓦器 杯	17.2	8.1	6.8	1.00	内面黒褐色 外面白色	良	角せんぐり斜面石底△	外側下半部押さえ・調整不規則		
S 60	土器器 盆	8.5	1.6	5.7	1.00	内面褐色	良	角せんぐり斜面石底△	内底斜修ナデ・内側ナデ		
K 61	瓦器 杯	15.5	5.3	7.2	7.0	外側褐色 内側灰色	良	角せんぐり斜面石底△	四隅不規則		

## 一土器

表7. 第7地点出土遺物観察表(2)

(単位: cm)

測定地番 No.	器種	口径 cm	高 cm	底 径 (mm)	底 厚 mm	色 調	底成 分	胎 土	特 徴	備 考	
S 77	瓦器 瓶	16.6	5.9	5.0	6.3	外白灰褐色 内 褐褐色	不良	角セメント強接着	倒錐形底		
K 78	瓦器 瓶			5.0	6.0	内 褐黑色	良	角セメント強接着	外面部鋸ざら、四壁不規則		
O 79	瓦器 瓶	16.6	5.8	5.8	8.0	黄色	中良	角セメント強接着	外面部鋸ざら、高台板口あり		
SIM 80	土器盤 盆	25.4			5	浅褐色	良	角セメント強接着	内面部鋸ざら口、下平底押さえ 34°大の白色斜キ	外面部鋸ざら	
他 82	陶土器					小片	暗褐色	良	角セメント強接着	内面部鋸ざら、外面部斜文軸方向へ削肥	
他 83	陶土器					小片	暗褐色	良	角セメント強接着	内面部鋸ざら	
S 84	赤生土器 瓶	24.8		1.0	1.0	黄色	良	角セメント強接着	内面部鋸ざら、縦ノゾム、外面部ケル	外面部鋸ざら付石	
S 85	赤生土器 瓶	21.8		3.0	3.0	淡褐色	良	角セメント強接着	内面部ナガ、外面部ケル		
D 86	赤生土器 瓶	41.7		1.0	1.0	淡褐色	良	角セメント強接着	内面部鋸ざら		
新 87	赤生土器 瓶			5.0	5.0	外 赤褐色	不良	角セメント強接着	倒錐形不規則、外面部下平底押さえ 倒錐形にスカリあり		
A 88	赤生土器				8.8	1.0	外 赤褐色	良	角セメント強接着	内面部鋸ざら、外面部ハケ目	
F 89	赤生土器 瓶				4.0	1.0	淡黄色	良	角セメント強接着	外面部ナガ、倒錐形不規則	
西 90	赤生土器 瓶	19.6			1.0	淡褐色	良	角セメント強接着	倒錐形不規則		

## 一貿易陶磁

測定地番 No.	器種	口径 cm	高 cm	底径 mm	底 厚 mm	色 調	胎 土	特 徴	施作場
1 1	白陶 瓶					小片 青みがかった白色	灰白色	ややさめがあら 体部半身より内面、貫入あり	中国
2 2	白陶 瓶	18.3				5 淡褐色	灰白色	ややさめがあら 胎膜痕	中国
3 3	白陶 瓶			4.5	5	青みがかった白色	灰白色	ややさめがあら 見込み地の目録は書	中国
4 4	白陶 瓶			7.4	5	青みがかった白色	灰白色	ややさめがあら 薄胎地、胎膜痕あり	中国
5 5	白陶 瓶	8.4			3.0	青みがかった白色	灰白色 白	見込み地、高台脚部、気泡が多い 見込み地、高台脚部、気泡が多い 胎がつい、内面部擦文	中国 中国
S 6	白陶 瓶			6.2	3.0	青みがかった白色	灰白色 白	見込み地 胎膜痕	中国 中国
D 7	青白陶 合子瓶	7.0	2.3	5.0	5.0	淡い水色	灰白色	ややさめがあら 外腹、見込み天外部に點	其他地区
9 8	青白陶 盖				5	淡褐色	淡灰褐色	ややさめがあら 内斜面細かい貫入、外斜面下斜面	同安窯系
O 9	青白陶 瓶			5.2	1.0	淡い水色	灰色	ややさめがあら 高台脚部、内斜面擦文	同安窯系
10 10	青白陶 瓶			6.4	4.0	暗褐色	暗褐色	やや外側まで黒、底貫少し	同安窯系
11 11	青白陶 瓶			5.0	4.0	青褐色	暗褐色	片形片割擦文、外斜面貫入、高台外側まで黒	同安窯系
12 12	青白陶 瓶			5.8	2.0	青褐色	暗褐色	外斜面片割擦文に轉換し、内斜面片割 内斜面貫入、高台外側まで黒	同安窯系
13 13	青白陶 瓶			8.4	4.0	暗青褐色	暗褐色	内斜面片割擦文、高台外側まで黒	同安窯系
14 14	青白陶 瓶			8.2	2.0	淡青色	暗褐色	内斜面片割擦文、内斜面黒、高台外側まで黒	同安窯系
15 15	青白陶 瓶	16.2	5.3	6.0	2.0	暗青褐色	暗褐色	内斜面片割擦文、内斜面黒、14號脚踏花	同安窯系
16 16	青白陶 瓶	16.8			2.0	暗青褐色	暗褐色	内斜面片割擦文、内斜面黒、14號脚踏花	同安窯系
SIM 17	青白陶 盖			4.8	6.0	青褐色	灰白色	内斜面片割擦文、内斜面黒、貫入、底貫	同安窯系
50 50	白陶 瓶	18.8			5	灰白色	灰白色	土端、厚い脚、内斜面黒、貫入	中国
S 51 51	白陶 瓶	19.5		1.0	1.0	青みがかった白色	灰白色	ややさめがあら 見込み地、外斜面片割が多い	中国
S 52 52	白陶 瓶			6.8	2.0	乳白色	白色	見込み地の日字、高台脚部、外斜面	中国
D 53 53	白陶 瓶			5.8	2.0	灰白色	灰白色	見込み地、高台脚部、気泡が多い、見込み灰	中国
D 54 54	白陶 瓶			8.0	2.0	青みがかった灰白色	灰白色	高台脚部、見込み灰	中国
O 55 55	白陶 瓶			6.0	3.0	青褐色	灰白色	内斜面擦文、高台脚部、外斜面	中国
6 56 56	青白陶 盖			3.8	5.0	深褐色	灰褐色	内斜面擦文、内斜面貫入、油脂痕	其他地区
57 57	青白陶 瓶	15.8			5	深褐色	灰褐色	内斜面片割擦文、内斜面黒	
58 58	青白陶 瓶	16.2	6.9	4.0	4.0	被膜周角	灰褐色 青めがあら	火心中より垂れが流れ 火心中より垂れが流れ	同安窯系
SIM 59 59	白陶 瓶					青みがかった灰白色	深褐色	内斜面擦文	
60 60	白陶 瓶					青みがかった灰白色	深褐色	内斜面擦文	
61 61	白陶 瓶	17.8			5	青みがかった灰白色	灰白色 青めがあら	生根、荒い質、気泡が多い、外斜面下斜面	中国
1 62 62	白陶 瓶	16.8		1.0	1.0	青みがかった灰白色	灰褐色	見込み地、外斜面下斜面	中国
SIM 63 63	青白陶 盖	16.0			3.0	深褐色	灰褐色	外斜面黒、貫入	同安窯系
SIM 64 64	青白陶 瓶	15.8		2.0	2.0	被膜周角	灰褐色	片形り、粗面介文、内斜面貫入	同安窯系
0 65 65	青白陶 瓶			6.0	1.0	青褐色	灰褐色	高台脚部、内斜面黒、外斜面	同安窯系
1 66 66	青白陶 盖	11.5			3.0	深褐色	灰褐色 青めがあら	内斜面黒、火心中より垂れが流れ	同安窯系

## ⑥その他

上記のほかに柱穴内や包含層から若干の遺物が出土している。

Pit95 (第57図、表6、図版26)

SK-03の西側、SD-03の縁に掘り込まれた柱穴で、柱穴の縁に置かれるようにして、完形の瓦器椀（72）が一点検出された。近接する前田遺跡の例からすると、地鎮に係わる祭祀行為の可能性がある。ただ、遺跡内には明確な建物遺構がなく、明確にはしえない。

## 包含層（第58図、表6）

調査区西側の確認調査時に出土したもので、縄文時代後期の資料（82、83）である。近接するボウガキ遺跡との関連を示すもので、鐘崎Ⅲ式に相当する。他に後述の石器類がある。

### 【遺跡の性格】

第7地点の調査では予想に反して、その主体は12世紀後半～13世紀初頭の遺構群であった。この時期の遺跡については、前田遺跡で同様の調査例が見られるので後述したい。

調査の結果としては、中世の居館跡と思われる遺構をメインとして、溝状遺構からは大量の貿易陶磁器を伴う土器群を検出できた。居館跡と考えられる遺構は調査区の関係上、全体のごく一部（北辺のみ）の調査に終わらため、中心部については未確認である。しかし、方形に区画された二重環濠と、大量の貿易陶磁器の出土は一般的な集落とは考えがたく、こうした在り方はおのずと遺構の性格を物語るものである。

第7地点北面の台地は通称“三の丸台地”と呼ばれ、周辺には今でも濠の跡と思われるクリーク状の溝や土塁などが残り、この台地に居たとされる福島氏の居城を想起させる。福島氏は文明九年（1447）に、現在の長久寺の場所に田丸城を築いて本拠を移しており、本遺跡の存続年代と符合する点は見逃せない。また、過去に三の丸台地では地下式壙（福島地下式壙）の調査も行われており、さらに周辺には城下地下式壙なども所在し本遺跡との関連性を示唆している。

この他、SD-03下層から検出された弥生式土器群は、当該時期の資料が少ない本地区において重要なことで、近年調査の行われた福島遺跡や、ボウガキ遺跡の調査成果と併せて、周辺に弥生時代の拠点集落が存在する可能性を強く示唆した。

## (7) 石器について (第59・60図、図版26)

本遺跡群の調査では、若干の石器資料が検出されている。何れも遺構を伴わず、表探及び流れ込みと考へられる資料である。したがって、ここではこうした石器資料を一括して取り扱い、若干の説明を行いたい。

### 【第4地点】

石鎌（1、2、8）、サイドスクレイパー（11）、扁平打製石斧（12-14）が検出された。1は姫島産黒耀石を素材とし、長さ2.3cm程で、両面とも入念な二次加工を施し仕上げられている。2は緑色泥片岩を素材とし、長さ2.1cmで、大まかな二次加工で仕上げられる。緑色泥片岩を素材とする点で珍しい資料である。8はガラス質安山岩を素材とし、長さ3.7cmを測る。両面とも丁寧な二次加工で仕上げられ、脚部は内傾し細長の美麗な資料である。サイドスクレイパーは姫島産黒耀石の縦長状剥片を用い、一側縁に細かなリッタチを施している。長さ4.2cm、幅2.2cm。扁平打製石斧は、全て緑色泥片岩を素材とする。12は長さ14.1cm、幅7.0cmを測り、周囲に細かな二次加工を施している。所謂「撮形」と分類されるもので、刃部には斜め方向に明瞭な使用痕が見られる。13はやや小型で長さ9.0cm、幅4.3cmを測る。14は、刃部のみ研磨されている所謂局部磨製石斧で、両サイドと刃部に二次加工を施したのち、刃部に研磨を施している。基部を欠失するが幅6.0cm、長さは推定で13cm程度と思われ、「短冊形」を呈する。

### 【第5地点】

石鎌（3、4、9）、石錐（10）がある。石鎌は何れも安山岩を素材とし、比較的粗製である。9はやや大型で、長さ3.7cmを測る。石錐はチャート系の石を素材とし、先端に入念な二次加工を施し鋭く仕上げる。

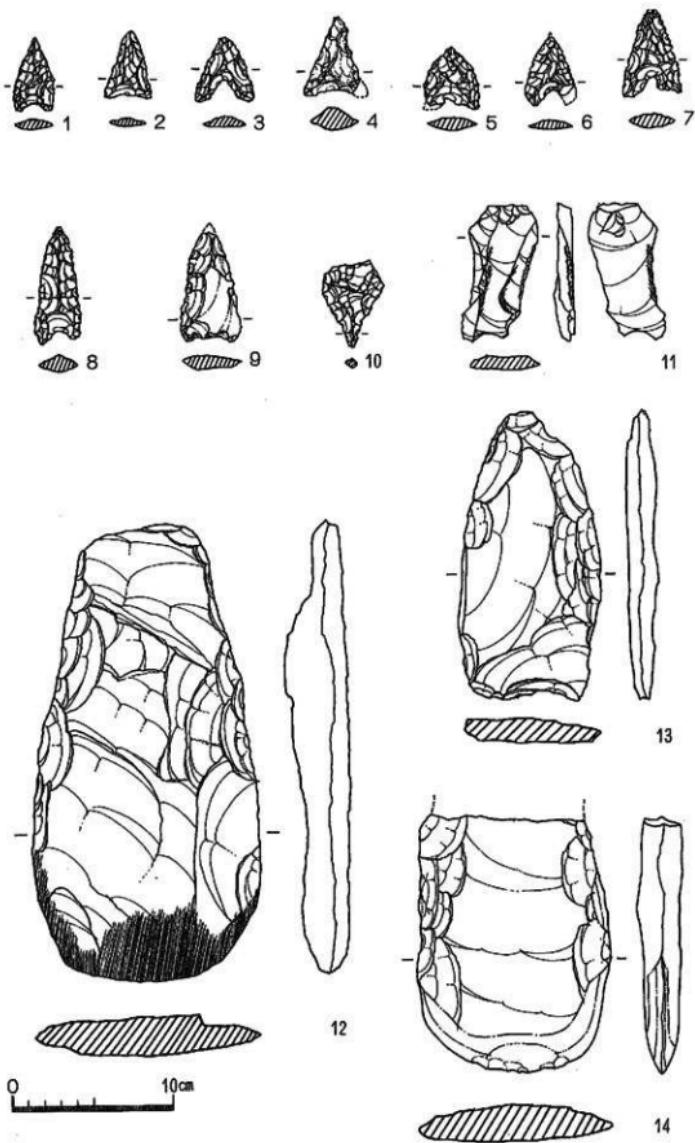
### 【第6地点】

石鎌（5）が検出されている。腰岳産黒耀石を素材とし、側縁は大きくカーブを描き丸みをもつ。抉りは浅く、脚部は片方を欠する。

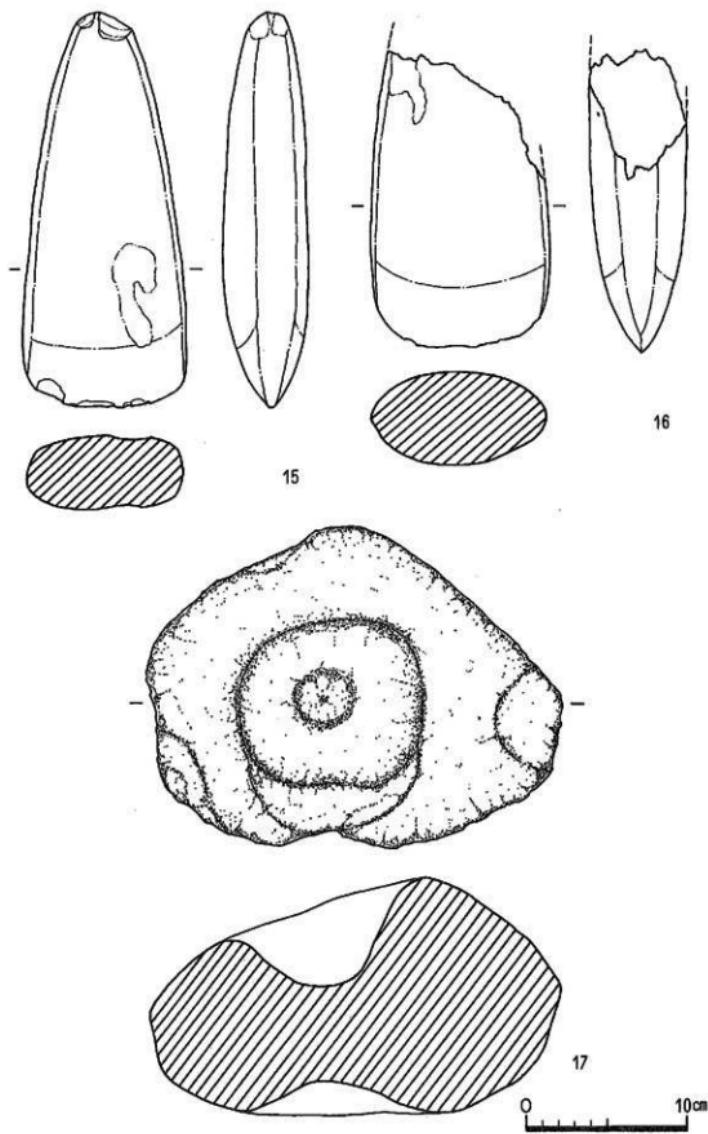
### 【第7地点】

石鎌（6、7）、磨製石斧（15、16）、凹石（17）がある。6は安山岩を用い、長さ2.3cmを測り、脚部片方を欠する。7は姫島産黒耀石を素材とし、側縁は鋸歯状に仕上げられる。長さ2.9cmを測り脚部端は水平に整えられる。磨製石斧は何れも蛇紋岩を用い、入念な研磨により仕上げられる。17は完形で、16は基部を欠く。凹石は砂岩質の自然礫を用い、上下両方向から使い込まれている。

石器は、前述のごとく何れも明確な遺構を伴わないため、その位置づけは曖昧なものとなっている。しかし、周辺の状況から一定の推察は可能で、第4地点の資料はその石器組成の内容と、確認調査時に後期の土器を検出していることからすれば、周辺に同時期の集落の存在を考慮すべきであろう。第5地点のそれは、隣接地の樋多田遺跡の関連遺物であり、第7地点では、ボウガキ遺跡の在り方に起因する資料である。



第59図 犬丸川流域遺跡群出土石器実測図(1)(S=2/3)



第60図 犬丸川流域遺跡群出土石器実測図(1)(S=2/3)

## 第4章 まとめ

### 【はじめに】

今回の犬丸川流域における考古学的調査は、事業の性格上、都合9年もの永きにわたり実施された。これは中津市教育委員会の調査としては異例の長さであり、途中担当者全員が入れ替わってしまうなどしたが、ここによく調査報告書の刊行を見ることが出来た。したがって本報告書の作成に当たっては、それぞれの担当者が別々に執筆を行いつつ、挿図・図版の作成は担当者以外の人が多く係わりおこなわれた。こうした手法は大規模調査及び、継続調査などでは一般的に行われるものであるが、やはり本来的な在り方ではないように思う。そろそろ真剣に考えるべき問題かも知れない。

さて、今回の調査は前述した通り犬丸川流域の歴史的考察をテーマとして実施したものであり、一定の成果を見る事ができた。本地域は犬丸川が開拓した狭隘な沖積平野により構成されており、途中の加米、福島、伊藤田、野依、犬丸は農村地帯として、また、河口の今津は漁港として古代から発達してきた。ここではこうした変遷の背景を踏まえ、今回の調査成果と過去の調査結果を併せ、一つの河川の構成する歴史的空间の特徴を、時代を追いながら紹介し、若干のまとめとしたい。

### 【旧石器時代】

今回の調査では、この時代の資料を得ることはできなかった。周辺では才木遺跡、大坪遺跡に関連資料を見る事ができる。才木遺跡では無斑晶流紋岩の剥片が検出されており、大坪遺跡では三稜尖頭器及び、ナイフ形石器を見る事ができる。何れも単発的な資料であり、多くを知ることはできない。しかし本地域における最古のヒトの足跡を示す資料としては重要で、今後何れかの地点で安定した資料の発見を期待したい。

### 【縄文時代】

今回の調査で断片的ながら、資料の蓄積が見られた。しかしベースとなるのは過去に調査をされた黒水遺跡、樋多田遺跡、ボウガキ遺跡で、本資料はそれらを補足するに過ぎない。

本流域の縄文時代遺跡の出現は古く、黒水遺跡でみられる早期後半の陥居穴と考えられる土壤群が初見である。同様の遺構は原遺跡でもみられ、周辺地域にあたる福岡県豊前市では楕円押型文を中心とした土器群も確認されており（吉木常末遺跡）、将来的には同時代の集落が確認される可能性もある。

前期から中期については全体的な傾向として遺跡数は少なく、本流域についても例外ではない。周辺地域に目を転じても極めて断片的な資料しか得られておらず、その様相を窺い知ることさえ出来ない。

こうした空白とも言える時が過ぎると、流域一帯はにわかに活気づいてくる。その中心となるのが1980年に調査されたボウガキ遺跡で、後期後半の貝塚を伴う集落として著名である。また注目されるのは、竪穴式住居跡内に埋葬された4体の縄文人骨で、数少ない縄文時代後期の人骨である。こうした貝塚遺跡の存在は、一般論として縄文時代の海進・海退による海岸線の復元を試みる材料となるが、ボウガキ遺跡については、宇佐城でいう旧森満での標高を参考にすると中津域の海進時の最進部である可能性はある。しかし、下流の植野貝塚の立地条件や、今回本流域の調査で関連資料が得られていることを考えれば、旧海岸線はもう少し下流であった方がより妥当ではないかと考

えられる。

晩期の資料としては樋多田遺跡の自然流路内より、浅鉢と深鉢のセットが発見されている。特に顕著な遺構は伴わないが、同時代の数少ない資料として注意しておきたい。

### 【弥生時代】

中津市域において、弥生時代の遺跡は他の時代のものに比べその数が少なく、宇佐市域のそれと極めて対称的な在り方を示す。これは弥生時代、中津市域に大きな勢力が存在しなかつたと解すべきか、また、単に調査件数の粗密の結果と解すべきか、議論を要するところである。しかし、近年行われた森山遺跡の調査は、中期中頃～後半の尾根上に営まれた集落の在り方を明らかにし、また、福島遺跡の調査は中期後半の拠点集落の存在を強く示唆した。さらに樋多田遺跡では、自然流路より多量の木製農耕具と、取水施設（杭列）が検出されており、プラントオバール分析によるイネの珪化機動細胞の検出は、中期初頭から大丸川周辺で水田經營が行われていた可能性を肯定する客観的資料を示した。こうした近年の調査成果を踏まえるならば、今後中津市域においても弥生時代の拠点的集落が確認される可能性は高く、本調査においても第4地点でみられた集落跡の広がりや、第7地点の土器群などはその可能性に対して示唆的である。

ここではこうした遺跡のうち、未報告となっている福島遺跡の概略を示し、今後の指標としたい。  
団福島遺跡団（図版27・31）

#### ①遺跡の概要

遺跡は標高25m程の洪積台地に位置し、付近には古代中津の歴史を知るうえで鍵となる、薦神社が鎮座する。調査は鉄塔建設に伴い、約15m四方の極めて限られた範囲で行われたため、多くを期待したものではなかった。しかし、調査の結果は予想をはるかに上回るもので、検出された遺構は墳墓18基、祭祀土壙4基にも上った。調査区内は足の踏み場もない状況で、宇佐市の野口遺跡などの在り方をイメージさせた。

さらに墳墓群は見事な二列埋葬の形態を見せ、かつ2号祭祀土壙には大量の土器が投棄されていた。こうした弥生時代遺跡の在り方は、從来中津市域では見られなかつたもので、やはり薦神社を含む一帯が、古代中津の中でも重要な部分を担っていたことを再認識させた。

#### ②遺構

墳墓は18基確認されたが、その内訳は石蓋土壙墓1基、壺棺墓1基、土壙墓16基で、墓壙は若干の削平を受けているものの、基本的には二段掘りで構築され、一部を除き東西方向に長軸を合わせ二列に配置される。このうち土壙墓には木棺墓1基と、所謂“土器団墓”と呼ばれ、墓壙の頭位と足位を同一固体の破碎した土器（壺）で囲むもの（1基）、さらに、墓壙の小口に立石を行うタイプ（2基）を含んでおり、地域的なバリエーションを見せる。石蓋土壙墓は3枚の鉄平石を用いて蓋とし、墓壙は北側の側面にのみ2枚の板状石を立てるという、極めて特徴的なものであった。壺棺墓は合口の小児用と思われるもので、全体に朱が塗られていた。木棺墓は一部が調査区外であり全体を把握していないが、小口に掘り込みを確認したことから木棺墓とした。

祭祀土壙は何れも不定形で、大きさも様々である。この内注目すべきは2号土壙で、豊富なバリエーションをもつ大量の土器を伴っていた。

#### ③遺物

ほとんどが2号土壙に伴い出土した。器種構成は豊富で、大型の広口壺、高壺、壺などを中心に、豊後型と呼ばれる高杯、長頸壺、短頸壺、脚付短頸壺、杓子状土製品など、バラエティに富んでいる。土器の胎土は極めて精緻で、遺存状態も良い。特に、高壺などは丁寧に磨かれた後に朱が塗られ、

甕も朱を塗ったものが多く、祭祀土器としての特徴を備えている。時期的には後期後半の一群で、全体に上質で洗練されており、豊前地域で発見されたものとしては際立っている。

このように、福島遺跡の調査は從来の中津市域での認識を変えさせるもので、大きな成果をもたらした。遺跡の内容からすれば、周辺に大規模な拠点集落の存在を十分に予想させるもので、今後この時期の宇佐市域との関係を含め、豊前地域に於ける本遺跡の位置づけが問題となろう。いずれにせよ、犬丸川流域の独自性を示す重要な資料と言える。

### 【古墳時代】

この時代の遺跡は、生活の場である集落遺跡と、死後の世界を構成する墳墓群、そして生活の糧としての生産遺跡とに大別出来る。犬丸川流域ではその全ての遺跡を見ることが出来、そうした意味では、バランスの取れた地域社会を構成していたと言える。

このうち集落遺跡としては、上流域で今回調査された犬丸川流域遺跡群第4地点、前田遺跡第2地点、樋多田遺跡、大坪遺跡があり、下流域では十前垣遺跡、中須遺跡が上げられる。

墳墓群は上流域で城山古墳群、黒川古墳、岩井崎横穴墓群、洞ノ上横穴墓群、宇土横墓穴群、寺迫横穴墓群があり、下流域では若狭古墳、鍋島狐塚古墳などをみることができる。

さらに、生産遺跡としては伊藤田窯跡群がある。以下未報告の遺跡について若干の説明を行いその後に流域全体を概観したい。

#### 回前田遺跡第2地点図（図版29・31）

1988年に圃場整備事業に伴い調査が行われた。遺跡は洞ノ上横穴群の前面に位置し、6世紀初頭と後半の竪穴式住居跡4軒と、溝状造構、さらに7世紀後半の土壙などを検出した。注目されたのは溝状造構に伴う井堰と考えられた施設で、周辺に水田造構の存在を予想させた。

#### 回十前垣遺跡図（図版30・31）

中津市大字赤追に所在し、1986年に圃場整備事業に伴い調査が行われた。遺跡は5軒の竪穴式住居跡を中心に構成されており、6世紀後半の散在型集落である。注目されたのは2号竪穴式住居跡から発見された土師器の壺で、完形品としては県下で初例であった。

#### 回中須遺跡図（図版28・31）

中津市大字今津に所在し、1990年学校建設に伴い調査を実施した。遺跡は竪穴式住居跡16軒、掘立柱建物5棟、土壙などで構成される、6世紀末から7世紀初頭の集落であった。本遺跡の特徴はいくつかあるが、ひとつに、竪穴式住居に大小2種類が認められ、これらが対をなす状況が見られたことがある。これはある意味で、集落内における竪穴式住居（造構）の機能分化を示すものかもしれない。また、土壙内に須恵器とともに埋納された鉢壺は集落の性格を表し、竪穴式住居内から出土した壁状造物（材質不明）などは、その構造を示す資料として注目される。いずれにせよ、中津市内で確認された最大の古墳時代集落であり、下流域の拠点的集落である。

以上の調査成果を踏まえ犬丸川流域の古墳時代を概観すれば、上流域では第4地点周辺で少なくとも5世紀から6世紀に至る集落が樋多田遺跡、大坪遺跡と、犬丸川流域遺跡群第5地点とを含めた犬丸川両岸の広範な部分に展開することが確認された。前田遺跡第2地点を含めたこれらの集落

は、上流域での拠点的な集落ではあるが、現段階では伊藤田窯跡群の工人集団との結び付きを指摘できない。犬丸川周辺で水田經營を行いつつ、広範に展開した集落が、6世紀の後半に出現する須恵器の工人集団とどのような接点を持つのか、また前田遺跡第2地点や本遺跡群の該当する時期の集落との関係など、画期的集落の調査が待たれる。ただ、こうした集団が葬られた墳墓群のうち、注目すべきは城山古墳群の19号墳から出土した馬具（杏葉、辻金具）である。金メッキが施されたこの馬具は、その型式から舶載品である可能性が高く、須恵器の生産技術がもともと半島から伝わったものであることからすれば興味深い。また横穴墓群の構造を見ると、本流域のそれは凝灰岩の岸壁に直接掘り込まれたもので、山国川流域の上ノ原横穴墓群が、長大な墓道をもち、豊前地域に特徴的な構造をもつものであることを対称的である。そしてつづく宇土横穴墓群、寺迫横穴墓群に上流域での古墳造営の終焉を見ることかでき、その後、森山遺跡、寺迫遺跡に見られるような火葬墓へと変容して行く。

一方、下流域に目を転じると、上流域に対しやや時期的に下がるもの、中須遺跡を中心とした地域集団の在り方を見ることができる。遺跡は周防灘を望む海岸部に營まれたものであり、内容的に海部集団の集落を強く印象づけている。また時期的に整合性を欠くものの、鍋島狐塚古墳の立地条件をみれば、明らかに海にかかる集団の存在を想起させる。

#### 【奈良時代】

7世紀後半以降、犬丸川流域の人々の営みは伊藤田窯跡群の操業を通じて知ることができる。特に7世紀末～8世紀前半にかけて、ホヤ池窯跡で相原庵寺の瓦が生産された事は重要で、旧下毛郡の中における、本流域の位置付けを決定付けている。また野依遺跡で発見された綠釉陶器も重要で、その意義づけが明確でない現在、今後周辺地域の状況に注意しなければならない。また洞ノ上地区の才木遺跡では、8世紀後半の資料も得られており、洞ノ上窯跡群の実態と合わせ興味深い。

#### 【平安時代以降】

本遺跡群第7地点の資料も踏まえ、平安時代末から鎌倉時代にいたる遺跡としては前田遺跡、安平遺跡、安平北遺跡、野依遺跡があり、他に福島地下式壙、黒水地下式壙、城土地下式壙といった中世のものと考えられる埋葬遺構も見ることができる。このうち、前田遺跡について若干の説明を行う。

#### ○前田遺跡図（図版30・31）

中津市大字伊藤田に所在し、1986年に圃場整備事業に伴い調査された。遺跡は犬丸川流域遺跡群第7地点の東方約800mに位置し、幅4m程で併走する2本の溝状遺構、井戸、土壙墓、不定形土壙などで構成される。全体を検出していないため、この溝状遺構が居住区域を区画するものかまた、道路状遺構といった性格のものか明確にはし得なかったが、第7地点の居館に比べると規模は小さい。井戸は方形と円形のものがみられ、最も状態の良いものは一辺1m程の方形をなし、深さ2mを測る。井戸内には下層に多量の土器類や木器類を投棄した後、人頭大の河原石を大量に投げ込んでおり、この時期の井戸の廃棄パターンかも知れない。また特に井戸枠などは持たない素掘りで、同時期の藤田遺跡（宇佐市）などと比べると、簡素なイメージは否めない。

遺物は青磁碗、白磁碗、瓦器碗、土師器の小皿などとともに、井戸から縦杵、下駄、板などの木製品が出土した。特に下駄は、年代の明確な例としては古期に属する。青磁碗は龍泉窯系のもの、白磁碗は玉緑をなすもので、瓦器碗は12世紀末～13世紀前半に属する一群である。

さて、前章で述べたとおり本遺跡群第7地点の居館は、その規模や出土遺物の豊富さ、さらに立地条件からみて、本流域の土豪である福島氏との関係を考慮すべきであり、対して前田遺跡はこの時期に台頭し始める、有力農民層の居住空間と解るべきかもしれない。また野依遺跡の詳細は知り得ないが、管見する限りでは前田遺跡に類すると思われ、条里地内の立地は示唆的である。

安平、安平北遺跡はやや後出する集落で、14世紀～15世紀の年代が考えられる。遺跡はフイゴの羽口や鉄滓が出土したことから、鍛冶工房の可能性が考えられ、また井戸の縁の小穴に埋置された27枚の私鋳銭は、井戸に係わる祭祀行為の一例として興味深い。

以上、犬丸川流域の歴史的変遷を概観した。前述のごとく、河川という地理的媒体によって有機的なつながりを持つ遺跡群は、共通の歴史的、地理的背景を有しながら、独自の在り方を示す。各時代の在り方は決して山岡川流域、駅館川流域と共通のものではなく、一線を画している。しかしがえてその接点を求めるならば、山国川流域よりむしろ駅館川流域で、縄文時代後期の貝塚遺跡の立地条件や、弥生時代中期の墓制、土器の様相、さらに、平安時代末～鎌倉時代の様相など、共通要素がある。また今回はなし得なかったが、駅館川との間に北流する伊呂波川流域との対比にも興味が持たれる。

このように、犬丸川流域は歴史の表舞台に立つことは少ないが、中津域と宇佐域の中間に位置し、宇佐城との比較の中で重要な位置を占め、さらに今後、中津域での重要な課題である薦神社周辺の調査を進めるうえで、メルクマールとなる地域である。

#### 〈参考文献〉

- 中津市教育委員会1955「豊前中津市城山古墳」  
中津市教育委員会1957「大分県中津市植野貝塚調査報告」  
白木原和美1967「中津市鍋島孤塚古墳」「九州考古学第32号」  
中津市教育委員会1974「福島地下式横穴」  
宇佐市教育委員会・大分県教育委員会1979「石原貝塚・西和田貝塚」  
中津市刊行会1980「中津の歴史」  
宇佐市教育委員会1983「藤田遺跡」「宇佐地区園場整備関係発掘調査概報」  
中津市教育委員会1984「洞ノ上遺跡群Ⅰ」「中津市文化財調査報告書第6集」  
村上久和1984「大分県中津地域出土の瓦器焼について」「古文化談叢第14集」  
宇佐市教育委員会1986「駅館川流域遺跡群発掘調査報告書」「宇佐市文化財調査報告書第2集」  
中津市教育委員会1986「伊藤田城山窯跡群」「中津市文化財調査報告書第5集」  
大分県教育委員会1987「中津市伊藤田地区遺跡群」「一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報」  
大分県教育委員会1988「黒水遺跡」「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」  
大分県教育委員会1988「大坪遺跡」「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」  
大分県教育委員会1992「舎多田遺跡」「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」  
大分県教育委員会1992「森山遺跡」「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」  
大分県教育委員会1992「寺追遺跡」「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(3)」  
大分県教育委員会1992「伊藤田窯跡群」「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(4)」  
中津市教育委員会・三保の文化財を守る会1992「ボウガキ遺跡」  
豊前市1993「豊前市史・考古資料」  
大分県教育委員会1995「森山遺跡」「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(6)」



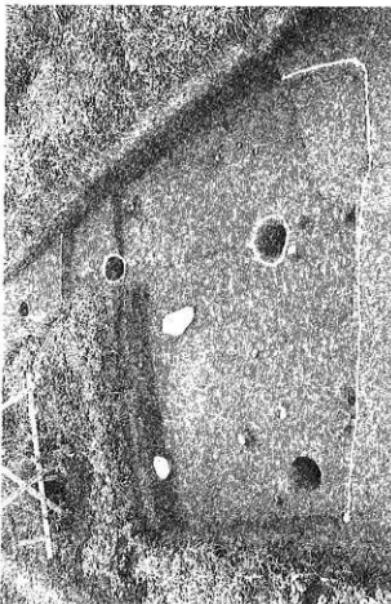
犬丸川流域遺跡群第3地点、第4地点、第5地点遠景（東側上空より）



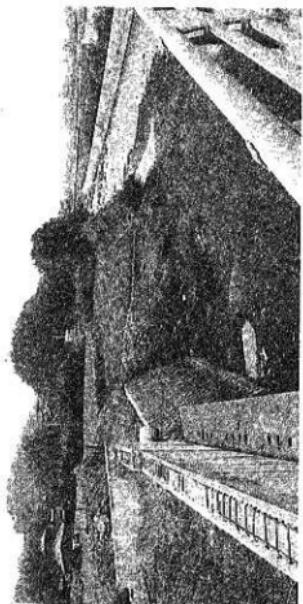
大丸川流域遺跡群第7地点、第6地点遠景（南側上空より）



3. 大丸川流域遺跡群第3地点全景（南側より）



4. 第3地点1号竪穴式住居跡全景（北側より）



1. 大丸川流域遺跡群第1地点、第2地点全景（北側より）



2. 第1地点土層性状況

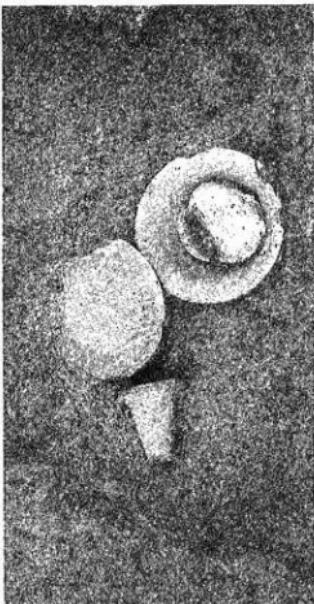


1. 第3地点2号竪穴式住居跡全景 (裏側より)



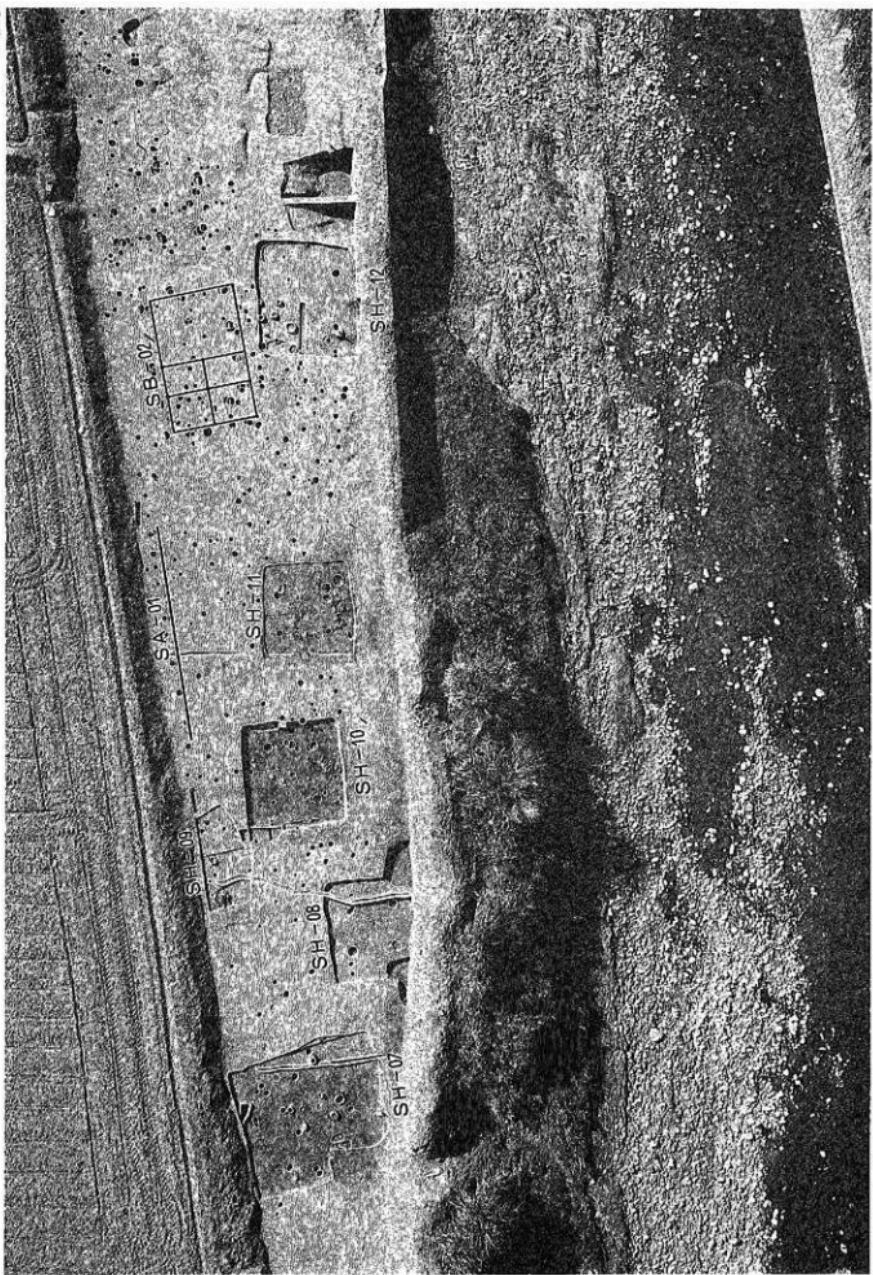
2. 第3地点2号竪穴式住居跡マド検出状況

3. 第3地点1号土壙  
全景 (西側より)

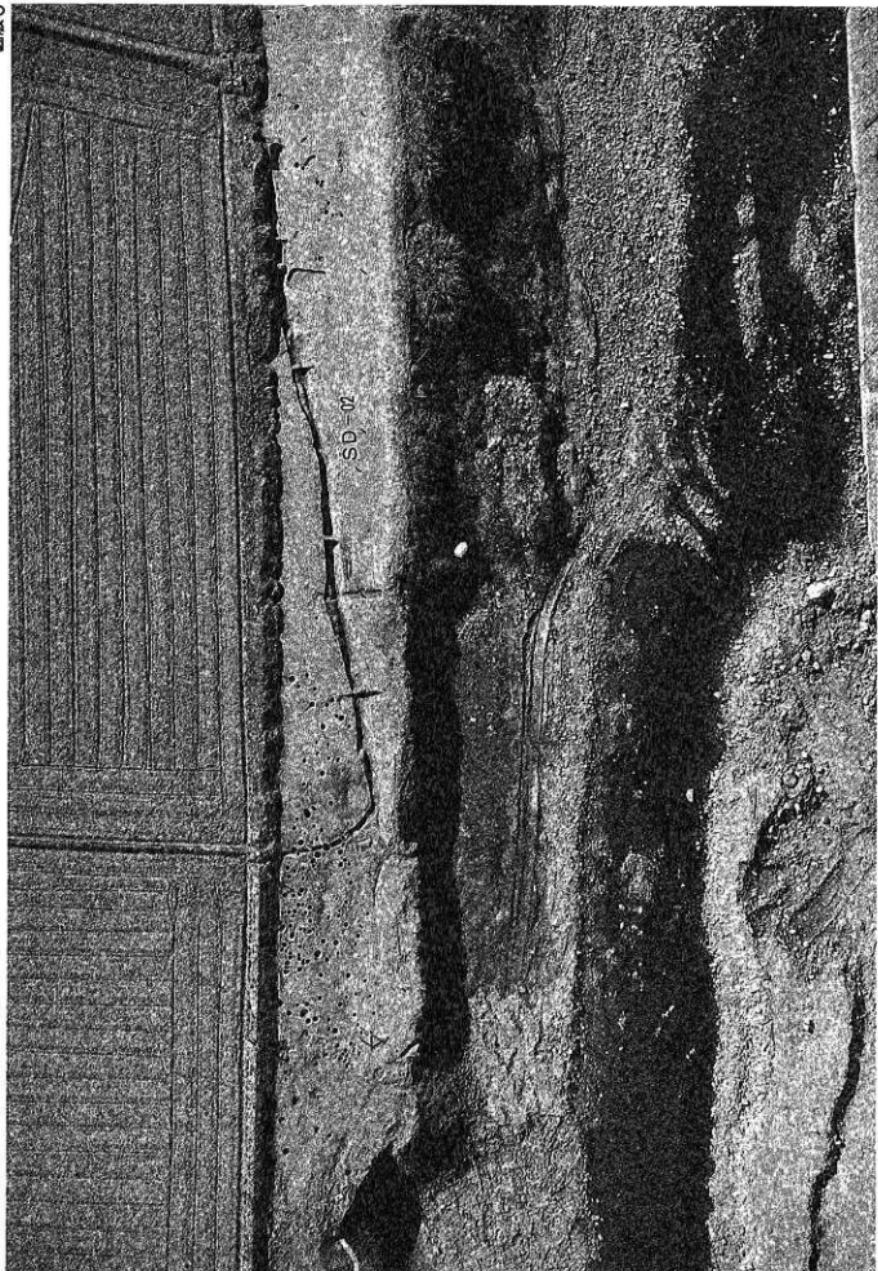


4. 第3地点包含層遺物検出状況





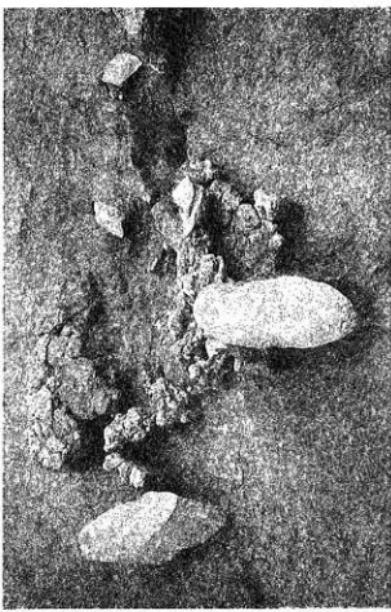
1. 犬丸川流域調査群第4地点全景（上空より）〔その1〕



1. 大丸川流域遠隔観測点4地点全景（上空より）（その2）



1. 第4地点10号竖穴式住居跡全景（西側より）

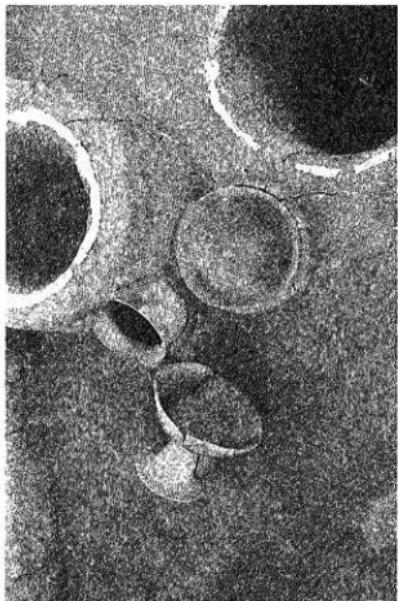


2. 第4地点10号竖穴式住居跡カマド焼出状況



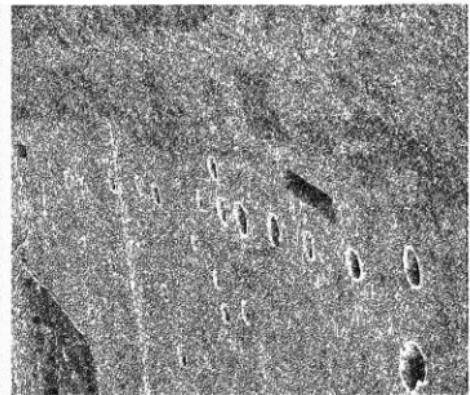
3. 第4地点7号竖穴式住居跡火床焼出状況

4. 第4地点7号竖穴式住居跡遺物出土状況

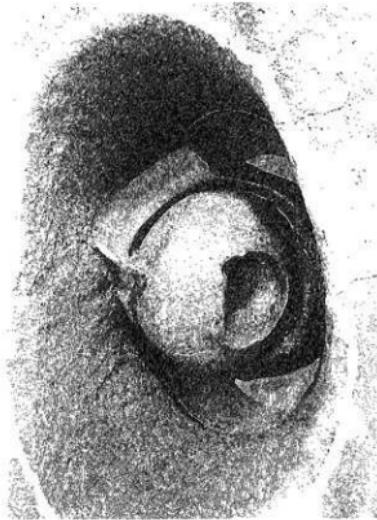
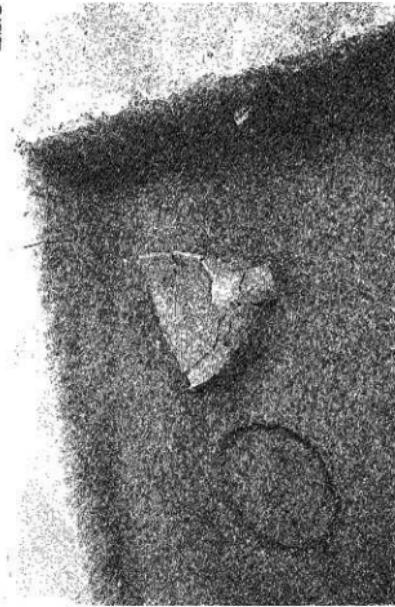


1. 第4地点7号竖穴式住居  
遺物検出状況

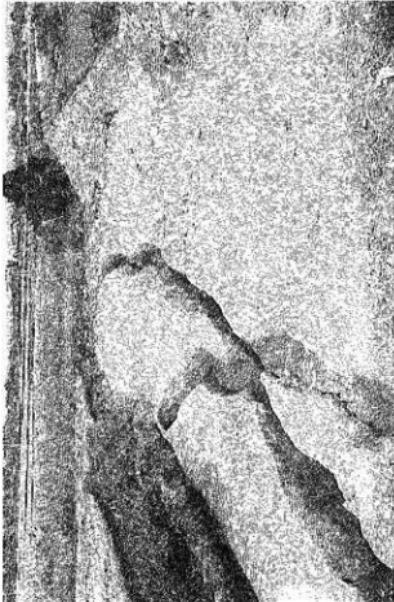
3. 第4地点遺物検出状況（下城式土器）



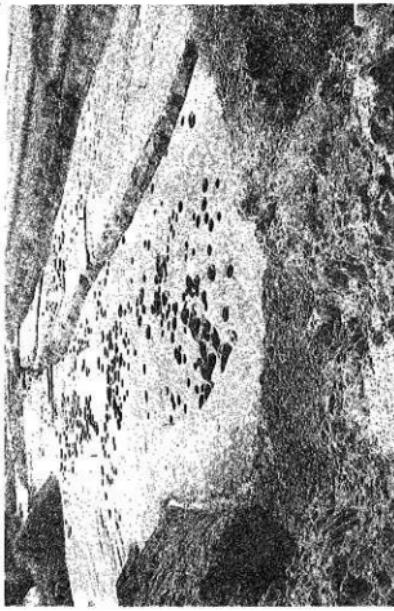
2. 第4地点1号櫛列罐全景（南側より）



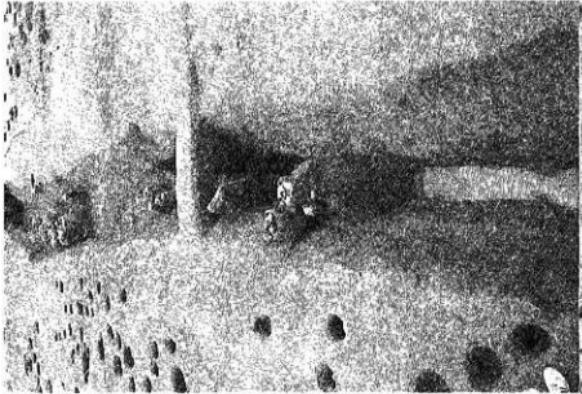
4. 第4地点6号土器遺物検出状況（小谷式土器）



1. 大丸川流域運搬群第5地点全景（南側より）



2. 大丸川流域運搬群第5地点全景（北側より）



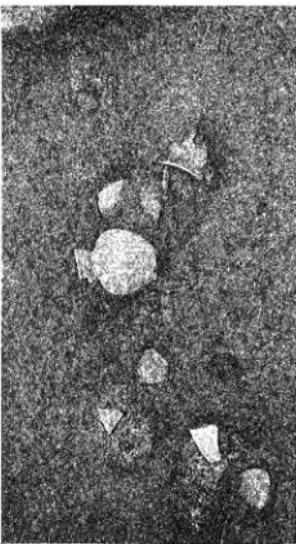
3. 第5地点1号 sondage  
（運搬全景（北側より））



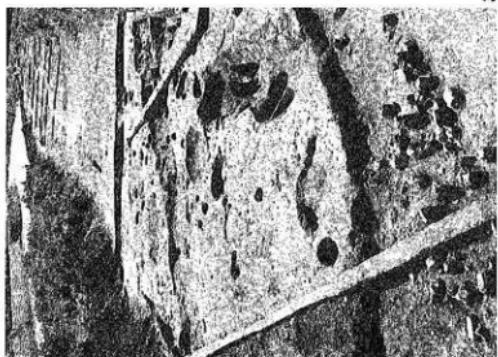
4. 第5地点1号、2号 sondage



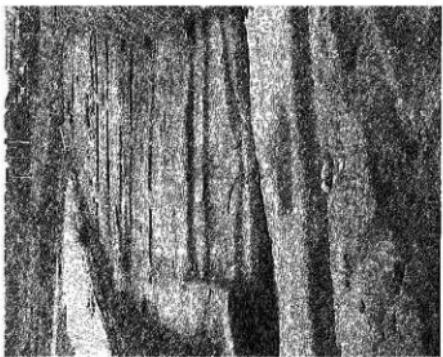
4



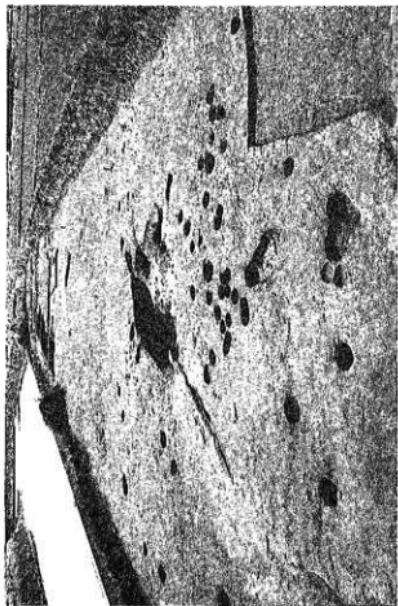
3



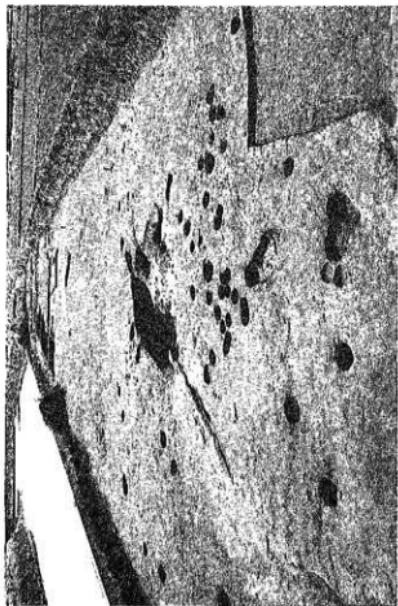
1. 大丸川流域遺跡第6地点全景（東側より）  
2. 第6地点1～4号溝状遺構検出状況（東側より）  
3. 第6地点5号土壙全景（南側より）  
4. 第6地点5号土壙遺物検出状況（南側より）



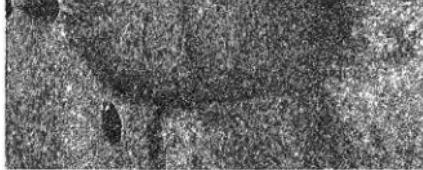
2. 第6地点1～4号溝状遺構検出状況（東側より）  
5. 第6地点5号土壙遺物検出状況（南側より）



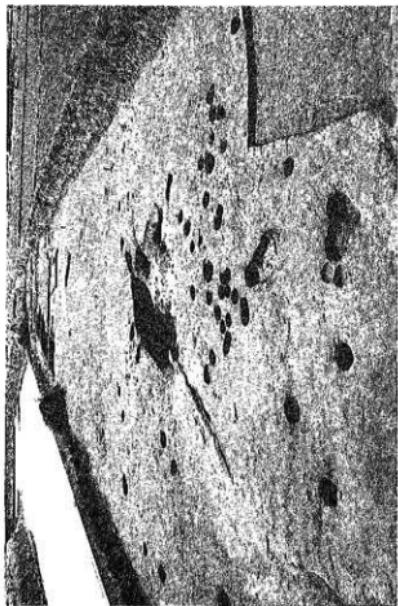
1. 第6地点西側全景（東側より）



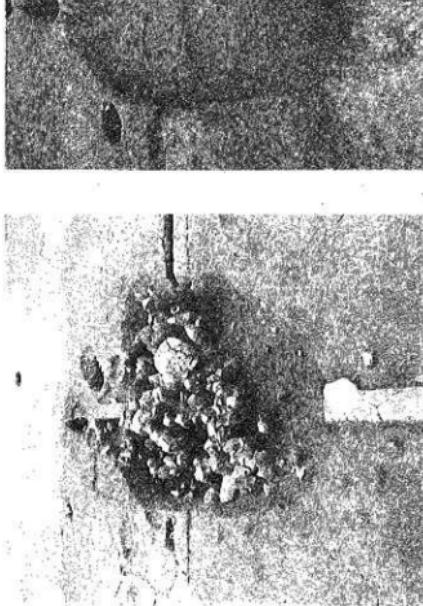
2. 第6地点2号土壤遺物検出状況  
(東側より)



3. 第6地点2号土壤完層状況  
(東側より)

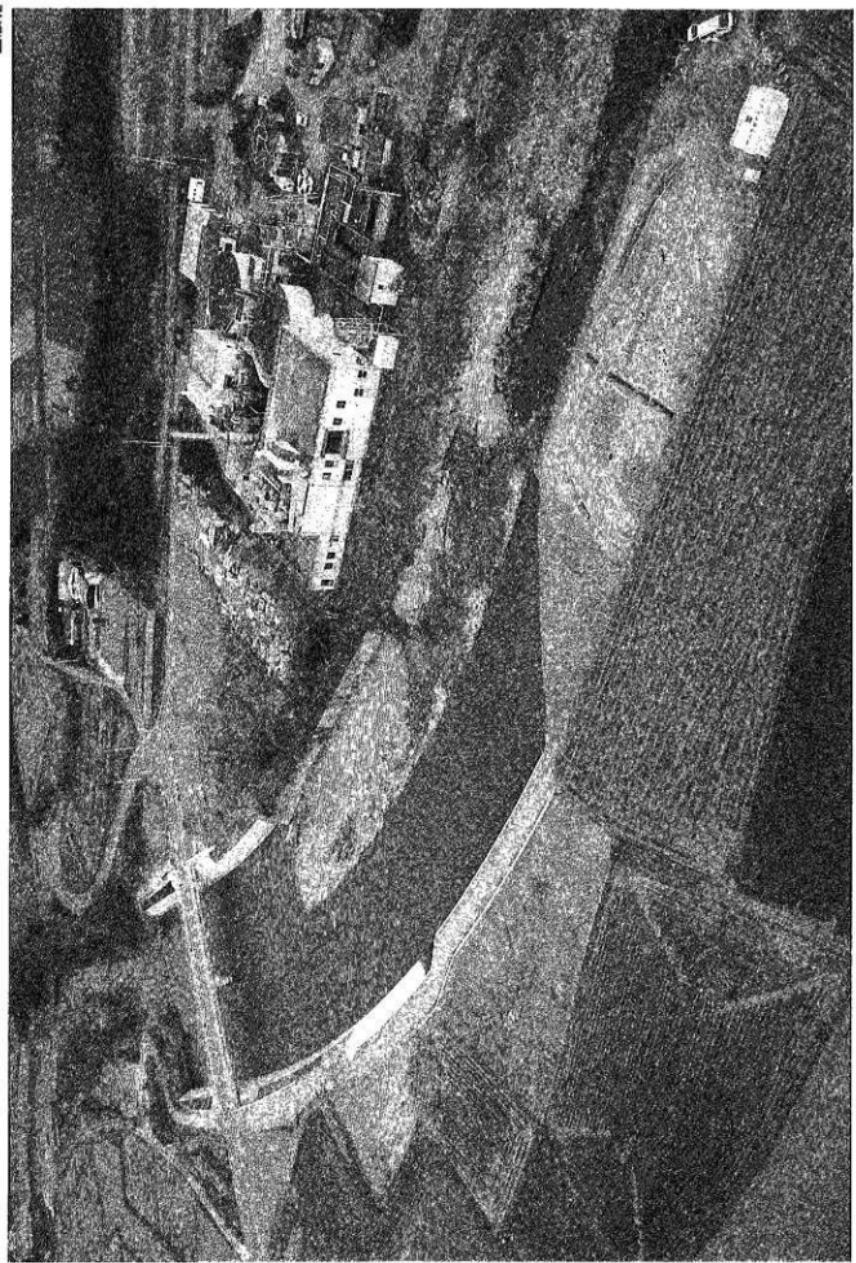


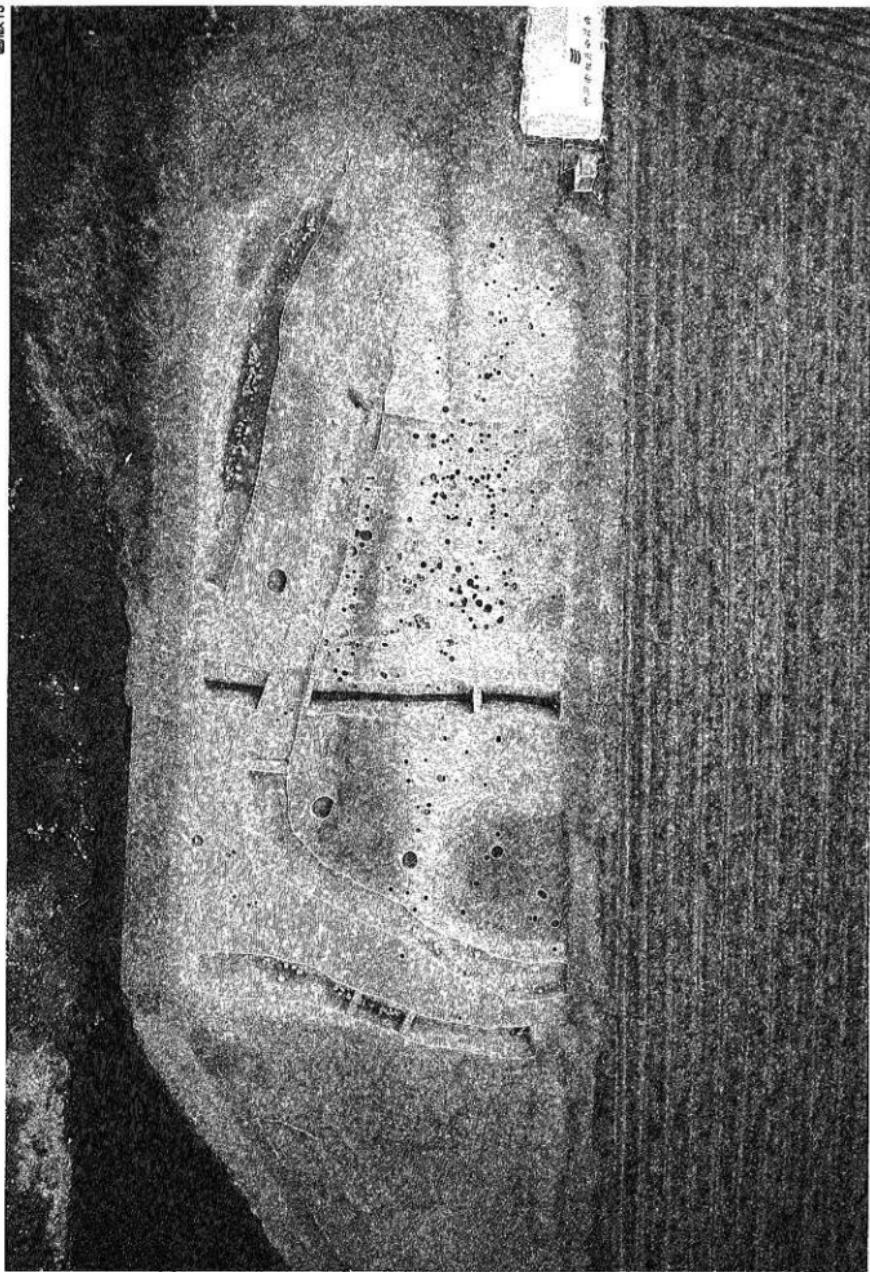
4. 第6地点西側遺物包埋層検出状況（東側より）



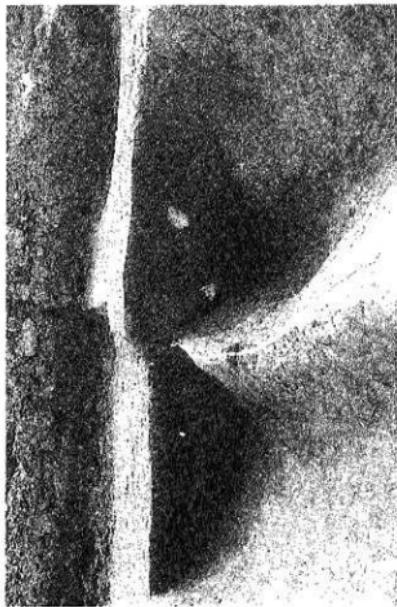
5. 第6地点西側包含層出土遺物

大丸川川河岸道路群第7地点要制遺景（南側上空より）





犬丸川流域調査群第7地点東側全景（尾輪上空より）



1. 第7地点1、4号溝状遺物全貌（東側より）

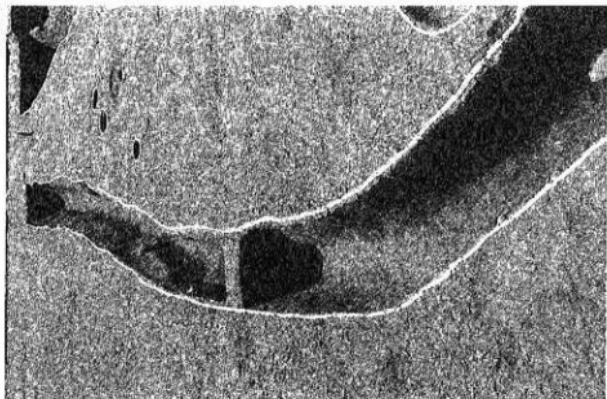


2. 第7地点1、4、5号溝状遺物全貌（南側より）

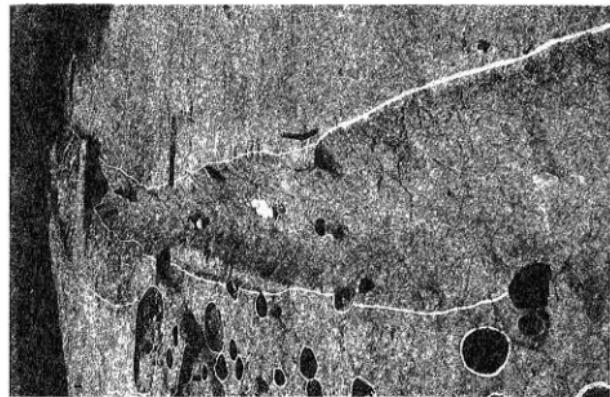
3. 第7地点1、4号溝状遺物遺物接出状況（北側より）



4. 第7地点2号溝状遺物接出状況（北側より）



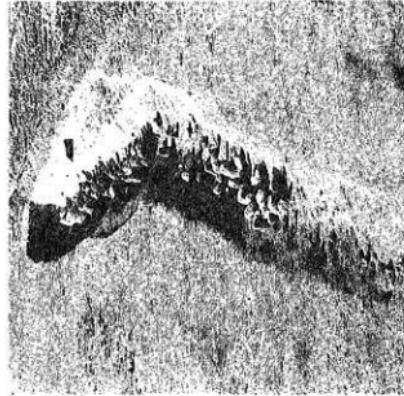
3. 第7地点5号海状遺構全景  
(北側より)



2. 第7地点3号海状遺構全景 (東側より)



1. 第7地点1号海状遺構遺物検出状況  
(北側より)



1. 第7地点栗角全景(栗側より) (后部)

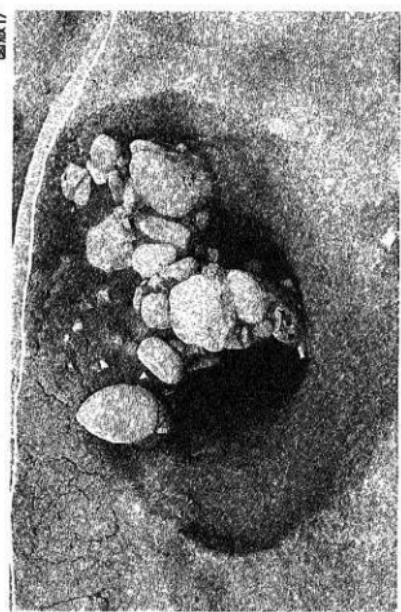


2. 第7地点栗角全景(栗側より)



3. 第7地点6号坑灰面遺物検出状況(栗側より)

4. 第7地点5号土坑遺物検出状況(栗側より)



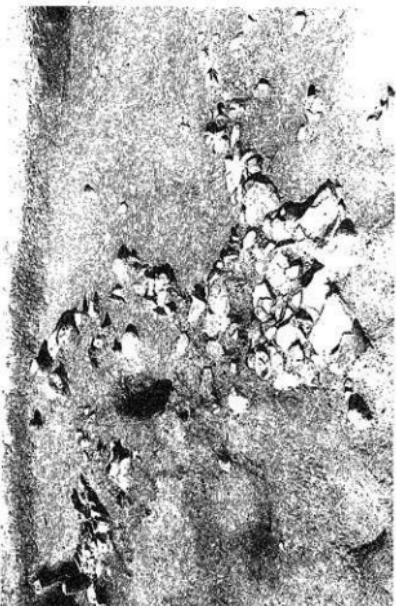
3. 第7地点1号井戸全景（南側より）



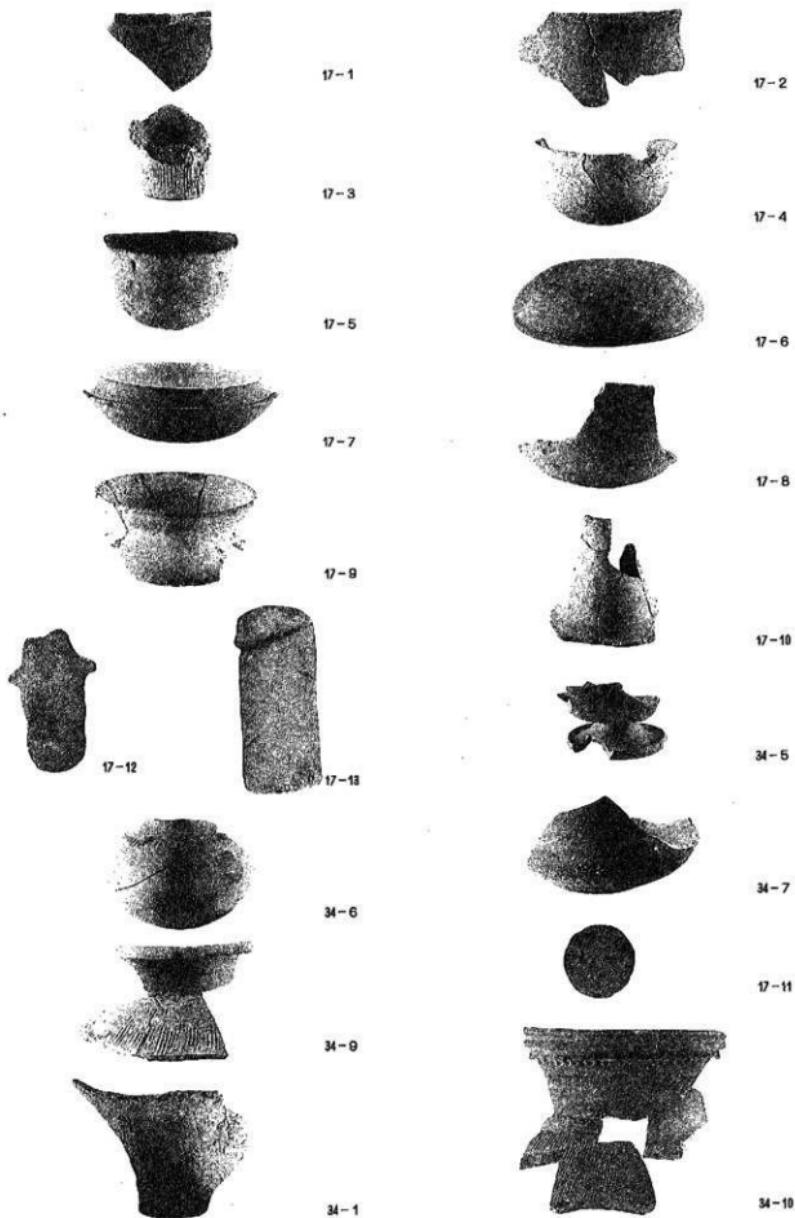
4. 第7地点1号井戸完掘状況（南側より）



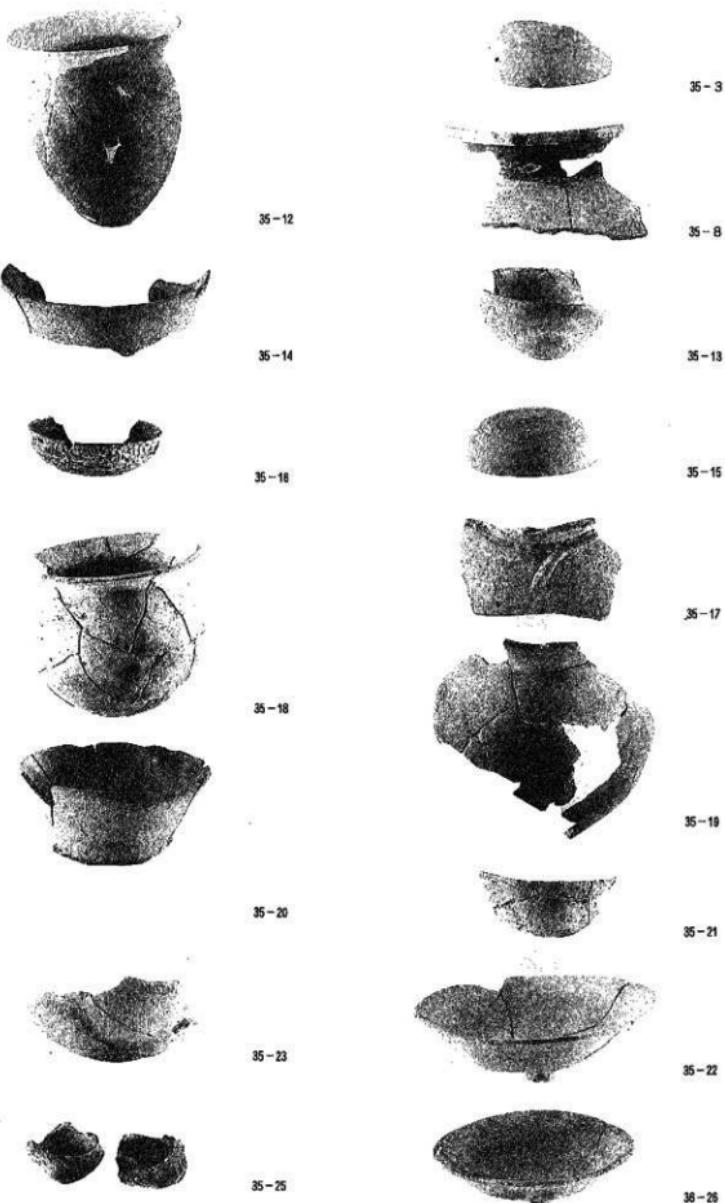
1. 第7地点4号土坑全景、3号溝状遺構下層発出状況



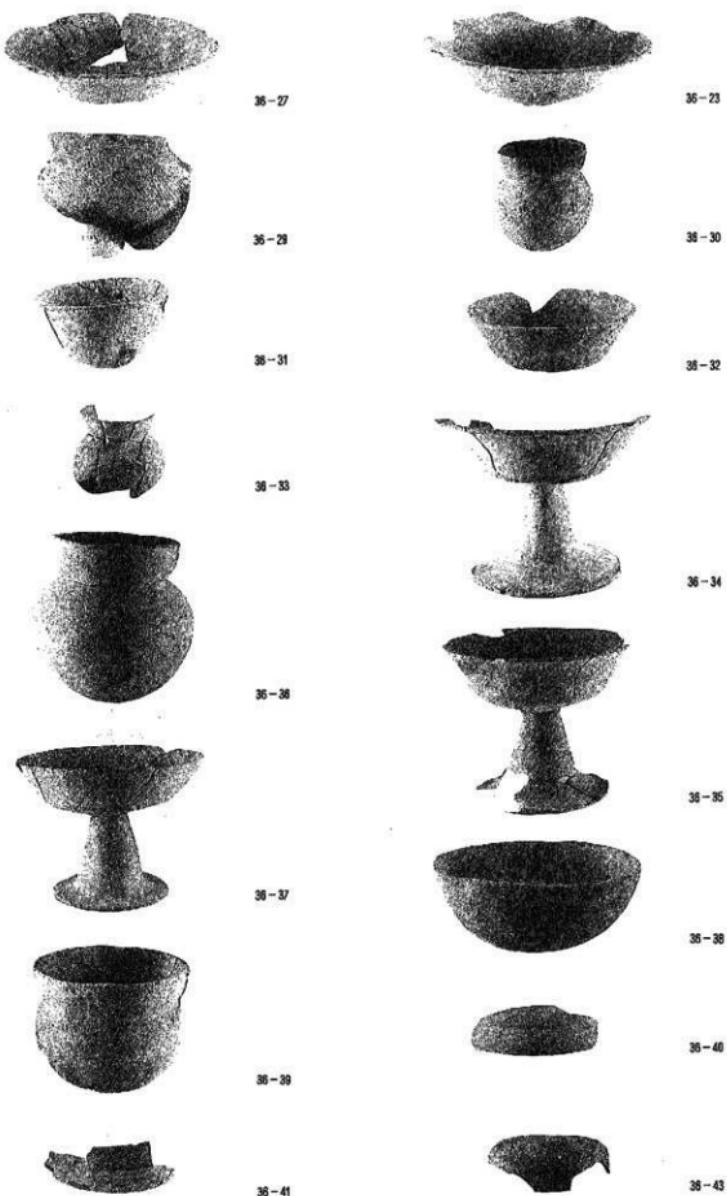
2. 第7地点3号溝状遺構下層土器群発出状況



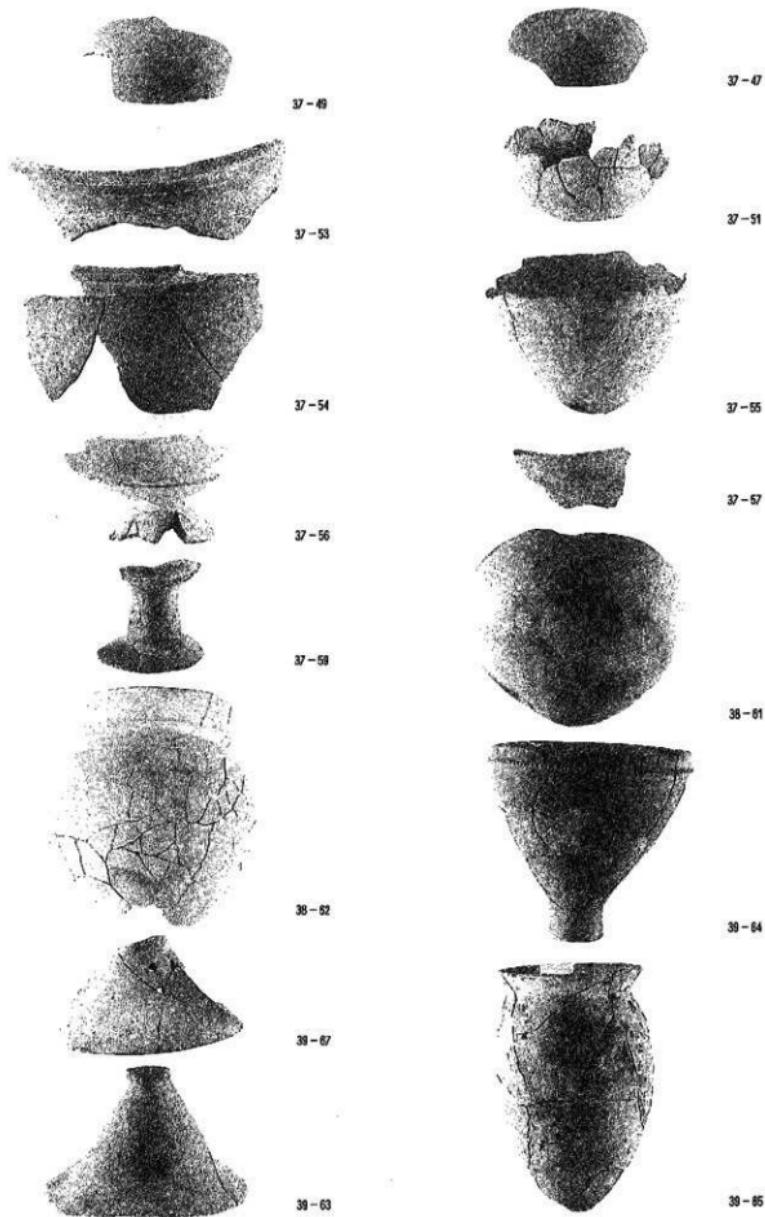
犬丸川流域遺跡群出土遺物①



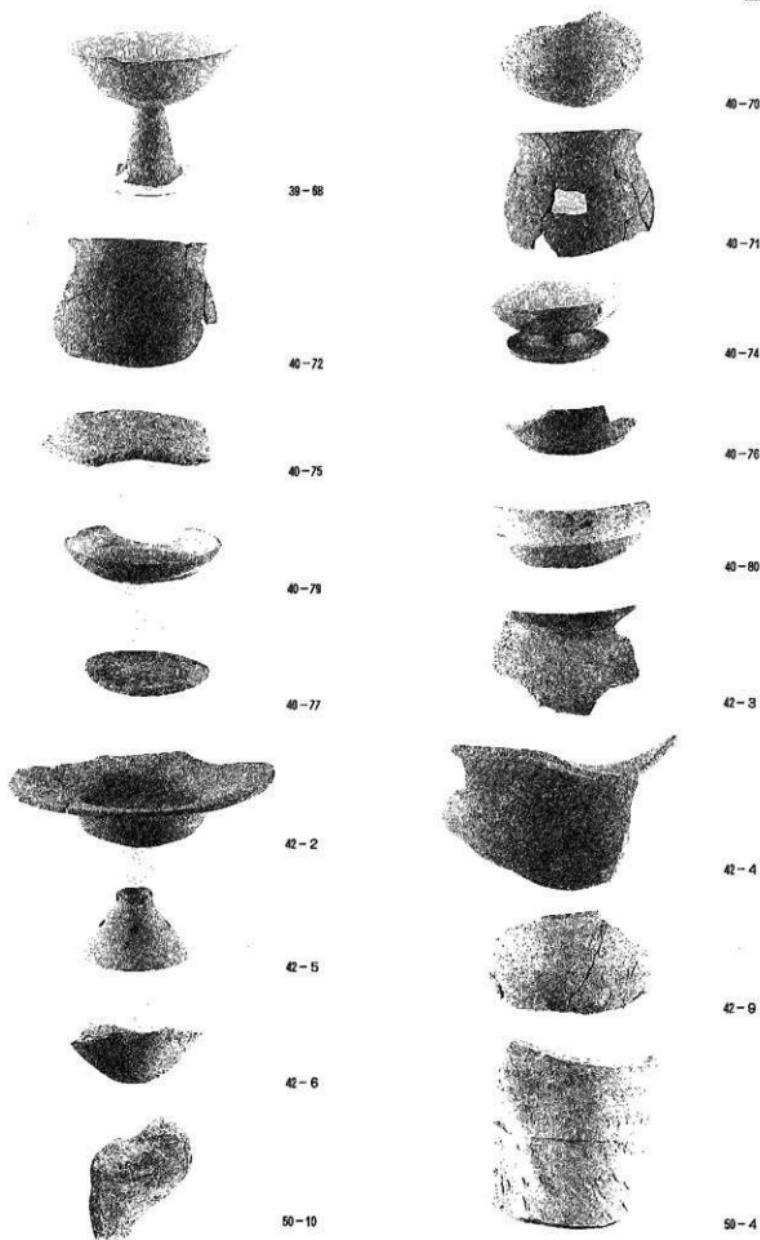
犬丸川流域遺跡群出土遺物②



犬丸川流域遺跡群出土遺物③



犬丸川流域遺跡群出土遺跡④



犬丸川流域遺跡群出土遺物⑤



50-6



50-13



50-16



50-17



50-19



50-18



51-22



51-20



51-23



51-24



51-25



51-28



51-31



51-26



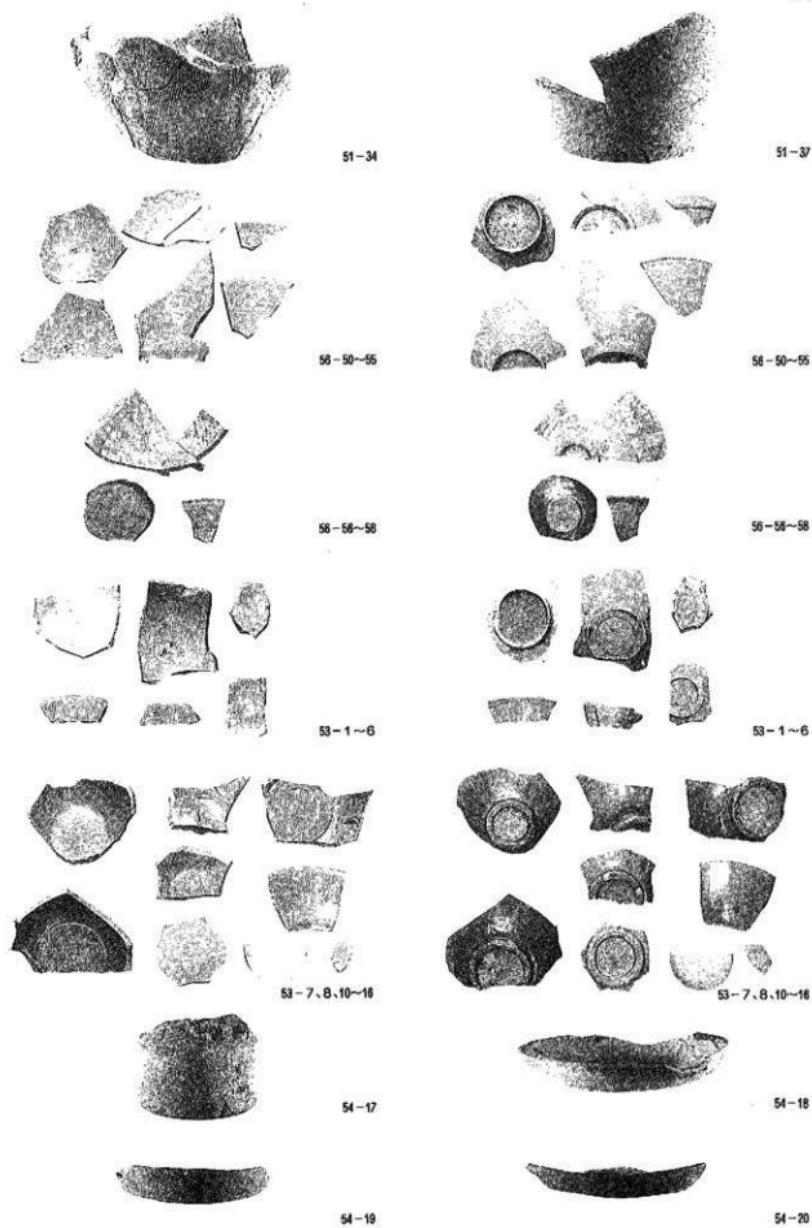
51-27



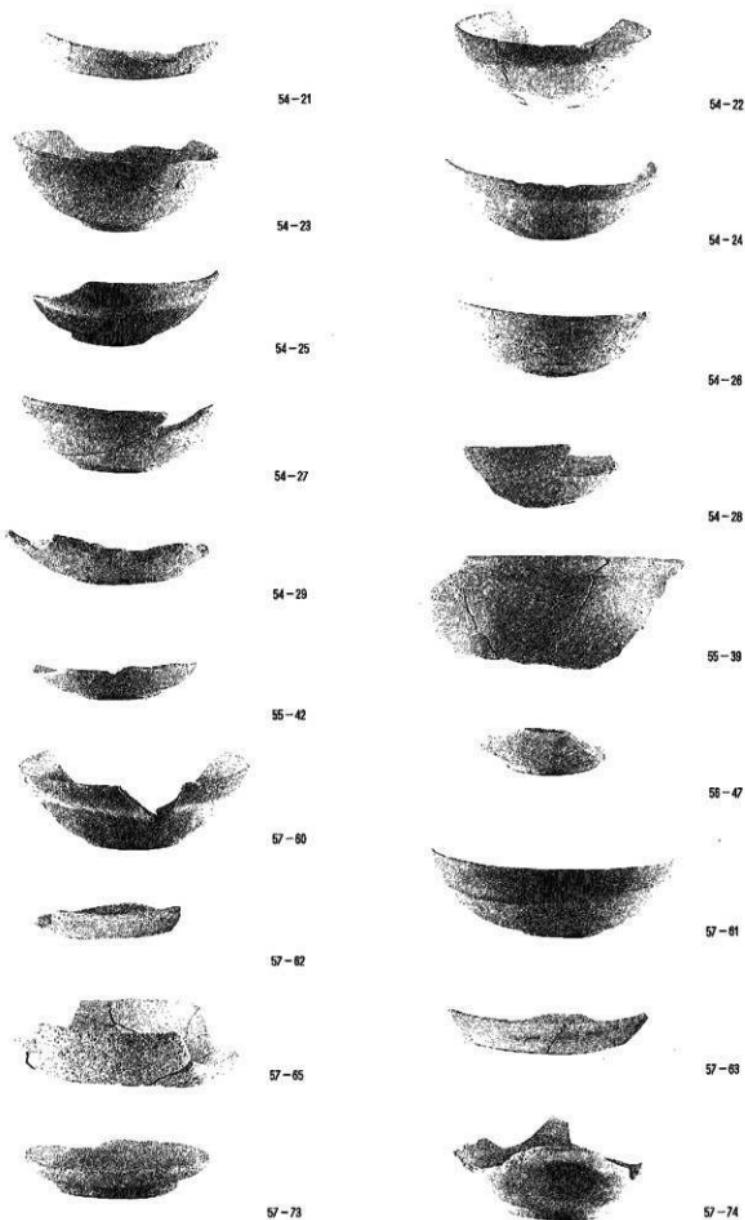
51-35



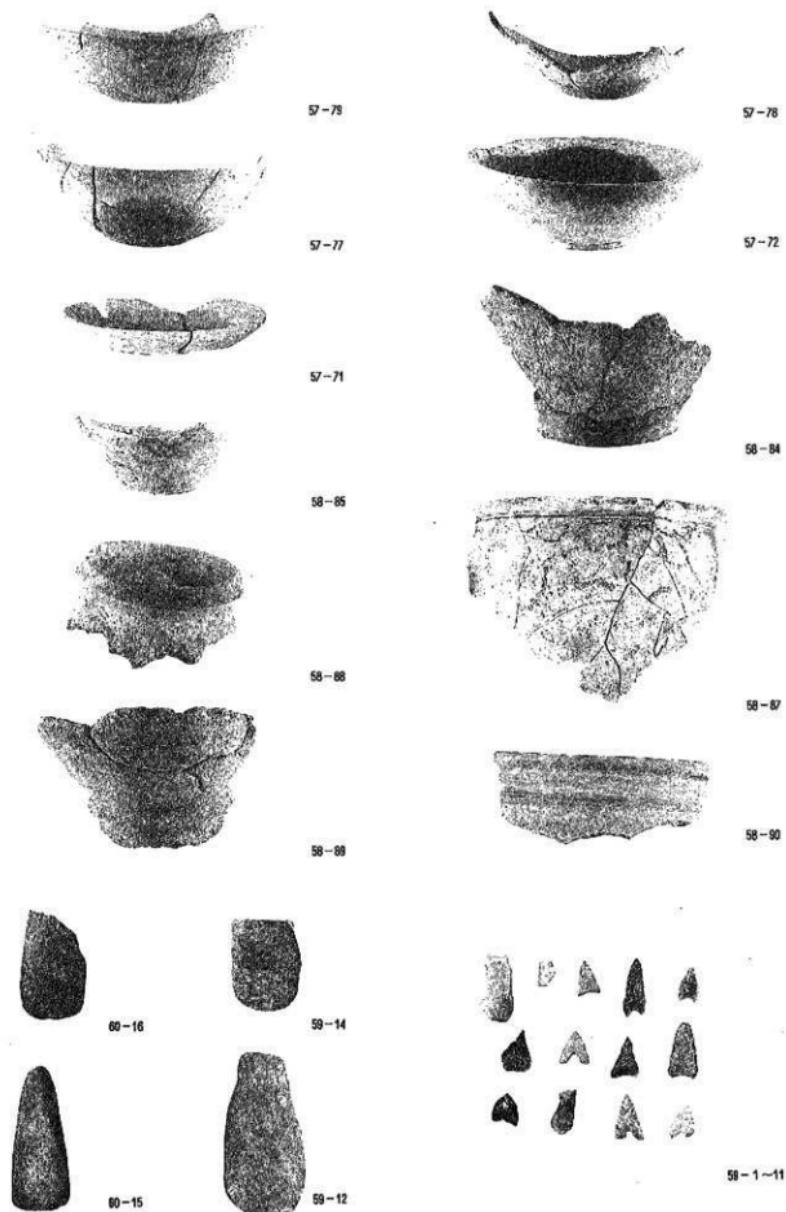
51-33



大丸川流域遺跡群出土遺物⑦



大丸川流域遺跡群出土遺物⑤



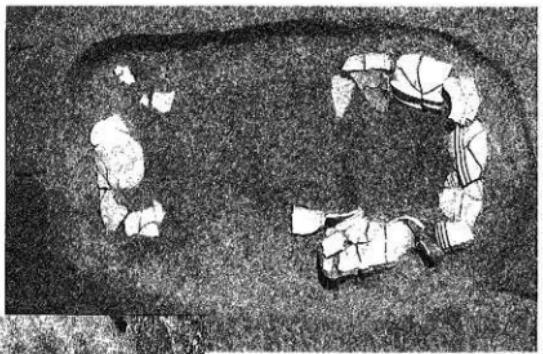
犬丸川流域遺跡群出土遺物⑤



3. 福島遺跡1号墓出土  
(小児用) (裏側より)



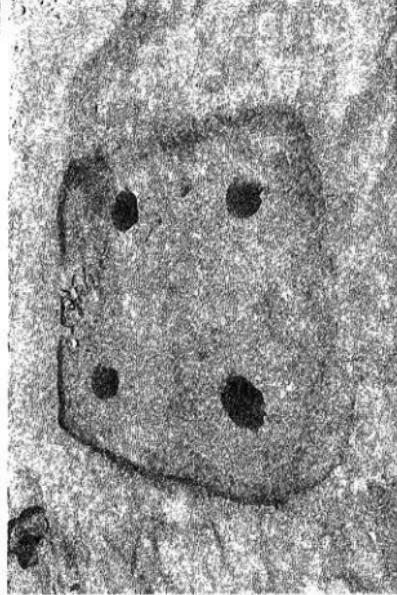
4. 福島遺跡2号土塙墓出土状況  
(北側より)



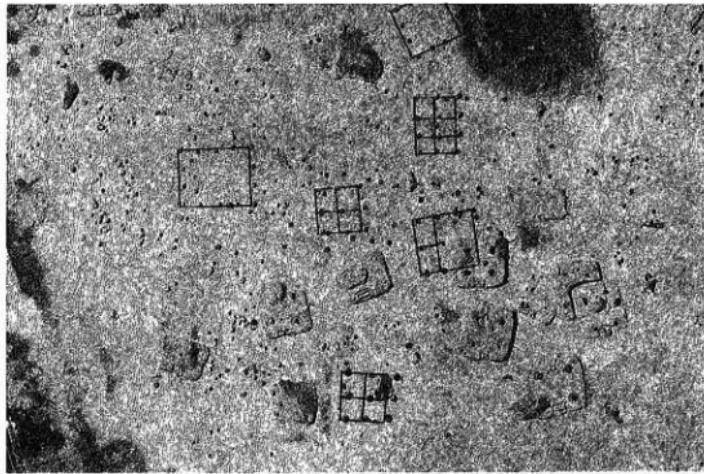
2. 福島遺跡10号土塙墓出土状況  
(南側より)



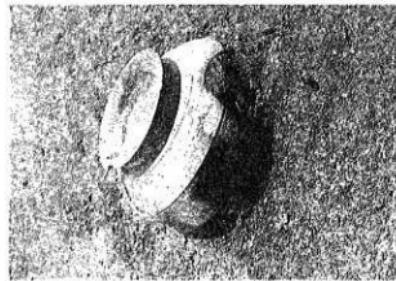
1. 福島遺跡10号土塙墓出土状況  
(南側より)



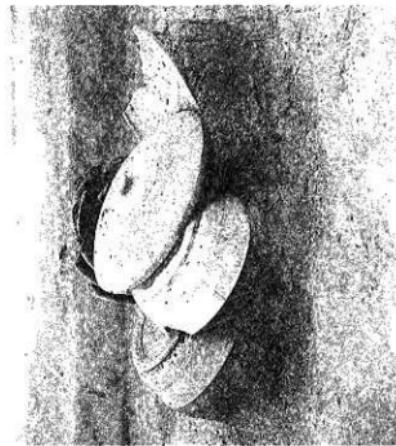
2. 中須遺跡3号竪穴式住居跡全景（南側より）



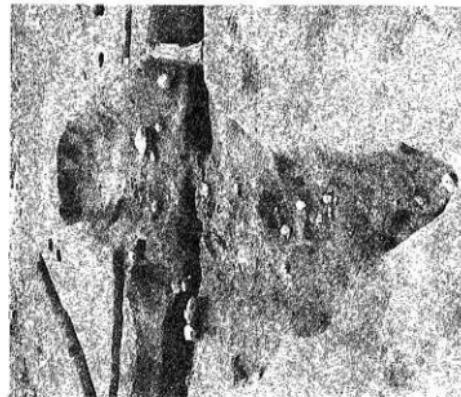
1. 中須遺跡全景（上空より）



3. 中須遺跡2号土坑遺物  
出土状況（桿）



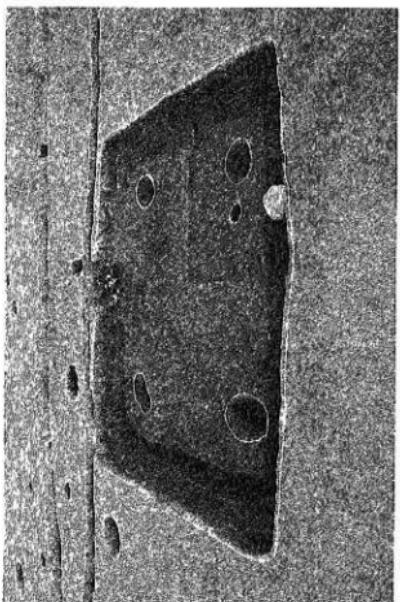
4. 中須遺跡10号竪穴式住居跡遺物出土状況



1. 前田遺跡第2地点全景（東側より）

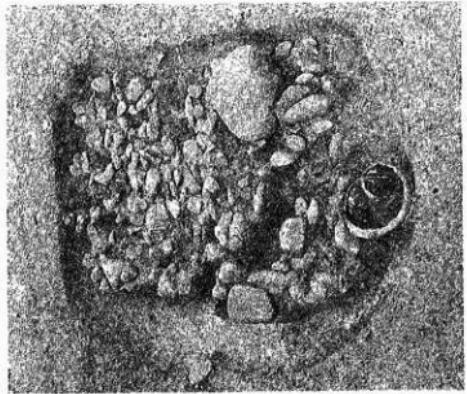


3. 前田遺跡第2地点15号土壙（井堰？）全景（西側より）

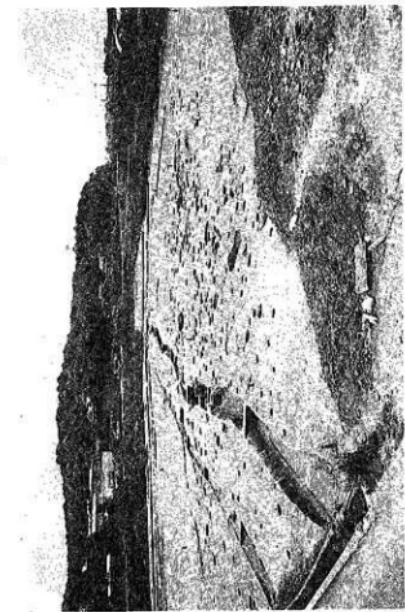


2. 前田遺跡第2地点3号堅穴式住居全景（南側より）

4. 前田遺跡第2地点1号土壙遺物出土状況



1. 十前垣遺跡全景（南側より）



2. 前田遺跡全景（東側より）

3. 前田遺跡1号土壙墓  
全景（南側より）



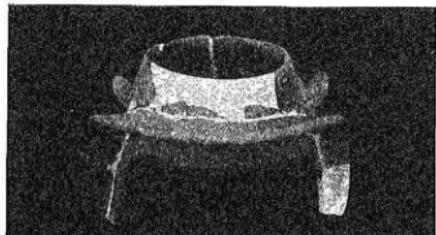
4. 前田遺跡1号井戸遺物出土状況（北側より）



福島遺跡2号土壤出土遺物



中須遺跡納壺埋納状況



十前垣遺跡2号竪穴式住居跡出土ヤマド



前田遺跡土壤出土青磁碗



城山19号墳出土馬具



前田遺跡1号井戸出土瓦器碗



前田遺跡第2地點1号土壤出土遺物



前田遺跡1号井戸出土土師器

犬丸川流域周辺出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	いぬまるがわりゅういきいせきぐん						
書名	犬丸川流域遺跡群						
副書名	犬丸川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	中津市文化財調査報告						
シリーズ番号	第19集						
編著者名	栗焼憲児						
編集機関	中津市教育委員会						
所在地	大分県中津市大字福島394番地外 大字伊藤田3642番地外 大字加来787番地外						
発行年月日	1997年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いぬまるがわりゅういきいせきぐん 犬丸川流域遺跡群	大分県中津市 大字福島 394外	44203	101074		19880401 ～ 19930331	35,000m <sup>2</sup>	河川改修
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
犬丸川流域遺跡群 第3地点 第4地点 第5地点 第6地点 第7地点	集落	古墳時代	竪穴式住居	土師器、土製品	二重環濠で区画される居館		
	集落	古墳時代	竪穴式住居	土師器、合子			
	集落	古墳時代	溝状造構	土師器			
	集落	古墳時代	土 壤	土師器、須恵器			
	集落	古墳時代	居 館	青・白磁、瓦器枕			

犬丸川流域遺跡群

発行 中津市教育委員会

中津市文化財調査報告

大分県中津市豊田町14-3

第19集

印刷 第一印刷株式会社

1997年3月31日

大分県中津市大字蛎瀬